

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
112	鉄塊系遺物	3.8	3.5	1.4	31		P-14-b	塊1
113	鉄塊系遺物	5.0	4.5	2.6	83		P-14-l	塊1
114	鉄塊系遺物	3.1	3.2	3.1	46		P-14-d	塊1
115	鉄塊系遺物	3.0	3.7	2.5	40		SSK4	塊1
116	鉄塊系遺物	4.2	3.6	2.3	79.4		P-14-c-6 分析資料No.3	塊2
117	鉄塊系遺物	2.1	3.2	1.3	19		SSK4	塊1
118	鉄塊系遺物	2.8	2.0	2.1	32		P-14-l	塊1
119	銅滓	2.1	2.7	1.6	18		P-14-d-8	他の滓
120	銅塊	1.4	2.2	1.3			P-14-p-5	銅1
121	銅滓	3.1	4.3	1.0	12		P-14-d-8	他の滓
122	銅滓	2.9	3.8	1.7	17		P-14-d-8	他の滓
123	鉄滓	3.7	5.1	3.1	78		P-14-o-8	滓1
124	鉄塊系遺物	4.3	6.6	3.0	151		P-14-d	塊1
125	鉄塊系遺物	3.8	5.7	1.2	92		P-14-p	塊1
126	鉄塊系遺物	3.3	6.2	0.6	50		P-14-d-7	塊2
127	鉄製品	2.2	5.3	1.4	23		P-14-b-8	塊2
128	鉄塊系遺物	2.9	5.3	0.3	22		P-14-c-7	塊2
129	鉄塊系遺物	4.2	3.7	0.3	23		P-14-h-1	塊2
130	鉄塊系遺物	3.2	3.5	(0.3)	13		P-14-c-7	塊2
131	鉄塊系遺物	3.2	3.2	0.3	15		P-14-h-1	塊2
132	鉄塊系遺物	2.9	3.7	0.3	0.5		P-14-d-4	塊2
133	鉄塊系遺物	4.5	2.7	0.4	20		P-14-g-8	塊2
134	鉄塊系遺物	2.5	4.0	0.3	10		P-14-g-9	塊2
135	鉄塊系遺物	2.5	2.5	0.2	7		SSK2	塊1
136	鉄塊系遺物	2.6	2.2	0.4	10		P-14-g-8	塊2

第41表 第11鑄造遺構群一覽表

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-11 SSK01	SS-11 SK01	P-14-b	円形	1.30		0.13	N-72°-W
SSK02	SK02	P-14-g	正方形	1.38	1.32	0.15	N-14°-W
SSK03	SK03	P-14-g	長方形	1.37	1.00	0.19	N-21°-W
SSK04	SK04	P-14-l	長方形	1.30	1.03	0.22	N-21°-W
SSK05	SK05	P-14-o	円形	0.68		0.24	N-18°-W
SSK06	SK06	P-14-o	長方形	(0.57)	0.30	0.12	N-39°-W
SSK07	SK07	P-14-k	不整形	1.38	0.54	0.35	N-25°-W
第1号鑄込み	第1鑄込み	P-14-l	円形	0.45		0.18	
第2号鑄込み	第2鑄込み	P-14-l	円形	0.83		0.25	
第1号炉	1号炉	P-14-f	円形	0.33		0.08	

h 第12鑄造遺構群

調査区の南東にあたり東側の二段からなる緩斜面の中間にあたるテラス部分および第2斜面に遺構の広がりを持つ。本群の北西側には第10鑄造遺構群、北側には第11鑄造遺構群が存在する。また、東側には第30号溝跡によって区切られている。本群は第1号鑄造土壙と堆積層中から検出された鑄造遺物の集中範囲から構成されている。また、西側には第10鑄造遺構群の第5号鑄造土壙から伸びる第26号溝跡が湾曲して本群の第1号鑄造土壙に続いている。

本群は全体に鑄造遺物や焼土塊・焼土粒子・炭化物を含む黒褐色土の堆積層に覆われていた。この堆積層を1mのメッシュ（小グリッド）単位に遺物を取り上げた。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口等の鑄造遺物を検出した。

遺構

第1号鑄造土壙（第328図）

本土壙は東緩斜面のテラス部分に位置し、東側には第30号溝跡が位置し、本群の中央を東西には第26号溝跡が東西方向に走る。鑄造土壙の形態は確認面では楕円形であるが半ばからは円形をしていた。覆土はしまり良く焼土粒子を含む。形態を円形に変える部分には酸化鉄層が見られた。規模は長径1.78m、短径1.42m、深さ1.30mであり、本区検出の第10・11号井戸跡と立地状況や規模が似ており、井戸跡の可能性も考えられる。

また、本土壙の周辺には鑄造遺物が検出され、南側のR-15グリッドからは鑄造遺物が多く認められた。主な遺構の検出はされなかったが、ピットを確認した。

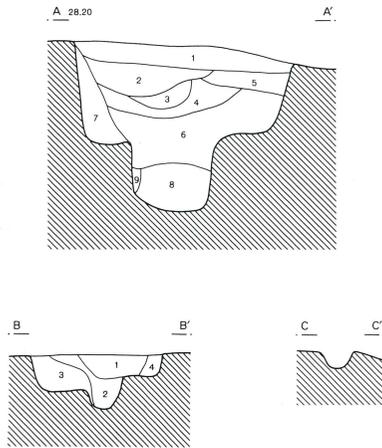
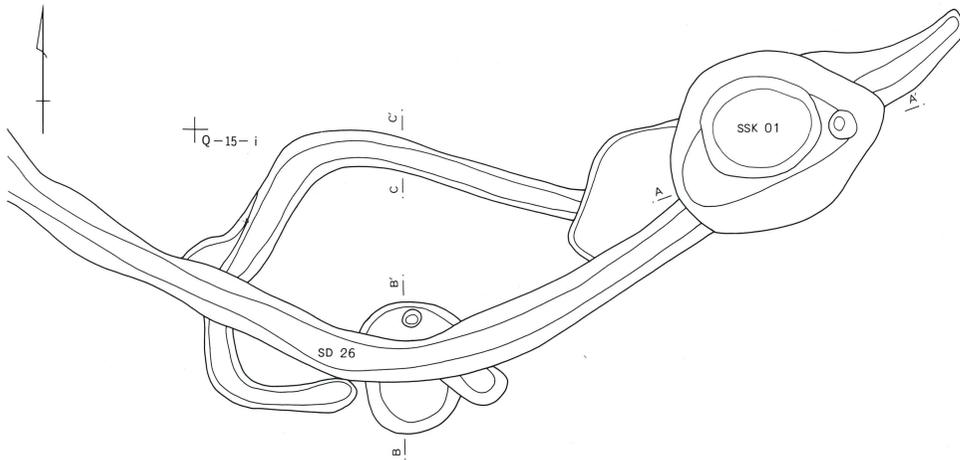
検出した鑄造遺物は鉄塊、炉壁、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口を検出した。中でも、鑄型は少量ながらも容器、梵鐘、獸脚、仏具と多種におよぶ。

遺物

第12鑄造遺構群から検出した鑄造遺物は、全て分類計量した。その結果、鉄塊2259g、炉壁32877g、銅滓20g、鉄滓27853g、木炭1156g、白色滓956g、石3413g、鑄型1834g、土器1774g、羽口4109g、粘土塊363gを計量した。この内、鑄型は容器80g、梵鐘407g、獸脚72g、他の脚53g、仏具142gを計量した。



第12鑄造遺構群(手前)



第1号鑄造土壇

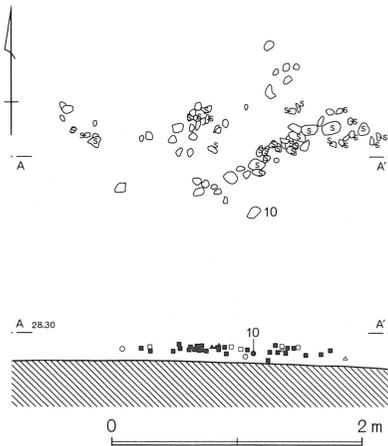
- 1 明褐色土 焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。
- 2 明褐色土 焼土ブロックを多く含み、炭化粒子、砂利を混在。
- 3 明褐色土 焼土粒子を多く、炭化粒子も含む。
- 4 褐色土 しまりやや弱く、炭化・焼土粒子を若干含む。
- 5 暗褐色土 きめやや粗雑。焼土・炭化粒子を混在。
- 6 暗褐色土 しまりややもつ。ロームブロック、焼土・炭化粒子を含む。
- 7 黒褐色土 しまり強い。
- 8 暗褐色土 砂粒子を多く含み、ローム土を混在。
- 9 黒褐色土 粘性をもち、砂利を混在。

SD-26

- 1 黄褐色土 ローム土を混在。焼土・炭化・ローム粒子、砂利を含み、しまりもつ。
- 2 赤褐色土 焼土・炭化粒子をやや多く含み、しまりやや弱い。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、砂利を多く含む。しまりもつ。
- 4 黒褐色土 焼土・炭化粒子を含む。

0 2 m

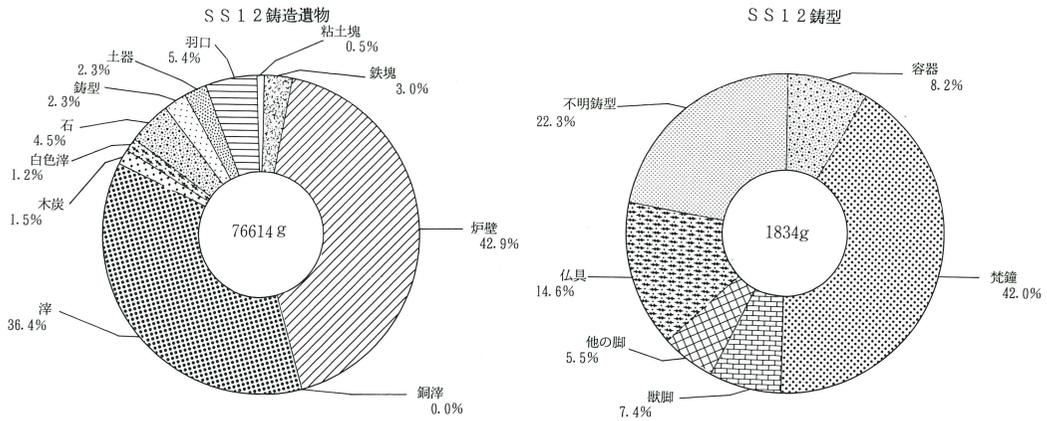
第328図 第12群第1号鑄造土壇



土器は1の龍泉窯系の青磁碗を検出した。3・4は常滑系の片口鉢である。5は在地産の片口鉢であるが、二次的な被熱が見られ淡い桜色をしている。羽口は6の口径がやや大きいものを検出した。外面には鈍い黒色の地に紫紅色の部分が見られる。羽口端面は残存し幅1.3cmの平坦面が認められる。この部分は赤紫色で、ざらざらした木肌である。内面は酸化状態のため赤色粘土が残る。

第329図 第12鑄造遺構群グリッド遺物分布図

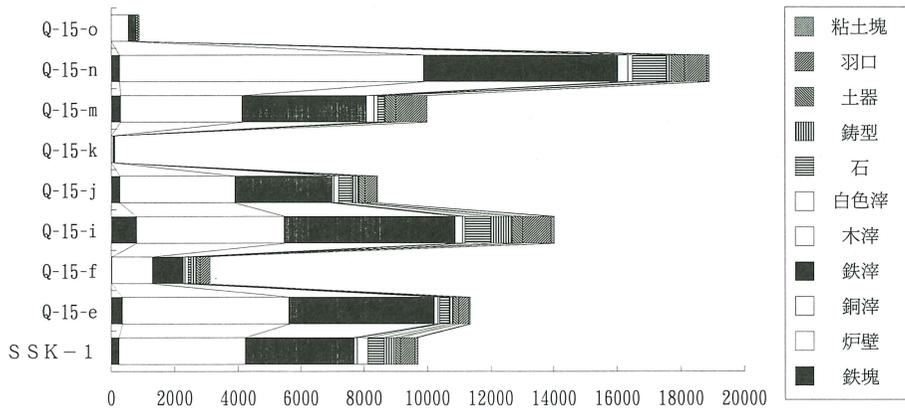
第42表 第12鑄造遺構群遺物計量表(1)



小番号	鉄塊	炉壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
SSK-1	253	3980	0	3457	105	323	517	360	156	462	94
Q-15-e	352	5265	3	4602	123	44	296	130	174	316	52
Q-15-f	25	1282	0	953	66	102	77	209	122	326	0
Q-15-i	803	4666	6	5405	233	74	798	701	320	912	112
Q-15-j	271	3635	0	3089	60	145	417	231	182	376	30
Q-15-k	0	60	0	31	0	0	0	0	0	34	0
Q-15-m	290	3834	0	3941	246	122	200	33	330	1009	0
Q-15-n	263	9615	11	6137	321	143	1047	165	409	708	75
Q-15-o	2	540	0	238	2	3	61	5	47	0	0
合計	2259	32877	20	27853	1156	956	3413	1834	1774	4109	363

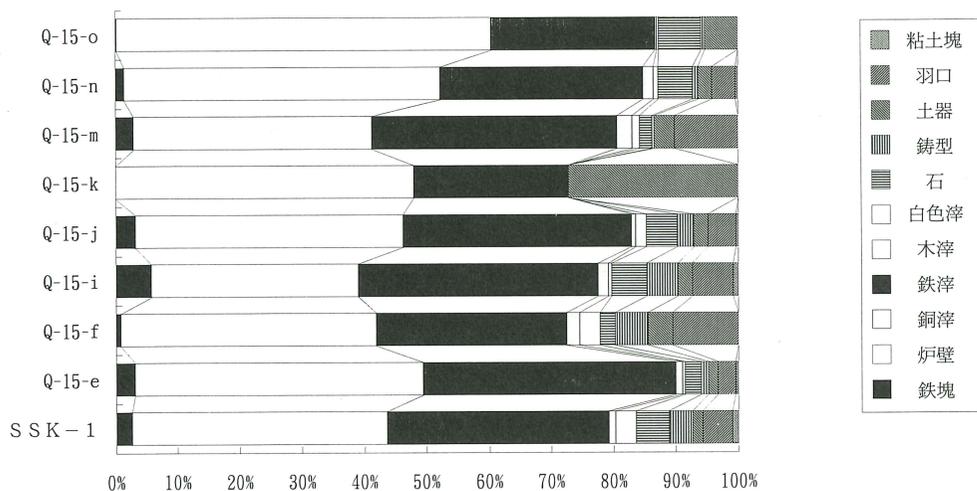
小番号	鍋	容器	梵鐘	獸脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
SSK-1	0	75	23	20	0	82	160	0	200	360
Q-15-e	0	0	38	77	0	0	15	0	115	130
Q-15-f	0	0	155	12	0	0	42	0	167	209
Q-15-i	0	26	99	70	0	0	506	0	195	701
Q-15-j	0	5	152	35	0	32	7	5	219	231
Q-15-m	0	0	0	0	0	0	33	0	0	33
Q-15-n	0	0	72	5	53	28	7	0	158	165
Q-15-o	0	0	5	0	0	0	0	0	5	5
合計	0	106	544	219	53	142	770	0	1064	1834

SS12鑄造遺物

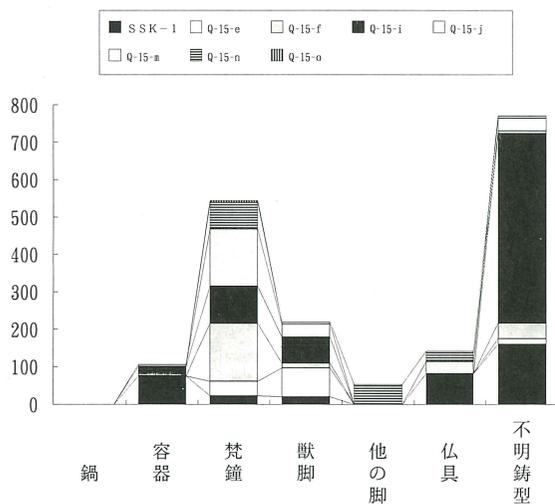


第43表 第12铸造遺構群遺物計量表(2)

SS12铸造遺物

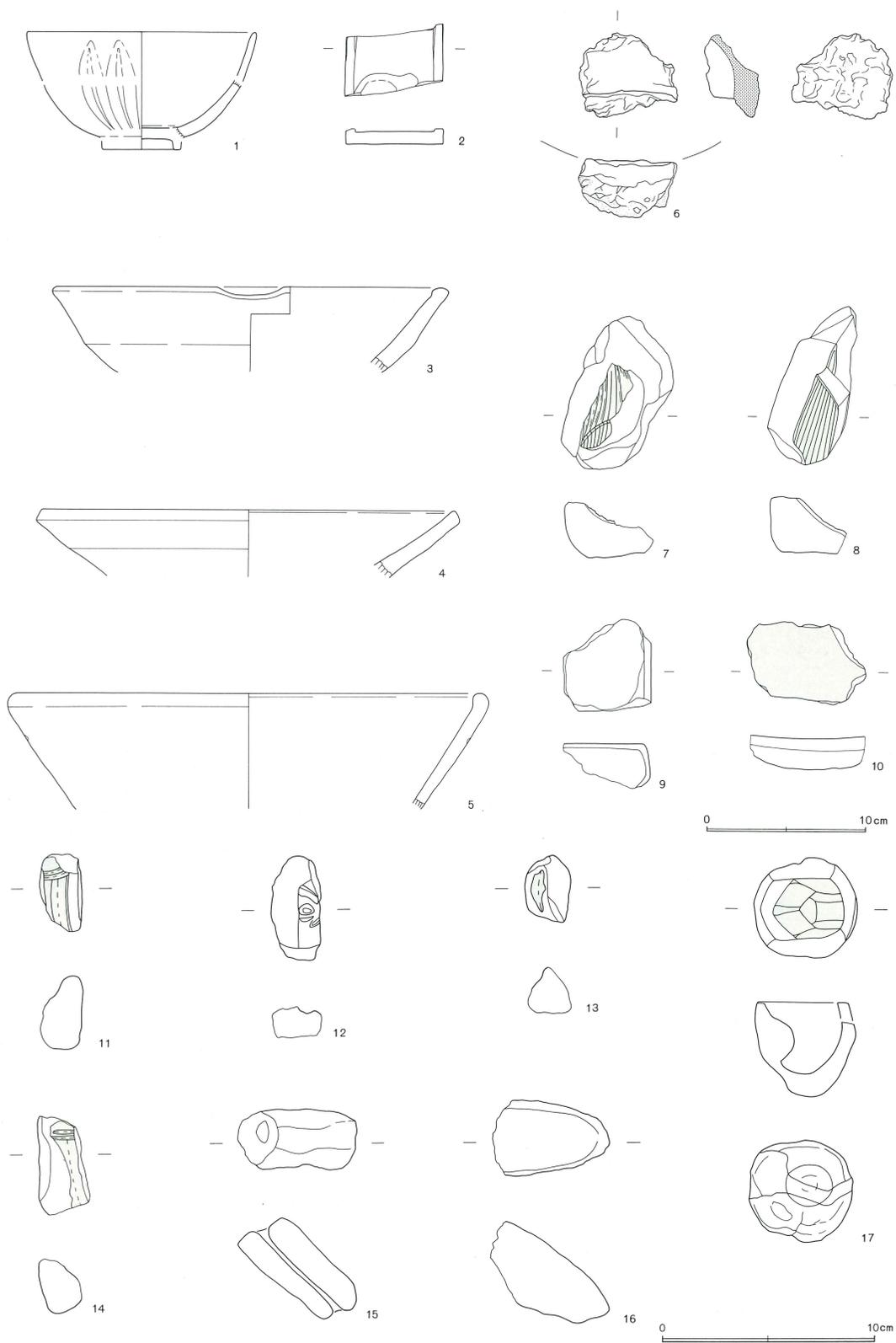


SS12鑄型

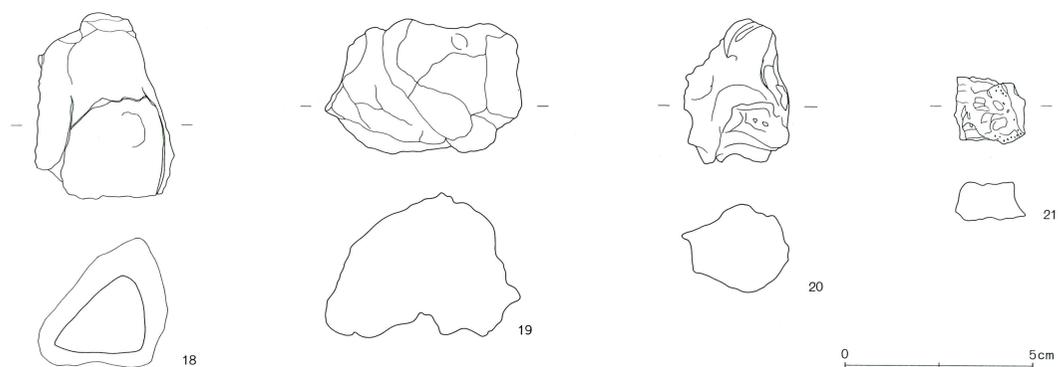


鑄型は梵鐘、獸脚、脚を検出した。7・8は梵鐘の龍頭鑄型であり、目の上の鬣部分である。外型はややきめの粗く、すさや砂粒子、鉄粒を含んだ真土で作り、その上に、きめの細かい仕上げ真土を2～3mm程載せて型押ししている。また、一部に、黒味の痕が見られる。仕上げ真土は鑄込みにより還元状態となるため青灰色である。形態は内面が基型によって押し込まれ龍頭の形態を作り外周に幅1.7cm前後の合わせ部分をもつ。裏面は平坦であり、側面はやや開いて立上がる。

道具は三叉状土製品の一部を検出した。特に、15は粘土盤を丸め蒲鉾状に作り、中空である。このような作りは他に見られない。



第330图 第12铸造遗构群出土遗物(1)



第331図 第12群出土遺物(2)

第12群出土遺物観察表 (第330図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗		3.7		I	A	淡緑色	10%	Q-15-n-3 椀 I 5 b	中国・龍泉
3	片口鉢	24.0	5.3		C I	B	灰褐色	10%	Q-15-n-3	常滑
4	片口鉢	26.0	4.2		I	A	茶褐色	5%	Q-15-f-4	常滑
5	片口鉢	29.8	7.2		C D E G	B	赤褐色	10%	Q-15-j-5	在地

第12群出土鑄造遺物観察表 (第330・331図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
2	硯	3.8	6.2	1.0	49		Q-15-j-2	石
6	羽口	5.2	6.0	3.2	68	直径 (22.0)	Q-15-f-2	羽口
7	梵鐘 龍頭	9.3	6.2	3.2	150		Q-15-f-7	鑄型
8	梵鐘 龍頭	8.6	4.8	3.4	134		Q-15-j-4	鑄型
9	不明	5.6	5.5	2.8	85		S S K 1	鑄型
10	梵鐘	4.9	7.1	1.9	74		Q-15-n-4 No.34	鑄型
11	獸脚	(3.1)	(1.6)	3.5	20		Q-15-j-4	鑄型
12	獸脚	4.8	2.4	(1.4)	13		Q-15-n-3	鑄型
13	獸脚	3.1	3.2	(3.2)	11		Q-15-f-2	鑄型
14	獸脚	(3.8)	(0.6)	(2.5)	20		S S K 1	鑄型
15	三叉状土製品			2.2	47		Q-15-n-2	土器
16	三叉状土製品			3.1	51		S S K 1	土器
17	獸脚	4.8	4.9	4.5	55		Q-15-n-2	鑄型
18	鉄塊系遺物	4.8	3.4	2.0	70		S S K 1	塊 1
19	鉄塊系遺物	3.5	5.2	3.7	95		S S K 1	塊 1
20	鉄滓	3.7	2.8	2.3	20		P-14-n	他の滓
21	銅滓	1.6	1.8	(1.0)	10		Q-15-n-8	銅 1

第44表 第12群出土鑄造遺物一覽表

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
S S -12 S S K 01	S S -12 S K 01	Q-15-f	楕円形	1.78	1.42	1.30	N-68°-E

i 第13鑄造遺構群

調査区東側の二段からなる緩斜面の中間にあたるテラス部分および第二斜面に検出された。本群の所在する位置になると第二斜面は比高差があまり見られず第一斜面肩部からなだらかに傾斜している。南側には第11鑄造遺構群が第27号溝跡を境に存在し、東側は第30号溝跡によって区切られている、北側には鑄造遺構群は認められない。本群には遺構の検出は認められなかったが、鑄造遺物の出土地点である第1号廃滓を確認した。また、本群には第13号井戸跡と第28号溝跡を検出した。

本群は全体に鑄造遺物や焼土粒子・炭化物を多量に含む赤褐色土の堆積層が検出された。この堆積層を1mのメッシュ（小グリッド）単位に遺物を取り上げた。

出土遺物は、第1号廃滓、および、グリッドから鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口等の鑄造遺物を検出した。

遺物

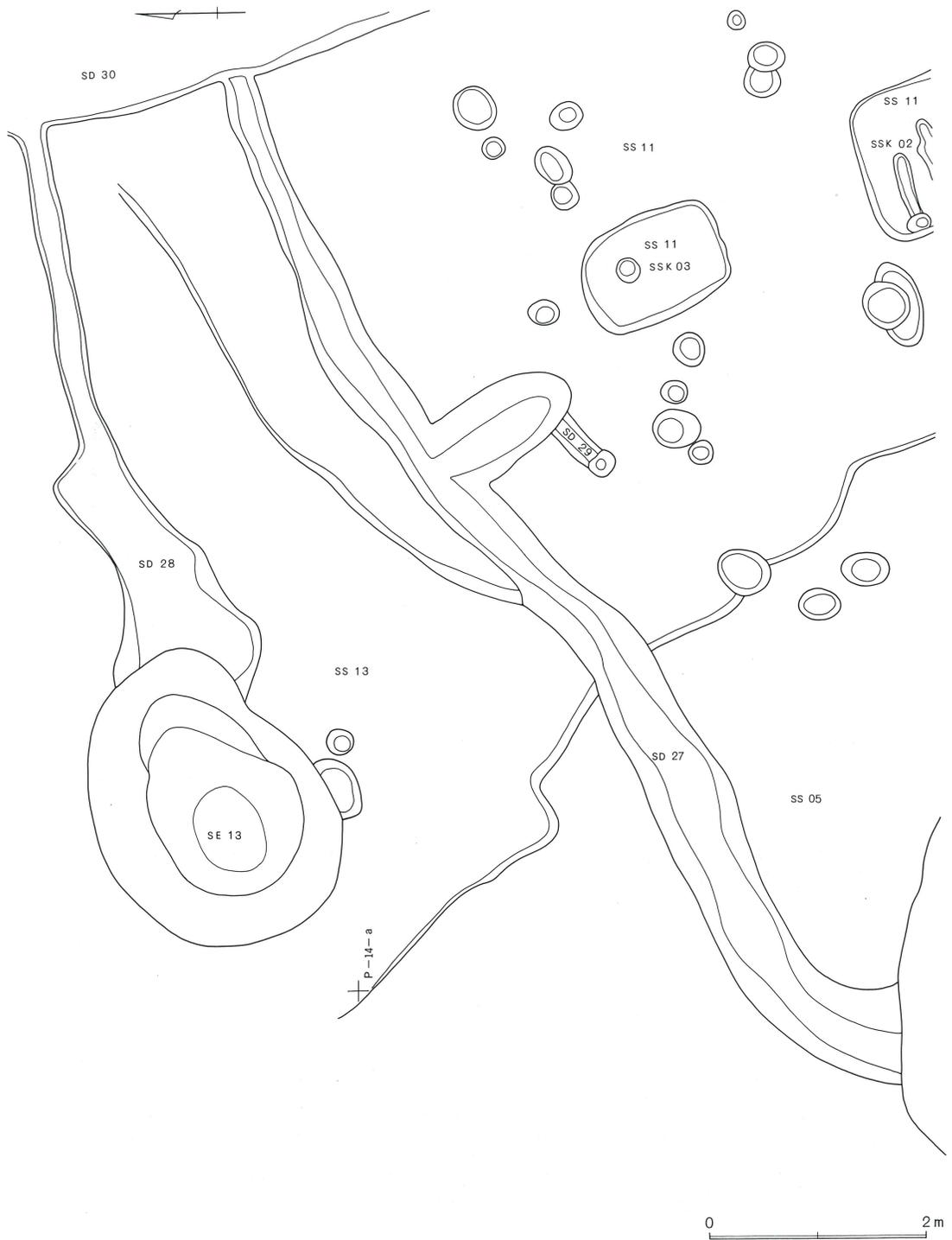
第13鑄造遺構群から検出した鑄造遺物は、全て分類計量した。その結果、鉄塊1022g、炉壁18756g、銅滓97g、鉄滓13375g、木炭1132g、白色滓476g、石35223g、鑄型1170g、土器2703g、羽口1365g、粘土塊33gを計量した。この内、鑄型は容器361g、梵鐘40g、獸脚45g、仏具79gを計量した。

土器は、1～11であり、このうち7～11は古代の土器にあたる。1は龍泉窯系の青磁碗である。2は白磁、3は灰釉碗で内面にとちんの跡を残す。

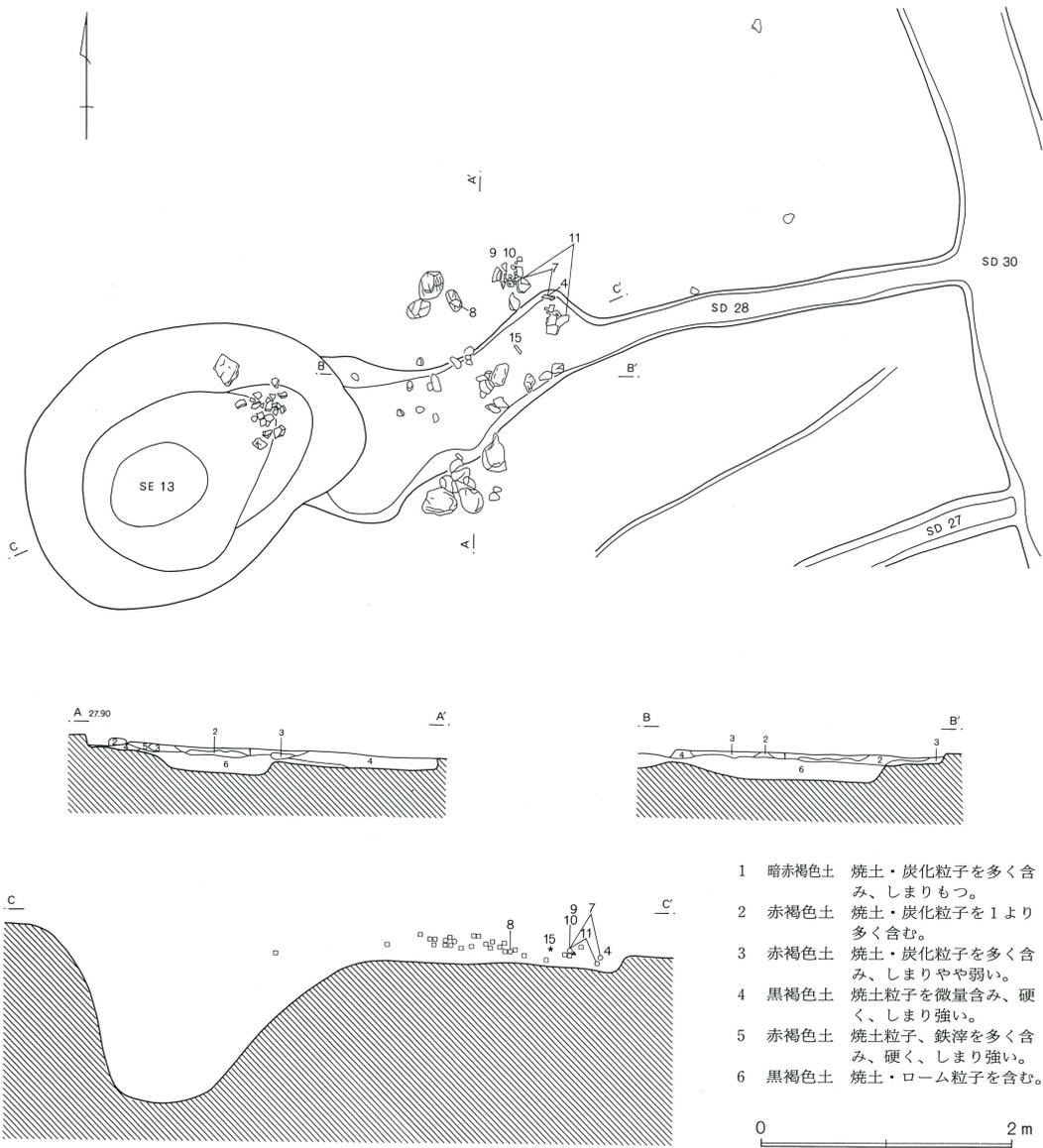
16は鑄銅製品で、鑄込みに失敗した製品と考えられる。片面には、上下方向に一直線のバリが残り、その裏面は大きく、くぼんでいる青銅の不良鑄造品片である。本来の上下左右はわからないので仮に図化したような位置に示している。なんらかの鑄造製品の端部と考えられるが製品名は不明である。上面は大きく、くぼんでおり、側面から下面にかけても凹んでいる。これは欠けたというよりも湯がまわりきらずに生じたものであろう。おそらく型をはずした後に不良品として判断され



第11・13鑄造遺構群（東から）



第332図 第13鑄造遺構群全体図

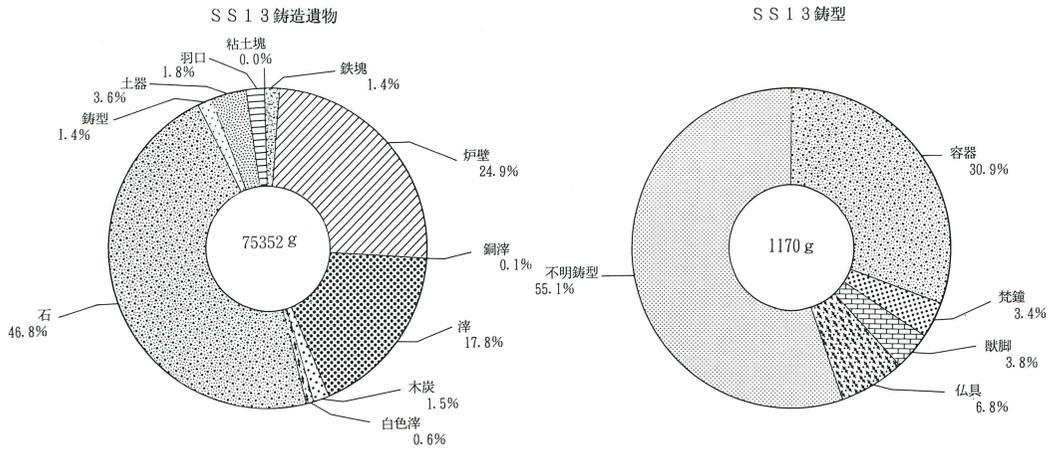


第333図 第13铸造遺構群遺物分布図

たものである。側面はきれいな肌をしているが、内側の凹みの表面は荒れて微細な気孔が見られ、ザラついた面を形成している。表面には緑青が全面に吹く。側面の緑青の割目には赤銅色の金属銅部分が見られる。側面や上面の凹み表面にごく薄い皮状の褐色の付着物が見られる。上面の凹みの片側のへりは固化中に下側より持ち上げられたように端部が上に開いている。

銅滓は17・19・20・21である。17はやや鍛冶滓に近い質感をもち小さい割に重い。表面は鈍いねずみ色をし表面は細かな顆粒状のぶつぶつが見られる。断面は目がつまりわずかに気泡をもち、光沢のあるねずみ色をしている。19は表面全体がコバルトブルーの色合いで光沢をもち、気泡が見ら

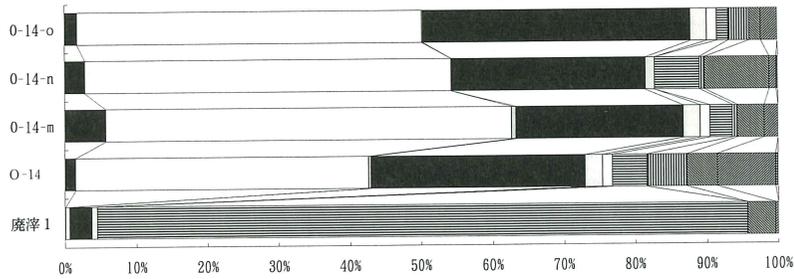
第45表 第13铸造遺構群遺物計量表(1)



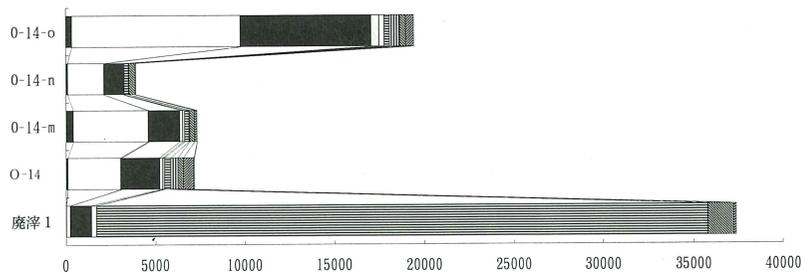
小番号	鉄塊	炉壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
魔滓1	37	210	0	1158	295	0	34092	11	1451	148	0
O-14	108	2942	25	2151	175	98	350	500	304	583	25
0-14-m	421	4170	44	1722	171	99	233	51	277	138	0
0-14-n	112	2018	0	1069	51	0	246	28	356	38	8
0-14-o	344	9416	28	7275	440	279	302	580	315	458	0
合計	1022	18756	97	13375	1132	476	35223	1170	2703	1365	33

小番号	鍋	容器	梵鐘	獸脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
魔滓1	0	0	0	0	0	0	11	0	0	11
0-14-a	0	0	0	0	0	0	14	0	0	14
0-14-c	0	178	0	45	0	4	69	0	227	296
0-14-e	0	0	0	0	0	0	18	0	0	18
0-14-g	0	1	0	0	0	37	0	0	38	38
0-14-j	0	0	0	0	0	0	15	0	0	15
0-14-k	0	0	35	0	0	23	30	0	58	88
0-14-l	0	0	0	0	0	0	11	0	0	11
0-14-m	0	0	5	0	0	0	46	0	5	51
0-14-n	0	4	0	0	0	15	9	0	19	28
0-14-o	0	178	0	0	0	0	402	0	178	580
0-14-p	0	0	0	0	0	0	20	0	0	20
合計	0	361	40	45	0	79	645	0	525	1170

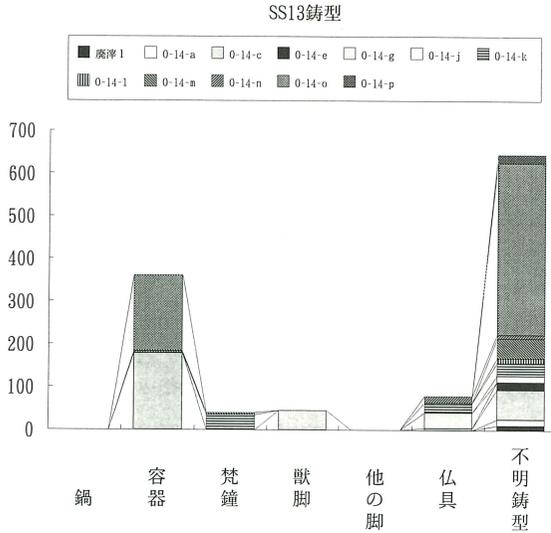
SS13铸造遺物



SS13铸造遺物



第46表 第13群出土遺構群遺物計量表(2)



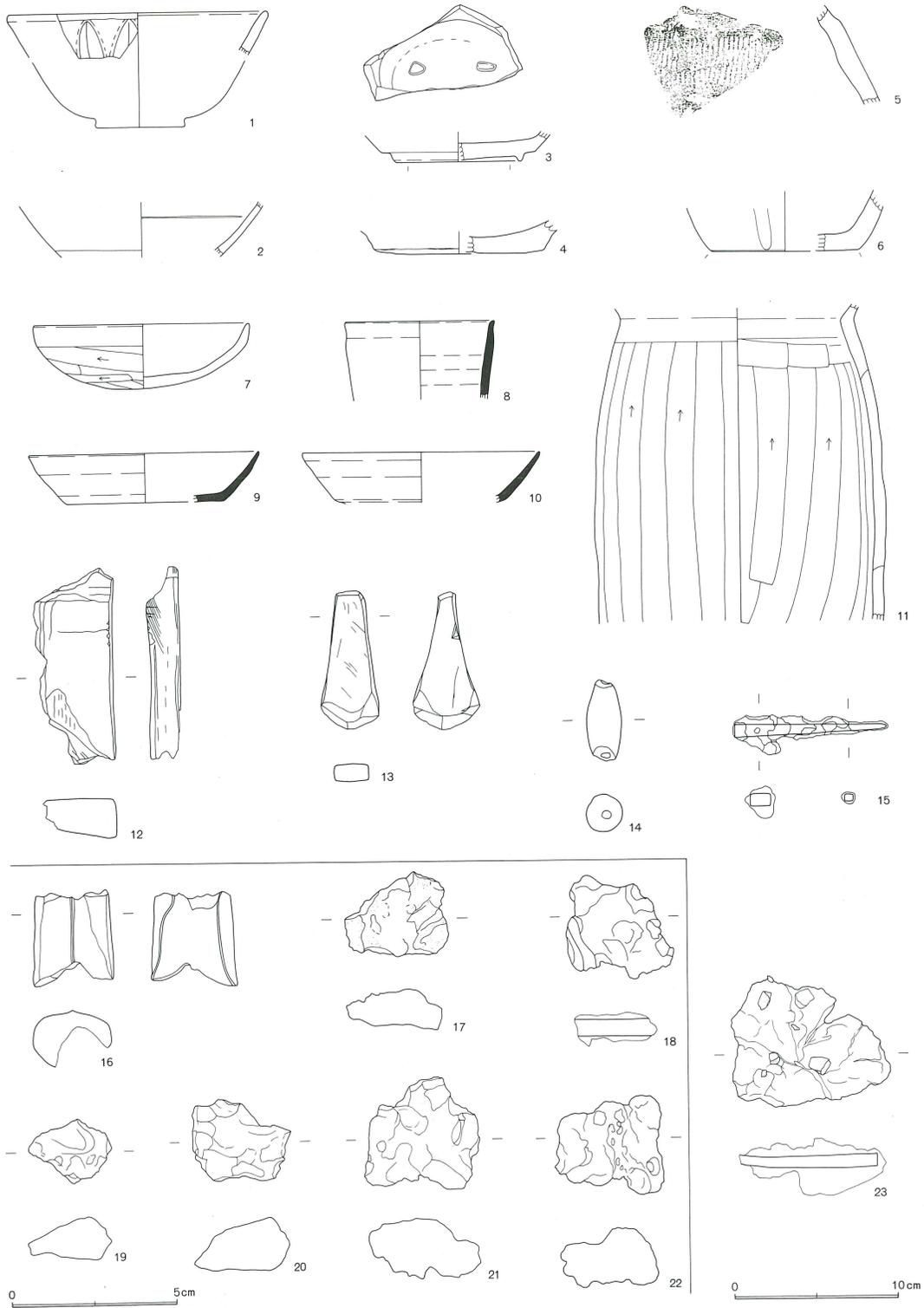
れるものの全体には滑らかな質感である。非常に軽い。20は凹凸のある表面が酸化し錆が付着し、一部に緑青が吹き、大ききの割には重い。21は表面がダークグリーンの色で、凹凸が見られる。

炉壁は24～27である。いずれも、大きめの炉壁片が検出され、炉底部から炉の立ち上がり部分にかけてのものである。中心部分の湯滓面は光沢のある黒色で部分的に鉄塊の付着が認められ、径1～10mm程の気泡が無数にみられる。24・27は断面に湯滓面を2面確認でき、27の立上がり部分の内面には環状に白色滓が付着している。また、25は内面の湯滓面が全面白色滓の付着が見られ、一部に緑青が吹く。このことは、白色滓や光沢のある黒色滓（鉄滓4'）が銅と関係があること、また、いずれの炉壁も銅の溶解炉破片と見て間違いのないものと考えられる。

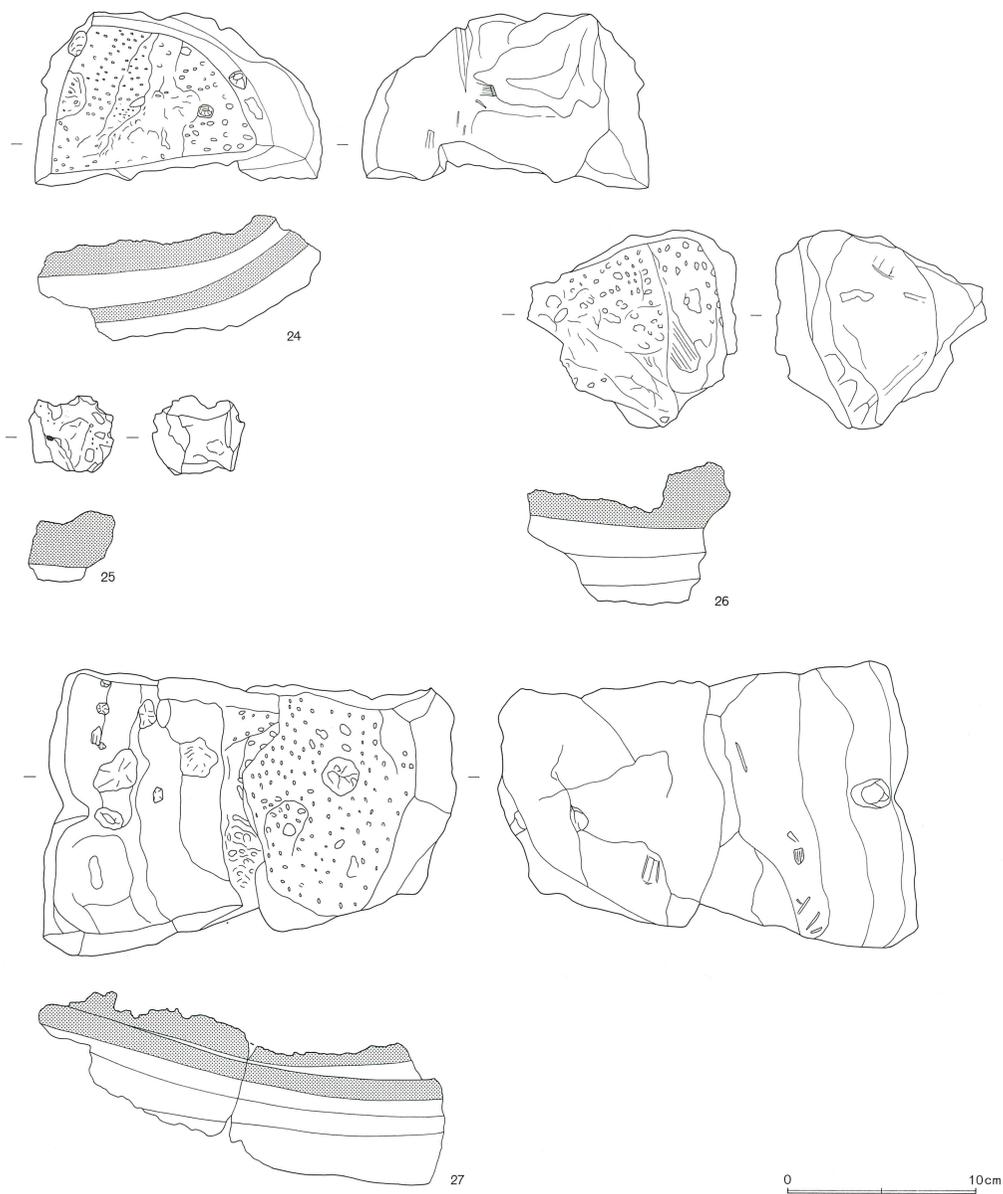
群型は、28が蓮華文の付いた鈕部分の群型片である。29・30は梵鐘の群型片である。29は撞座に繋がる幅広の横帯部分であり、30は龍頭の目の部分である。31は容器群型と考えられ、32は獣脚群型の右反面の破片である。牙をむきだした獅噛みの顔部分から脚にかけてである。33は不明であるが、28の群型片と考え合わせると釣り灯籠のアーム部分の群型片の可能性もある。

第13群出土遺物観察表 (第334図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗	(15.8)	2.5			A	淡緑色	10%	O-14-i-5 碗I5b	中国・龍泉
2	白磁碗		3.4		I	A	青白色	5%	O-14-b-4 碗IX2	中国
3	灰釉碗		1.8	7.5	B I	A	淡緑色	50%	O-14-p-8	瀬戸
4	土師器甕		1.4	(10.4)	B C D	B	燈褐色	15%	第1号廃滓No.28	
5	甕				C I	B	褐色	1%	O-14-n	常滑
6	梅瓶		6.7	9.0	B I	A	灰色	10%	O-14-p-8	瀬戸
7	土師器杯	13.1	3.9		B C D F	A	燈褐色	90%	第1号廃滓No.24, 28	在地
8	須恵器コップ		(9.0)	4.8	C D F	A	青灰色	25%	第1号廃滓No.29	南比企
9	須恵器杯	(14.0)	3.0	(9.6)	B C F	A	青灰色	25%	第1号廃滓No.24	南比企
10	須恵器杯	(14.4)	3.1	(10.0)	B C F	B	灰色	5%	第1号廃滓No.24	南比企
11	土師器甕	19.3			D	B	褐色	40%	第1号廃滓No.24, 25	在地



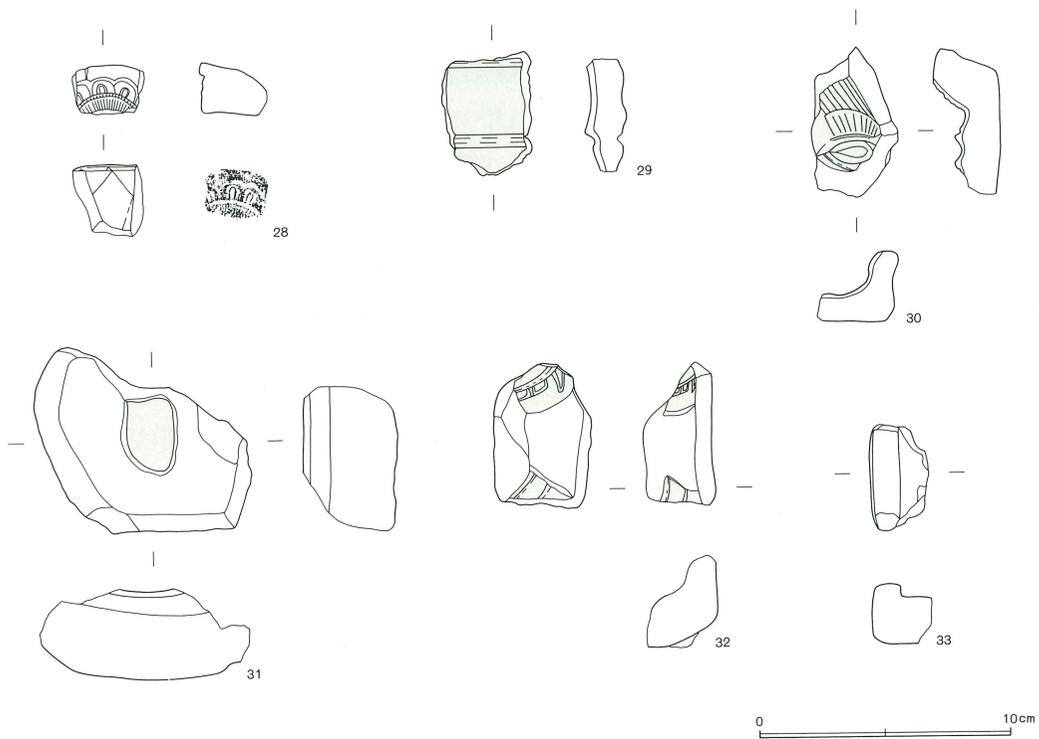
第334图 第13铸造遺構群出土遺物(1)



第335図 第13鋳造遺構群出土遺物(2)

第13群出土鋳造遺物観察表 (第334~336図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
12	砥石	11.5	4.8	2.4	203		O-14-P-4	石
13	砥石	8.5	4.1	1.1	110		O-14-k-1	石
14	土錘	4.8			23	内径0.6 外径2.2	O-14-o	土器
15	鉄製品	9.3		7.5	25		第1号廃滓No23	塊1
16	銅製品	2.7	2.4	1.0	24.3		O-14-o-5 分析資料No28	銅1



第336図 第13鑄造遺構群出土遺物(3)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
17	銅滓	2.5	3.1	1.1	17		O-14-m-6	銅2
18	鉄塊系遺物	2.8	2.5	0.5	13		O-14-m-6	塊1
19	銅滓	1.9	2.5	1.3	5		O-14	銅2
20	銅滓	2.5	2.9	1.6	16		O-14-p-2	銅1
21	銅滓	3.3	3.3	3.1	20		O-14	他の滓
22	鉄塊系遺物	3.0	3.3	1.7	34		O-14-m-4	塊1
23	鉄塊系遺物	7.5	9.0	3.4	212		O-14-m-7	塊2
24	炉壁	15.1	8.7	5.1	590		O-14-p-8	炉1
25	炉壁	4.0	4.4	3.4	52		O-14-m-4	炉4
26	炉壁	10.1	11.1	6.9	495		O-14-p-7	炉1
27	炉壁	15.1	21.4	7.4	1820		O-14-k-6	炉3
28	仏具 釣り手	1.9	2.9	2.0	15		O-14-n-8	鑄型
29	梵鐘 横帯	4.6	3.5	1.4	25	横帯幅0.5 帯間2.7	O-14-k-3	鑄型
30	梵鐘 龍頭	6.0	3.5	1.2	36		O-14-k-7	鑄型
31	容器	6.5	8.0	3.7	178		O-14-c-7	鑄型
32	獸脚	5.6	3.2	1.9	45		O-14-c-7	鑄型
33	不明	4.2	2.3	2.4	20		O-14-p-8	鑄型

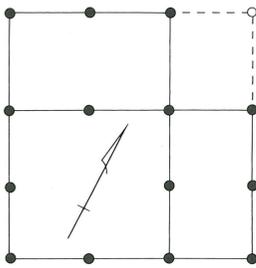
第47表 第13鑄造遺構群一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS13-第1号廃滓	SS-13 第1地点	O-14-o					

(2) 掘立柱建物跡

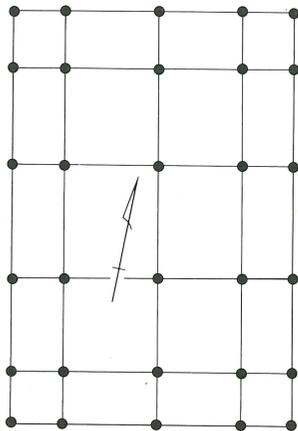
第22号掘立柱建物跡 (第337・338図)



R・S-12・13区に位置する。調査区南東隅にあたり、北東に伸びる舌状台地の東側縁辺部にあたる。本遺構は覆土中に鑄造遺物を含む第7号溝跡と重複する。新旧関係については不明である。

建物規模は3×3間の東西棟で、北東コーナーの一面には第146号土壌が付属する可能性がある。桁行6.60m、梁行6.60mであり、正方形の建物である。主軸方向はN-28°-Wである。

柱穴は円形をしており、径は小さく0.32~0.48m、深さ18~63cmを測る。柱間寸法は桁行2.20mと、梁行はP1~P3が各2.20m、北側の1間は2.60mである。出土遺物は検出されなかった。時期は中世と考えられる。



第23号掘立柱建物跡 (第339・340図)

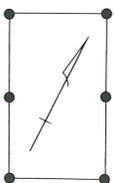
Q・R-12・13区に位置する。調査区中央にあたり、北東に伸びる舌状台地の東側縁辺部にあたる。第8鑄造遺構群と重複関係にあり、平面観察でP13・P14を確認したことから鑄造時期よりも新しい時期の建物跡であることが掴めた。本建物の周辺には小規模の柱穴が多く検出され中世の居住域であったことを窺わせる。

建物は2×3間の南北棟の身舎に四面の庇が付くと考えられる。金井遺跡において最大の建物規模を誇る。建物規模の桁行は11.00m、梁行7.00mであり、身舎の桁行8.00m、梁行4.70mである。主軸方向はN-12°-Wである。

柱穴は円形をしており、規模は比較的大きく長さ0.24~0.42m、深さ10~56cmである。柱間寸法は規則制に欠ける。

出土遺物は検出されていない。

時期は中世と考えられるが、鑄造時期よりも新しい段階と考えられる。



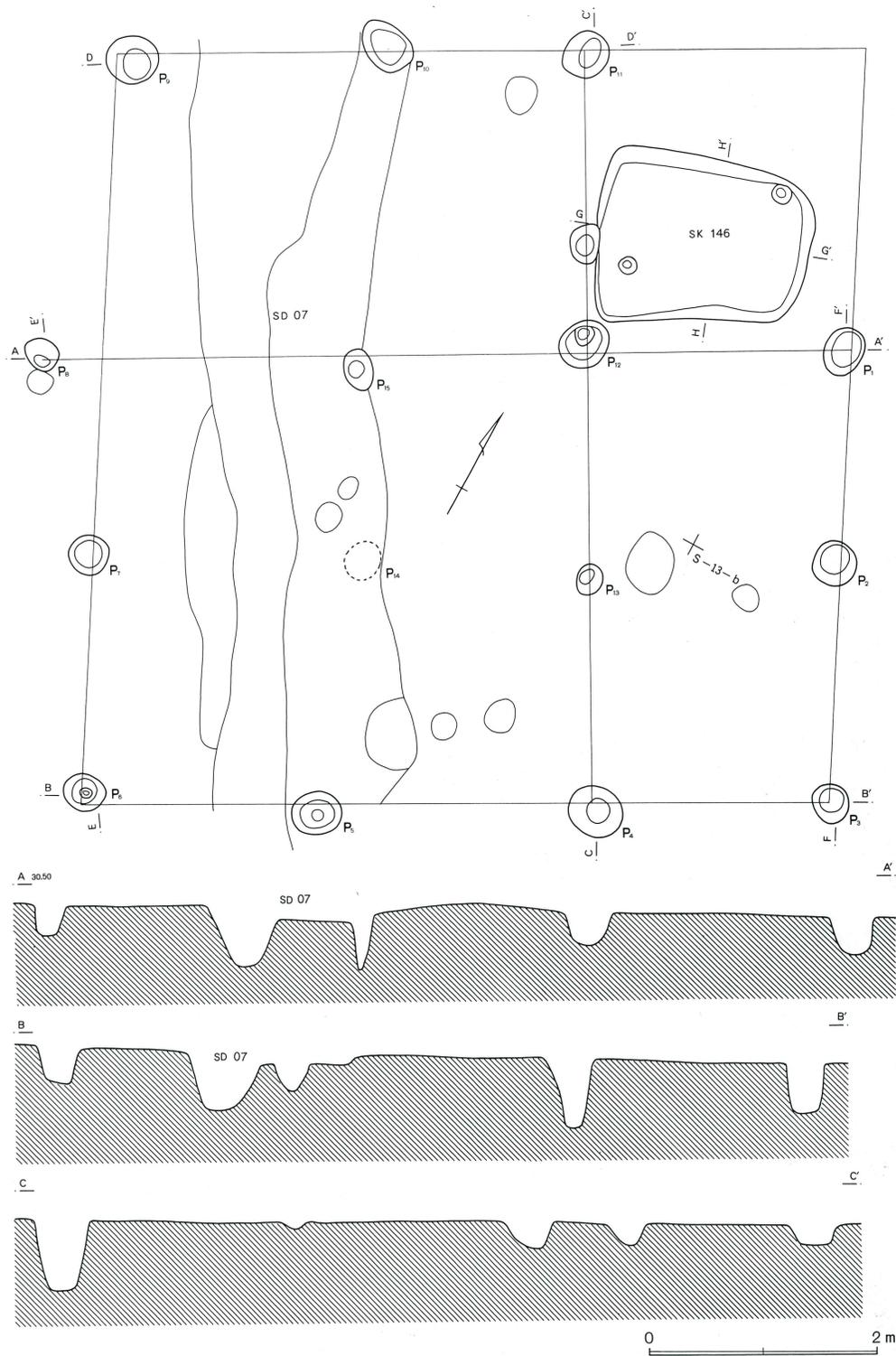
第24号掘立柱建物跡 (第341図)

P-14区に位置する。調査区東側にあたり、第11鑄造遺構の第2・3号鑄造土壌を伴う建物跡と考えられる。

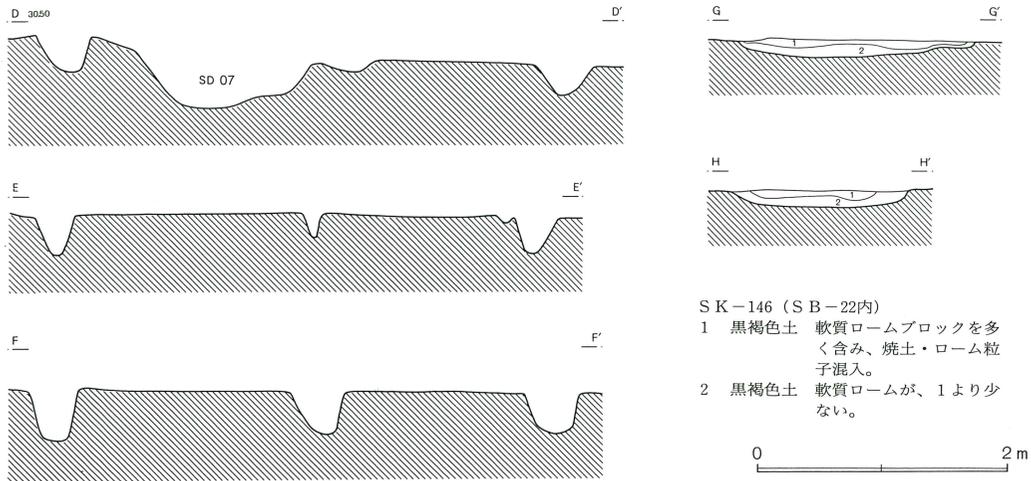
1×2間の南北棟で、桁行4.40m、梁行2.60mであり、主軸方向はN-27°-Wである。

柱穴は円形をしており、大きさは径0.36~0.43m、深さ25~50cmである。柱間寸法は桁行2.20m、梁行2.60mであり、梁行側の柱間の方が長いことがわかる。柱穴は11本確認できた。

時期は中世の鑄造段階と考えられる。



第337图 第22号掘立柱建物迹(1)



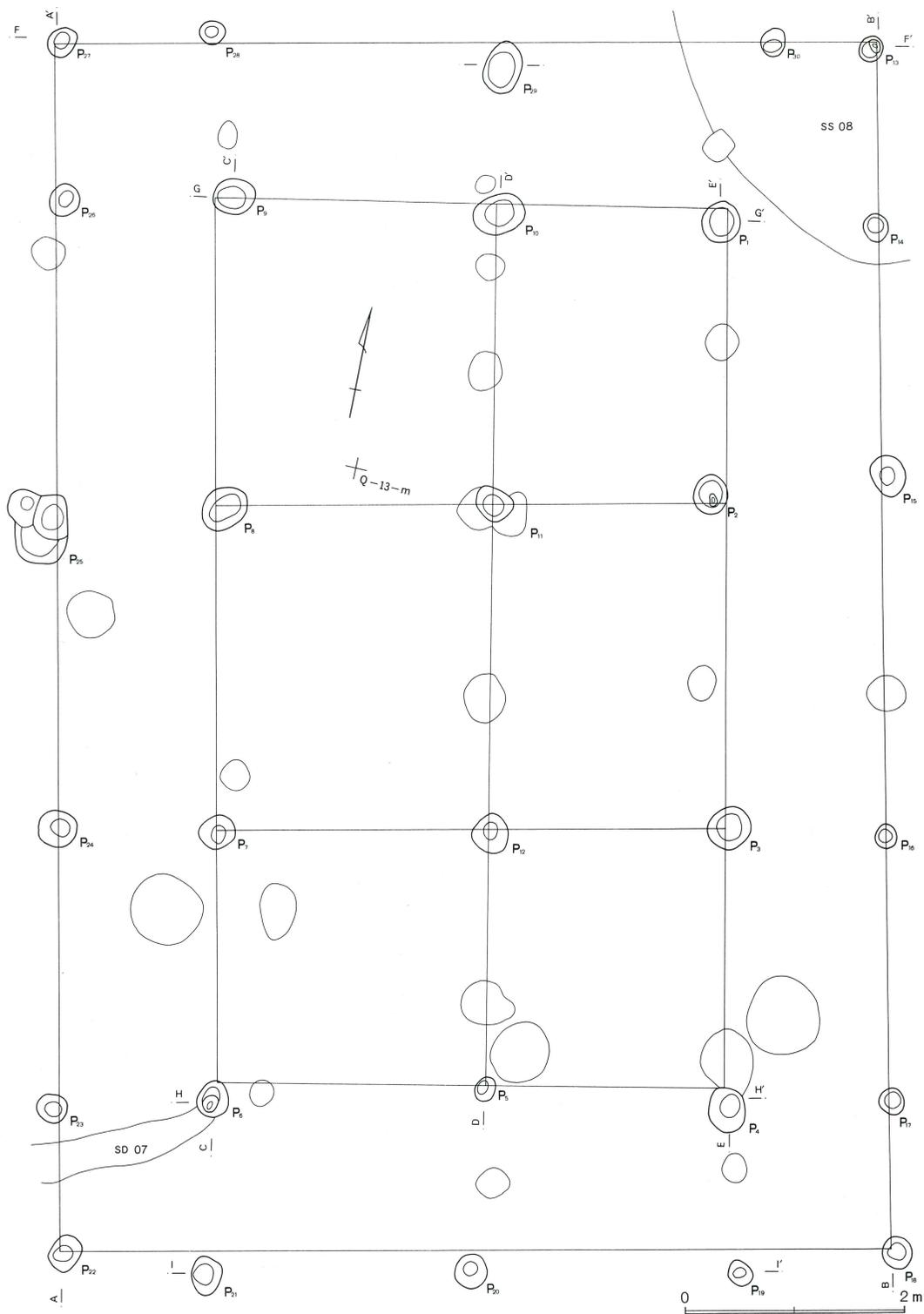
第338図 第22号掘立柱建物跡(2)

第48表 第3区掘立柱建物跡一覧表

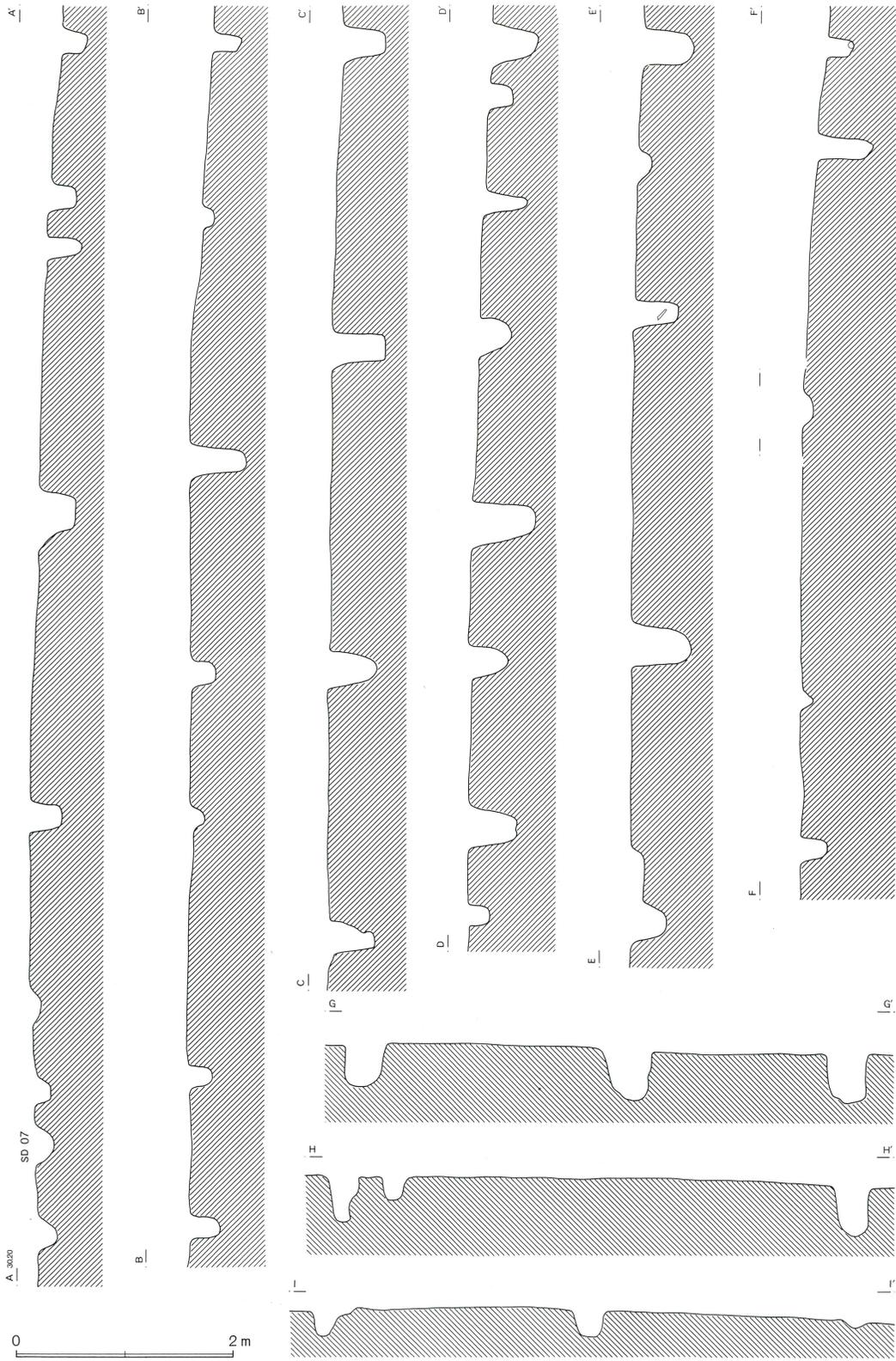
新番号	旧番号	位置	重複遺構	間×間	桁行	梁行	主軸方向	時期
SB-22	SB-16	R-12,13 S-12,13	SD-05 SK-83	3×3	6.60	6.60	N-28°-W	中世
23	19	Q-12,13 R-12,13	SJ-11,21 SD-05,06 SS-08	4×5	11.00	7.00	N-12°-W	中世
24	23	P-14	SS-11	1×2	4.40	2.60	N-27°-W	中世



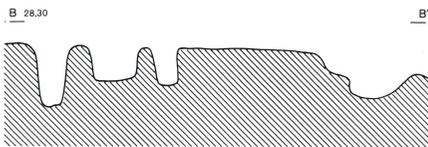
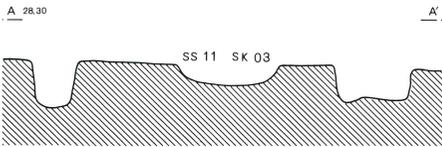
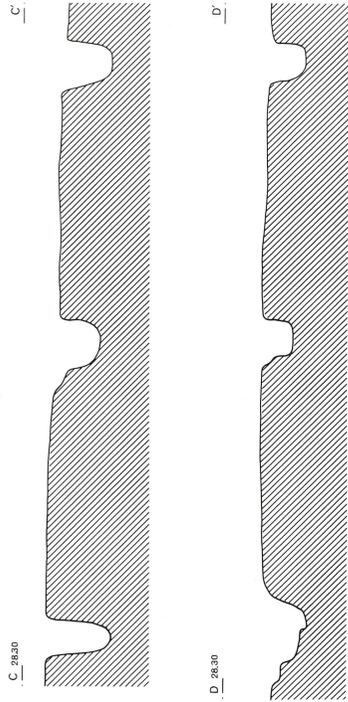
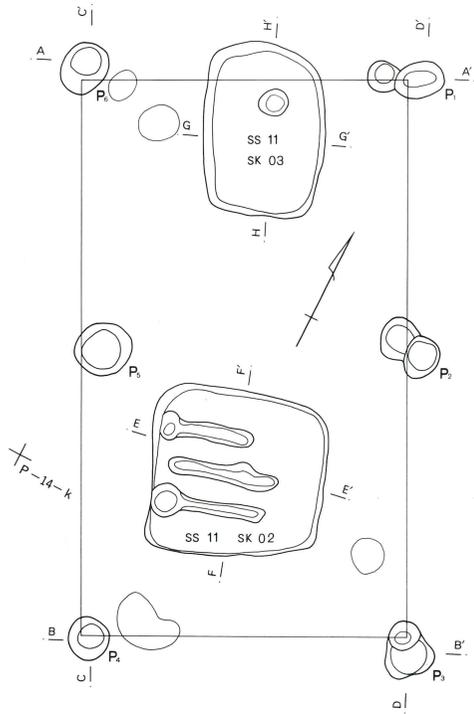
発掘調査風景



第339图 第23号掘立柱建物跡(1)



第340图 第23号掘立柱建物跡(2)



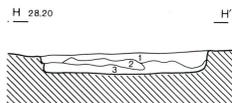
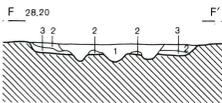
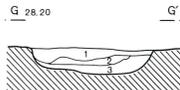
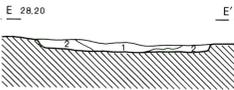
S B-24内

SS 11-S S K 2

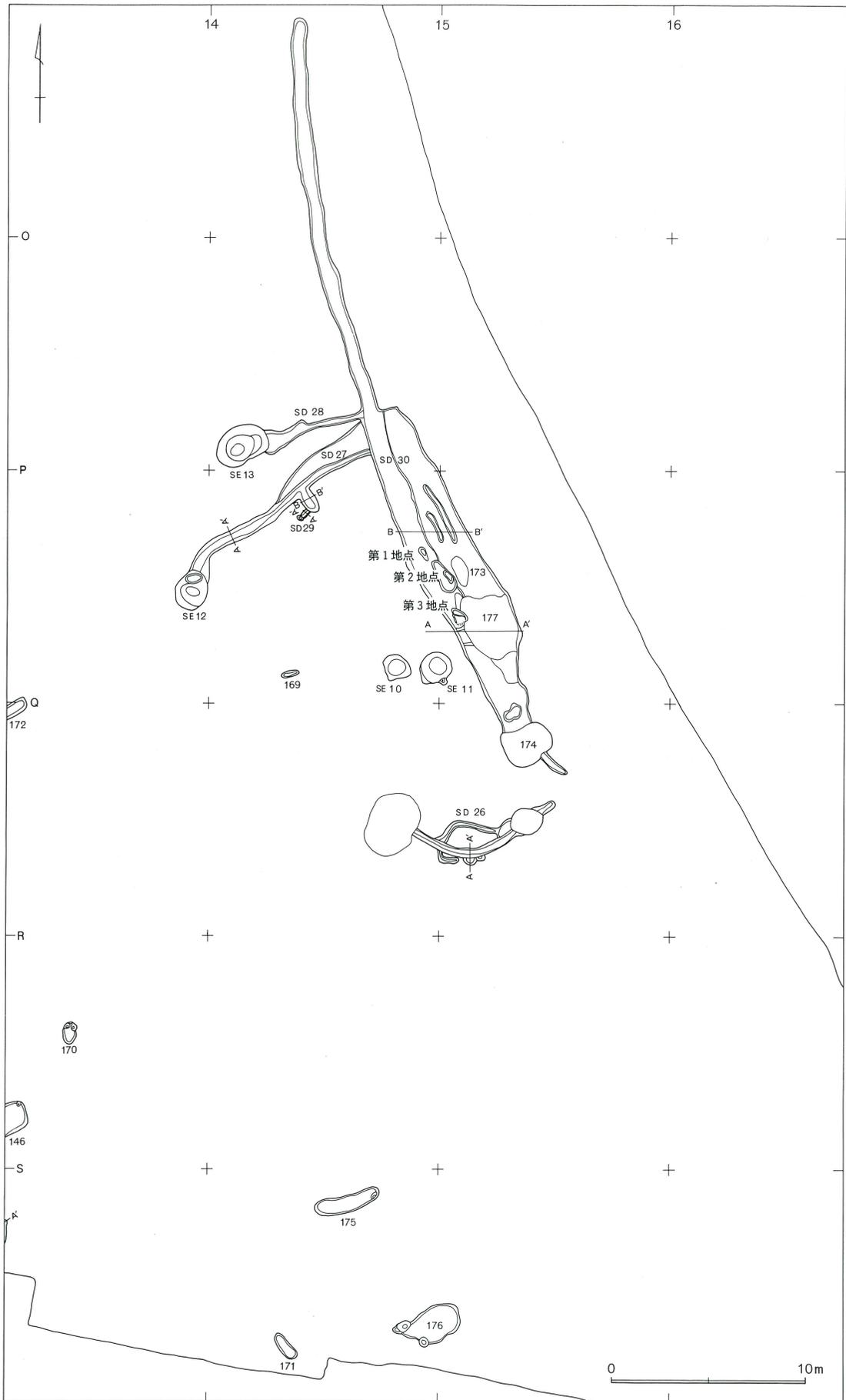
- 1 暗茶褐色土 焼砂、焼土粒子を多量に、炭化物を少量含む。砂質。
- 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む。やや砂質。
- 3 黒褐色土 焼土粒子を少量含む。

SS 11-S S K 3

- 1 黒褐色土 焼砂、焼土粒子、炭化物を少量含む。砂質。
- 2 暗褐色土 暗茶褐色ロームを少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む。



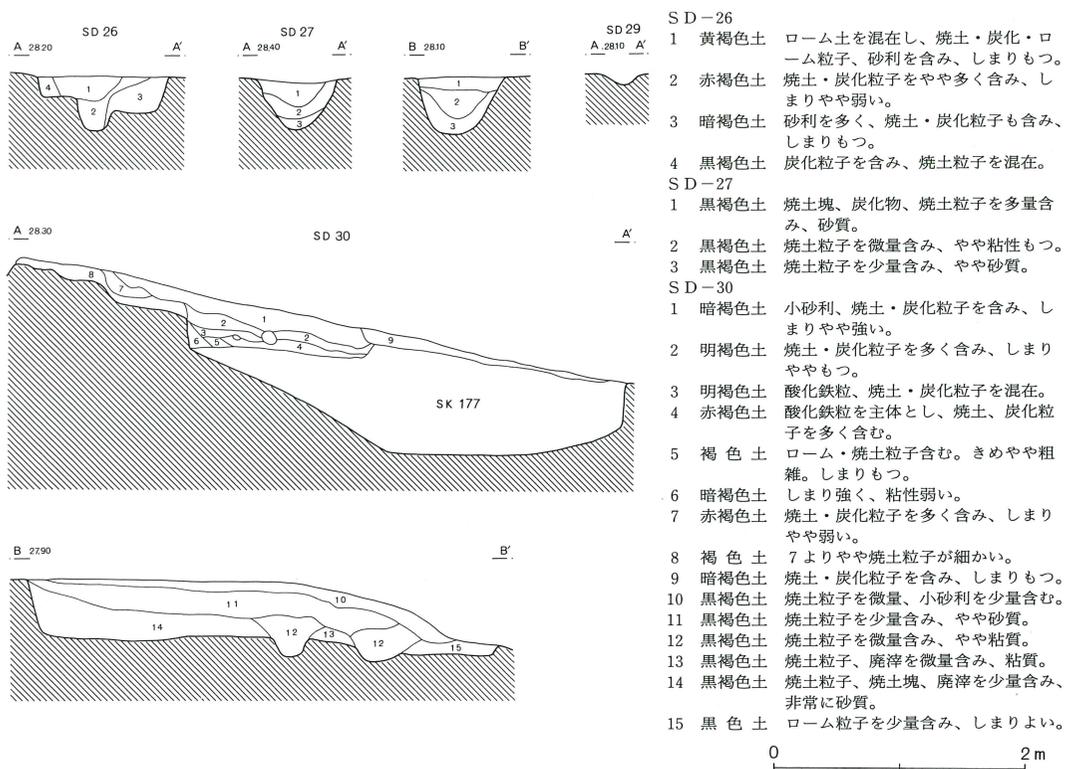
第341図 第24号掘立柱建物跡



第342図 第3区溝跡・井戸跡・土坑配置図

(3) 溝 跡

本区からは第26～30号溝跡を検出した。第26号溝は第10鑄造遺構群の第5号鑄造土壌から第12鑄造遺構群の第1号土壌を壊して東斜面に落ちる全長8.50mの溝である。幅50cm、深さ43cmと小規模ながら断面四角形のしっかりとした掘り込みをもつ溝跡であった。第27号溝は第12号井戸跡から、第28号溝は第13号井戸跡からそれぞれ始まり東西方向に伸び東側斜面に落としていく。第30号溝は台地が東側斜面の落ちた裾を斜面方向に沿って南北に伸びる。この溝を境に鑄造遺構群の広がりには終わり東は低地が広がる。

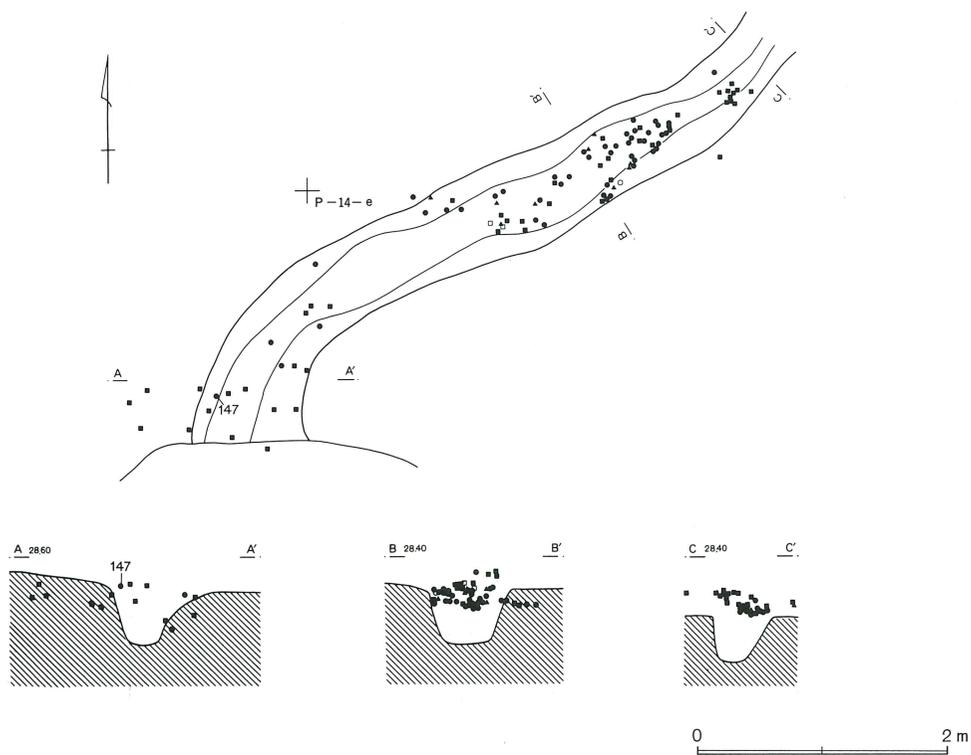


第343図 第3区溝跡土層図

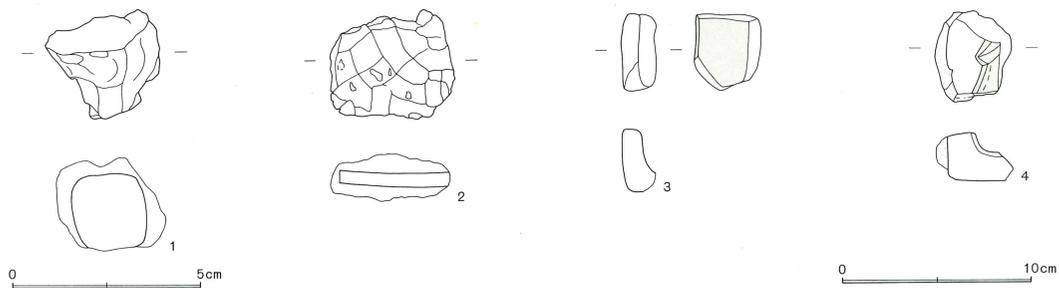
第27号溝跡 (第344図)

本溝跡は第5鑄造遺構群から第13鑄造遺構群および第30号溝に繋がる東西方向の溝跡である。しかも、東側の二段からなる緩斜面の北側の区画溝としての機能も兼ねていたものと考えられる。本溝と対峙する溝として第12鑄造遺構群にて検出した第26号溝跡が存在し、東側緩斜面に展開した第5～13鑄造遺構群はこの2条の溝によって北辺と南辺が区画されていることとなる。

本溝跡の規模は、長さ11.40m、幅0.46m、深さ37cmである。鑄造遺物は、溝の上面から検出されており、溝内からの遺物は少ない。



第344図 第27号溝跡遺物分布図



第345図 第26・27号溝跡出土遺物

第3区溝跡出土鑄造遺物観察表 (第345図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	鉄塊系遺物	2.7	3.0	2.4	28			塊1
2	鉄塊系遺物	5.7	6.6	2.4	102			塊2
3	他の脚	4.0	3.5	1.5	24			鑄型
4	梵鐘 龍頭	4.8	4.0	2.5	45		P-14-b-3	鑄型

第30号溝跡（第347図）

第30号溝跡は南北方向に伸びる。規模は、長さ42.2m、最大幅3.60m。深さ27cmと大きい。鑄造遺構群の境界線であり、また、本遺跡の境界線でもある。さらに、台地の斜面部分の裾に掘られていることから斜面部分の排水施設として機能していたものと考えられる。この溝の覆土中からは多くの鑄造遺物を検出した。

遺物は第348図～352図の1～75である。土器は1～5を検出した。1は龍泉窯系の青磁碗である。2は志野系の鉢底部と見られる。3～5は常滑系の片口鉢である。

炉壁は6～8である。8は上端に重ね合わせるための幅4.3cm程の平坦面をもち、内面には厚さ2mm程の湯滓が付着する。

羽口は9～11である。9はこれまでの溶解炉羽口とは異なり別造りの円筒形羽口である。また溶解物は白色の湯滓が表面に付着し、しかも、4層の湯滓面が見られその都度外側に粘土を張り込み径を大きくしている。素材は粘土であるが径5mm程のスサを多く混入させている点でもこれまでの羽口とは異なる。しかし、付着する溶解物の状況から判断して溶解炉羽口とする。10・11は小口径の鍛冶炉羽口である。

鑄型は12～46・48を検出した。12～14・16・17は釘隠しの飾り金具の鑄型と考えられる。円形の鑄型本体に6葉の花弁を表現し、それらの間弁には猪目の透かしを形どる。中心部分は径2cmの円形の凹みをもちその周縁に蕊を表現した細い刻みをめぐらす。文様は抜き型によるものと考えられる。鑄型外縁には幅0.5～1.0cmの平坦な面が残り合わせ部分と考えられる。素材は粘土できめの細かな砂粒子を混在する。他も、同様の型と考えられるが、13は外縁部分に二箇所の溝が切り込まれており湯口の可能性をもつ。

18は粘土の素材がやや異なり犁先鑄型に見られたような下型（種型）の上に真土を載せ型押ししたものと考えられる。型は鋭角のコーナー部分が残存し、磬や盤を想定できるが不明である。

15は小仏像の鑄型である。仏像正面の脚部が残存し衣をつけ足先を出して台座上に直立する。台座部分には断面三角錘状の湯口がある。還元され鑄込みされた鑄型である。

19・20はつまみ鑄型である。円錐形の型に中央部ダイヤモンド型の切り込みをもち周縁に放射状の飾りを施す。21は中央に棒状の短い突起をもつ円形の鑄型である。

23・24は磬鑄型である。いずれも下端コーナー部分の破片である。型の外縁には二条の沈線がめぐり外側の方がやや太い。23は型の器肉が厚く平坦な裏面には型合わせの際にベルト代わりに巻きつけたと見られる粘土紐が貼り付いたままになっている。

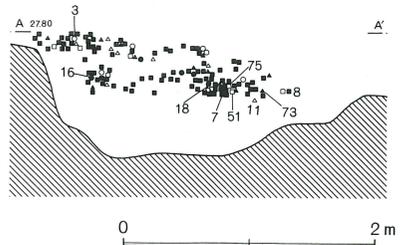
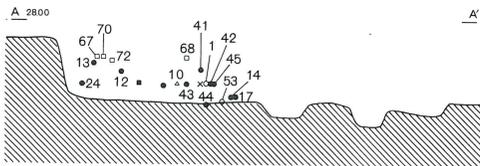
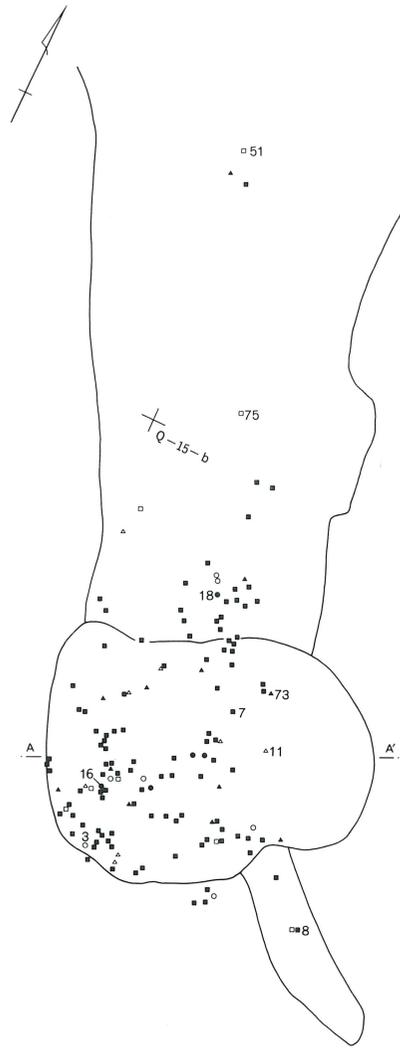
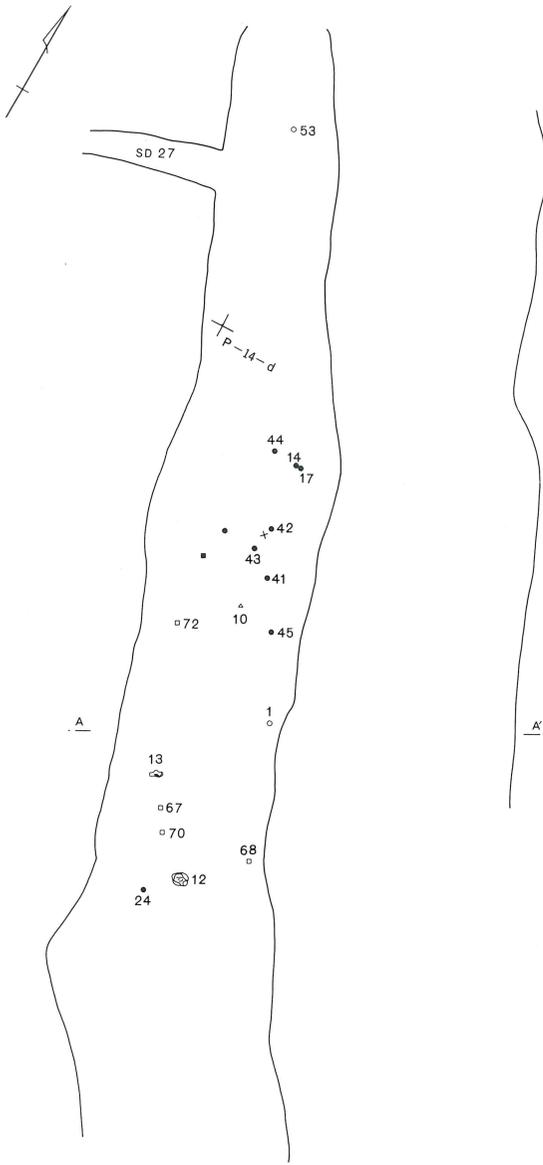
26～37・39は獣脚鑄型である。25は猫足式の鑄型片であるが、その他は獅嚙の顔をもつ獣脚鑄型である。また、37・39は板状の獣脚合わせ蓋である。

42～46・48は容器鑄型である。

道具は47～53を検出した。47～50は三叉状土製品である。51は石製紡錘車、52は半球状土製品、53は土錘である。75は砥石である。

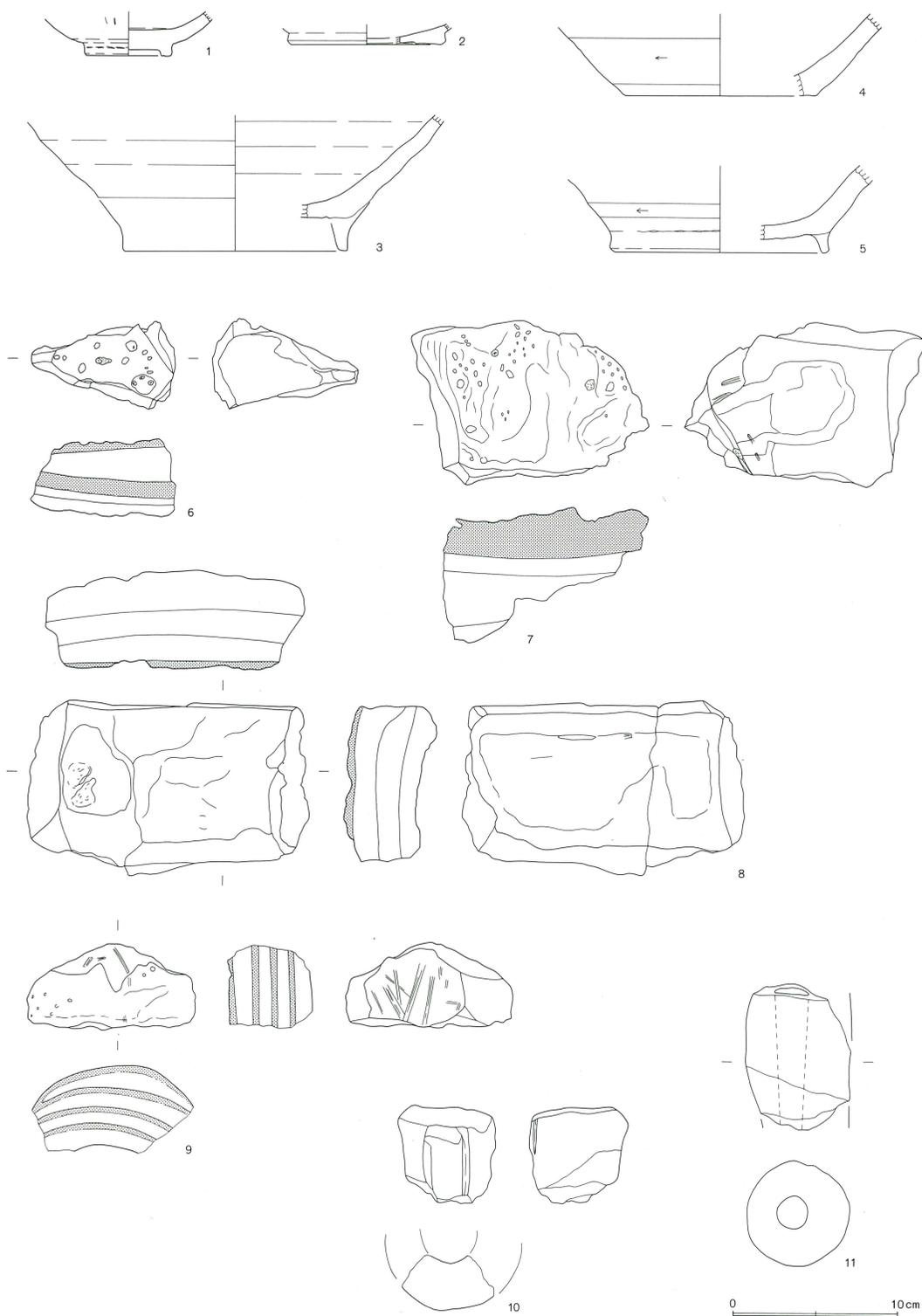
銅塊は55である。流動性をもった薄緑色をした緑青に覆われている。

鉄塊系遺物は56～72である。滓は73・74でありいずれも白色～黒色のガラス質の滓である。

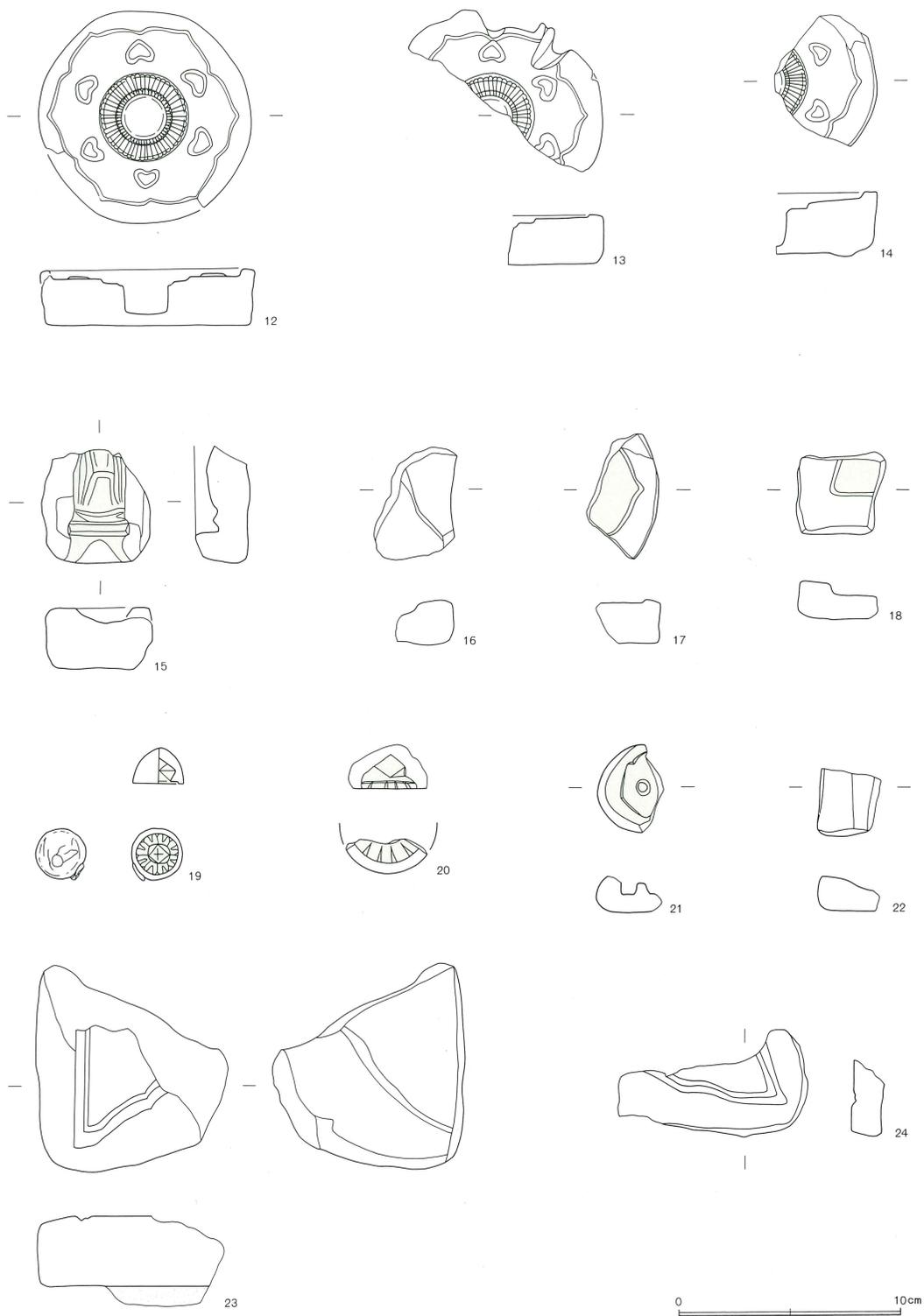


0 ————— 2 m

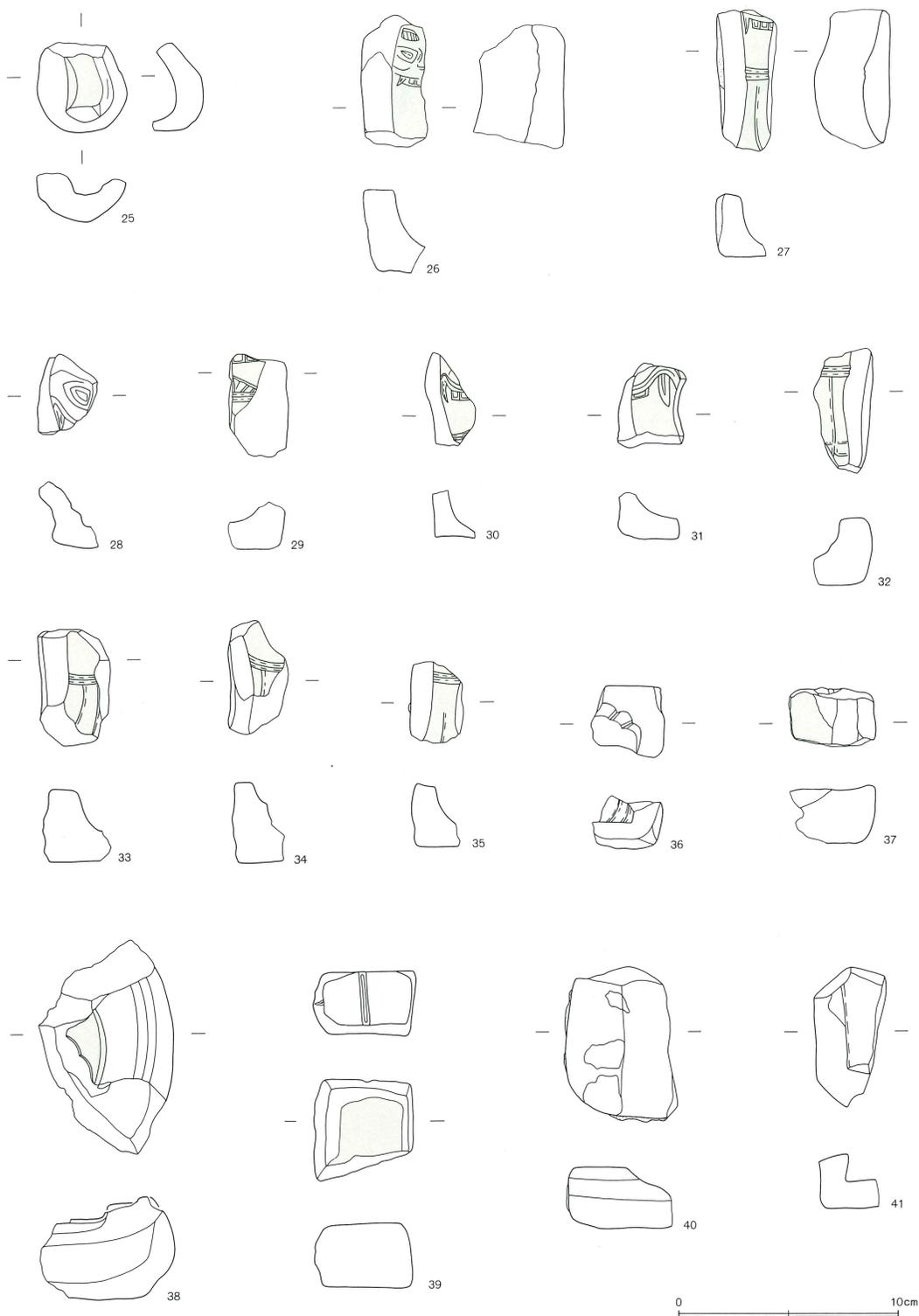
第346图 第30号沟迹遺物分布图



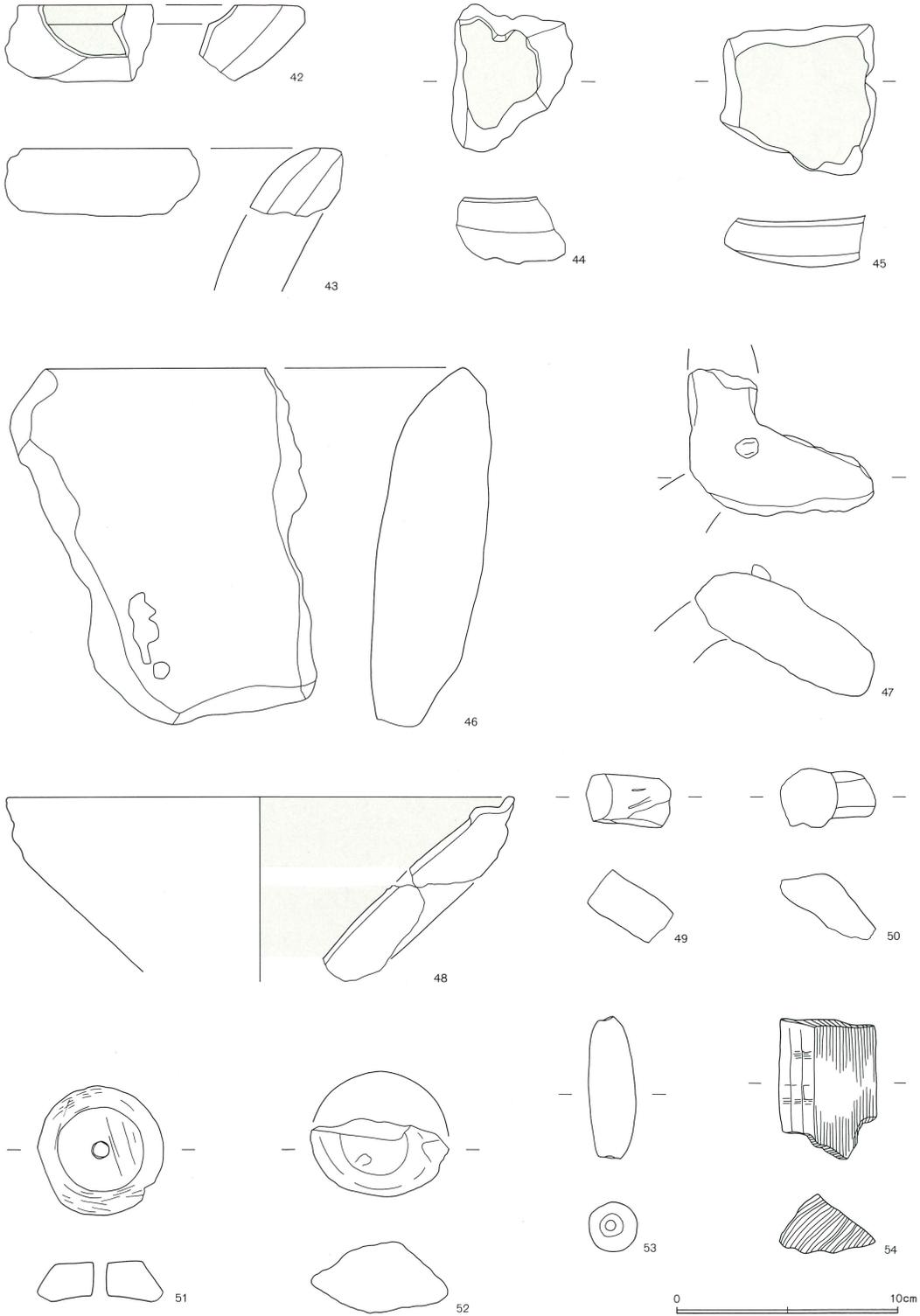
第348图 第30号沟迹出土遺物(1)



第349图 第30号沟迹出土遺物(2)



第350图 第30号沟迹出土遗物(3)



第351图 第30号沟迹出土遗物(4)



第352図 第30号溝跡出土遺物(5)

第30号溝跡出土遺物観察表 (第348図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗		2.7	5.1	I	A	淡緑色	60%	No.8 椀 I 5 b	中国・龍泉
2	鉢		1.3	9.6	G I	A	灰緑色	10%	P-15-i	志野
3	片口鉢		6.2	14.1	C G I	B	灰色	20%	No.59	常滑
4	片口鉢		5.0	11.6	C G I	B	灰色	10%	P-14-d-6	常滑
5	片口鉢		5.2	12.7	C D I	A	橙褐色	20%	P-15-j-1	常滑

第30号溝跡出土鑄造遺物観察表 (第348~352図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
6	炉壁	8.7	5.2	4.6	135		P-15-m-3 分析資料No.11	炉1
7	炉壁	9.4	13.0	7.3	680		No.120	炉3
8	炉壁	10.3	17.1	5.2	888		No.162	炉1
9	羽口	5.1	10.3	5.0	178	内径4.4 外径8.7	P-15-i-9	羽口
10	羽口 鍛治	5.8	5.9	2.8	94	外径8.3 内径3.4	No.13	羽口
11	羽口 鍛治	8.6			268	外径6.4 内径1.8	No.168	羽口
12	仏具 飾り金具	(9.6)		2.5	265	孔径2.0 孔深2.0	No.1	鑄型
13	仏具 飾り金具	(10.6)	7.5	2.2	115	孔径2.2 孔深1.6	No.2	鑄型
14	仏具 飾り金具	(6.6)	4.5	2.5	70	孔径2.0 孔深2.4	No.17	鑄型
15	仏像	5.3	4.8	1.9	68			鑄型
16	仏具 飾り金具	4.8	3.6	2.0	38		No.139	鑄型
17	仏具 飾り金具	5.6	3.2	2.0	37		No.17	鑄型
18	仏具	3.6	3.9	1.1	30		No.100	鑄型
19	仏具 釣り手				5	外径2.3 高さ1.7	P-14-h-5	鑄型
20	仏具 釣り手	1.4	3.6	2.0	10	外径4.4	P-15-i-8	鑄型
21	仏具 不明	4.0	3.0	1.6	16		O-14-b-6	鑄型
22	仏具 不明	3.0	2.7	1.5	15		P-15-i-8	鑄型
23	仏具 磬	9.0	8.7	4.0	290		No.20	鑄型
24	仏具 磬	4.5	8.6	1.4	55		No.12	鑄型
25	獣脚	4.0	4.1	2.3	30		P-15-i-2	鑄型
26	獣脚	5.9	4.1	2.0	50		P-14-h-9	鑄型
27	獣脚	6.3	3.4	1.5	54		O-14-k-2	鑄型
28	獣脚	3.5	2.6	1.5	16		P-14-d-5	鑄型
29	獣脚	4.4	2.7	1.8	30		P-14-h-5	鑄型
30	獣脚	4.1	2.0	1.3	15		P-15-i-8	鑄型
31	獣脚	3.7	3.0	1.6	19		P-15-m-3	鑄型
32	獣脚	5.6	2.6	2.1	35		覆土	鑄型
33	獣脚	5.3	3.2	3.0	53		P-15-i-5	鑄型
34	獣脚	5.1	2.7	2.3	36		P-15-i-9	鑄型
35	獣脚	3.6	2.4	1.9	20		P-15-m-5	鑄型
36	獣脚	3.3	3.4	2.2	18		P-15-m-3	鑄型
37	獣脚 合わせ	2.1	3.9	2.4	25		P-15-i-6	鑄型
38	仏具 不明	19.2	6.1	4.5	165		覆土	鑄型
39	獣脚 合わせ	4.5	4.5	3.9	65		P-15-m-3	鑄型
40	仏具 合わせ	6.9	4.8	2.7	105		覆土	鑄型
41	仏具 磬	6.1	3.3	2.4	40		No.7	鑄型
42	容器	3.5	6.4	3.2	94		No.11	鑄型
43	容器	3.1	8.8	2.9	89		No.10	鑄型
44	容器	6.6	5.3	2.9	90		No.18	鑄型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
45	容器	6.8	7.0	2.1	103		No.9	鋳型
46	容器	16.2	13.0	4.9	975	口径(60.0)器高16.2	P-15-e-8	鋳型
47	三叉状土製品	8.9		3.2	135		No.94	土器
48	容器				125	口径22.6 器高8.3	P-15-i-5	鋳型
49	三叉状土製品	3.6		2.0	20			土器
50	三叉状土製品	4.8		1.9	18		P-15-m-3	土器
51	石製紡錘車			1.7	67	直径5.9 孔径0.8	No.163	石
52	半球状土製品	6.2	3.4	3.1	45		O-14-o-6	土器
53	土錘	6.4			35	直径2.1 孔径0.4	No.19	土器
54	木炭	6.0	3.4	2.8	28.9		P-15-j-1 分析資料No.43	木炭
55	銅滓	2.9	0.7	1.0	10.8		P-13-d-5 分析資料No.8	銅1
56	鉄塊系遺物	2.7	2.1	1.2	10			塊2
57	鉄製品	1.0	3.8	0.9	5		P-14-d	塊2
58	鉄塊系遺物	4.1	4.8	1.8	62		P-14-h-6	塊2
59	鉄塊系遺物	3.1	5.7	1.7	45			塊2
60	鉄塊系遺物	2.3	5.4	1.5	18			塊2
61	鉄塊系遺物	1.5	6.7	0.9	35			塊2
62	鉄塊系遺物	1.8	6.2	1.3	20		O-14-p	塊2
63	鉄塊系遺物	3.6	5.5	1.3	30		P-14-d	塊2
64	鉄塊系遺物	3.9	3.7	1.2	23			塊2
65	椀形滓	4.4	3.8	1.4	35		P-14-d-7	塊2
66	鉄塊系遺物	3.0	4.1	2.1	26			塊2
67	鉄製品	2.6	11.0	1.4	50		No.3	塊2
68	鉄製品	1.8	7.3	1.4	25		No.5	塊2
69	鉄製品	1.4	5.4	1.3	10		P-14-h	塊2
70	鉄製品	3.7	6.4	1.3	30		No.4	塊2
71	鉄製品	2.0	5.6	1.0	14		P-14-h-5	塊2
72	鉄製品	1.4	7.2	1.1	15		No.6	塊2
73	鉄滓	9.3	7.3	4.7	283.8		No.122 分析資料No.17	他の滓
74	鉄滓	10.2	6.8	6.8	327.4		P-15-m-3 分析資料No.20	他の滓
75	砥石	9.3	4.7	2.9	244		No.164	石

第49表 第3区溝跡一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	長さ	幅	深さ	主軸方向	時期
SD-26	SD-38	Q-14, 15	8.50	0.50	0.43	N-55°-E	中世
27	40	P-13, 14	11.30	1.30	0.38	N-50°-E	中世
28	41	P-14	5.10	0.60	0.41	N-85°-E	中世
29	42	P-14	0.7	0.30	0.07	N-3°-W	中世
30	43	N-14 O-14 P14, 15 Q-15	42.20	3.60	0.27	N-16°-W	中世

(4) 井戸跡

第10号井戸跡(第353図)

P-14区に位置し、第11鋳造遺構群内にあたる。平面形態は円形をしており、断面はほぼ垂直に円筒状に掘られている。規模は長軸1.34m、短軸1.16m、深さ1.50mである。

出土遺物は、炉壁・滓等の鋳造遺物の他、曲物の破片を出土した。

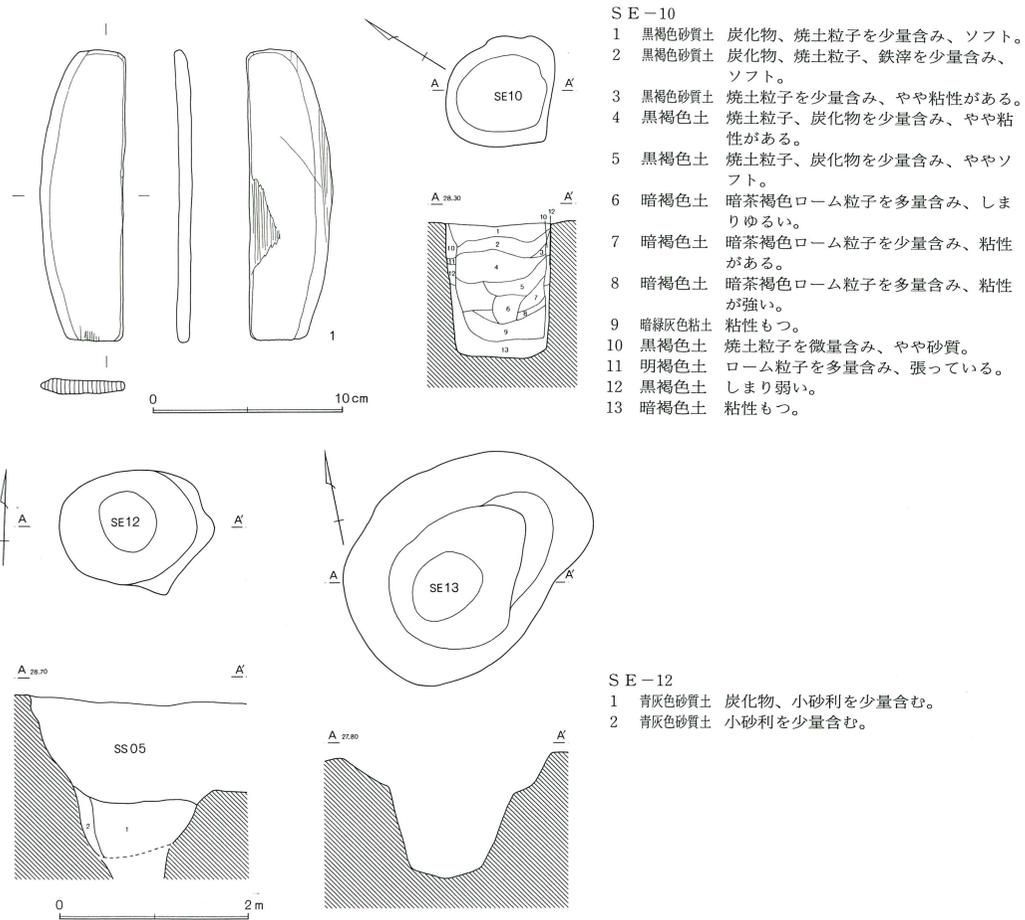
第11号井戸跡 (第354図)

P-14・15区に位置し、第10号井戸跡の東側にあたる。平面形態はわずかに方形に近く、断面は上部がやや広がり、下部は一段径を小さくして円筒状に掘られている。規模は長軸1.86m、短軸1.50m、深さ1.46mである。覆土は12層からなる。第8層の暗青灰色砂質土層内から遺物を検出した。

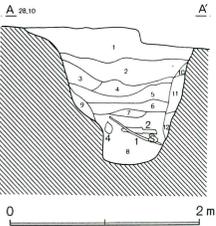
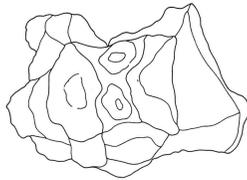
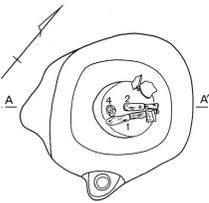
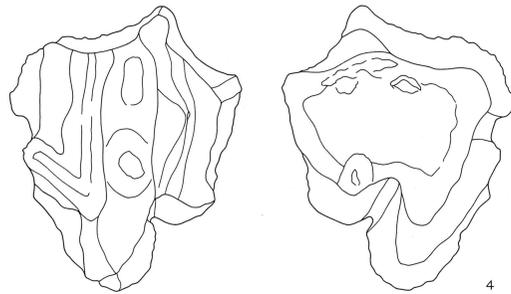
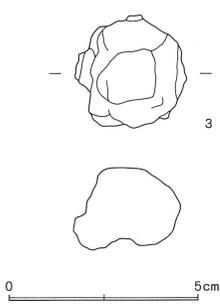
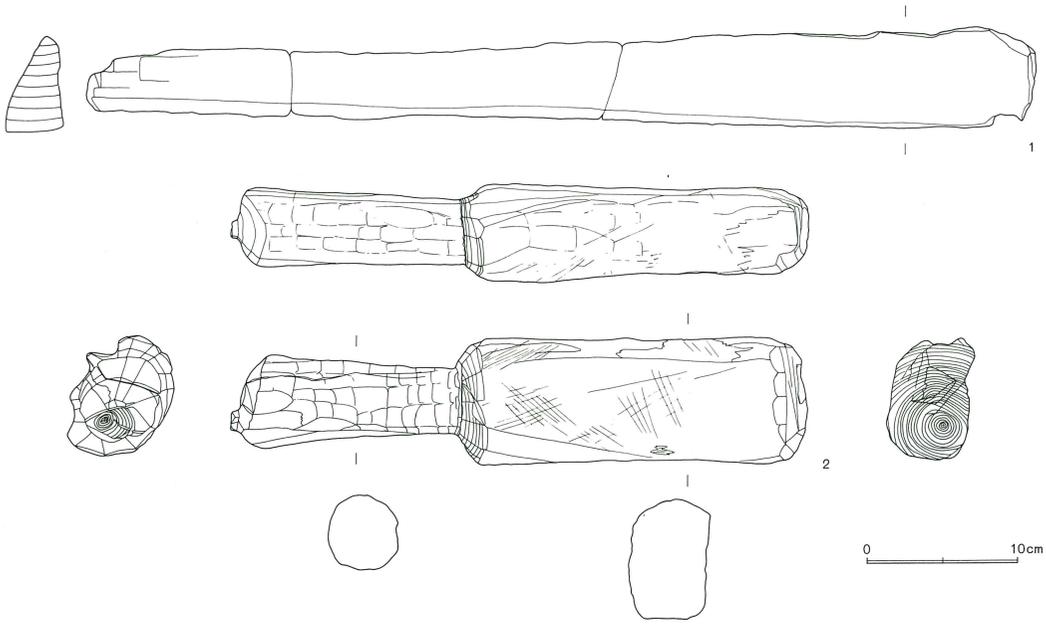
出土遺物は、1・2は木器である。1は井戸枠等の材と思われる。また、2は横槌である。身は面取りされ先端も角を落としている。身から柄にかけては放射状に削られ、柄は身よりも細く端部から身の方向に細かい手斧の削り痕が見られる。全長38.5cm、身径8.3cm、柄径6.1cmである。4は、大型の鉄塊である。金井遺跡で検出された鉄塊の中で最も大型である。金属鉄が多く残されており、鑄造の原料として手に入れたものの大きすぎて小割りできなかったものとも考えられる。

第12号井戸跡 (第353図)

P-13区に位置し、第5 鑄造遺構群内にあたる。上層の堆積土は第5 鑄造遺構群の第9 土層の覆土で、下層が井戸の覆土となる。平面形態は円形をしており、断面はほぼ逆円垂状に掘られている。規模は長軸1.40m、短軸1.20m、深さ1.60mであるが、地山の崩落の危険があるため井戸底までは及んでいない。



第353図 第10・12・13号井戸跡・出土遺物



- 1 黒褐色砂質土 炭化物、焼土粒子を多量、焼土塊、鉄滓を少量含む。
- 2 暗褐色砂質土 炭化物、焼土粒子、鉄粉を少量含む。
- 3 暗褐色砂質土 鉄粉、炭化物を多量含む。
- 4 黄褐色砂質土 鉄粉を多量、炭化物、炉壁片を少量含む。
- 5 暗褐色砂質土 鉄粉を層状に、炭化物を少量含む。
- 6 暗青灰色土 粘性が強い。
- 7 黄褐色砂質土 鉄粉を多量、炭化物を少量含む、4より明るい。
- 8 暗青灰色砂質土 焼土塊を少量含む。
- 9 暗青灰色粘土 粘性が強い。
- 10 黒褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 11 黒褐色粘土 ローム質粘土を少量含む。
- 12 暗緑灰色粘土 粘性が強い。

第354図 第11号井戸跡・出土遺物

出土遺物は、土師器の破片を少量検出した。

第13号井戸跡（第353図）

O-14区に位置し、第13鑄造遺構群内にあたる。平面形態は楕円形をしており、断面はほぼ逆台形状に掘られている。規模は長軸2.80m、短軸2.16m、深さ1.34mであるが、地山の崩落の危険があるため井戸底までは及んでいない。

出土遺物は、土師器の破片と鑄造遺物を少量検出した。

第11号井戸跡出土鑄造遺物観察表（第354図）

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
3	鉄塊系遺物	3.0	2.9	2.0	20			塊1
4	大型鉄塊系遺物	13.7	12.2	7.8	2773.1		No.4 分析資料No.1	塊1

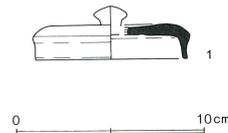
第50表 第3区井戸跡一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SE-10	SE-12	P-14	円形	1.34	1.16	1.50	N-84°-W	中世
11	13	P-14, 15	方形	1.86	1.50	1.46	N-35°-E	中世
12	14	P-13	円形	1.40	1.20	1.60	N-64°-E	古代
13	15	O-14	楕円形	2.80	2.16	1.34	N-80°-E	中世

(5) 土 壙

本区からは第169～177号土壙を検出した。本区では他にも多くの土壙を検出したがその多くは鑄造土壙であることからそれぞれを鑄造遺構群内の鑄造土壙として報告する。本区土壙の出土遺物は第355図1の第175号土壙より検出した須恵器蓋である。



第355図 第3区土壙出土遺物

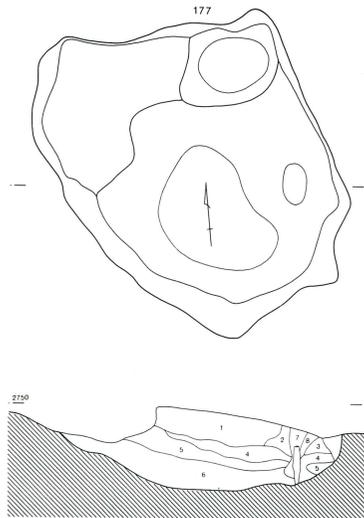
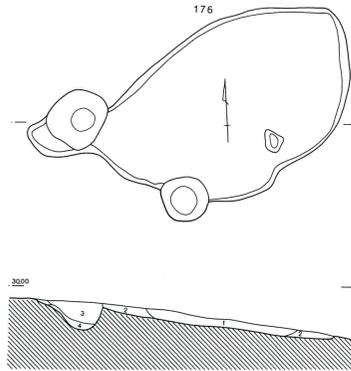
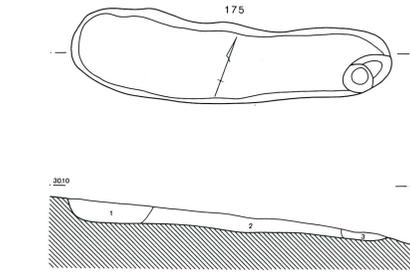
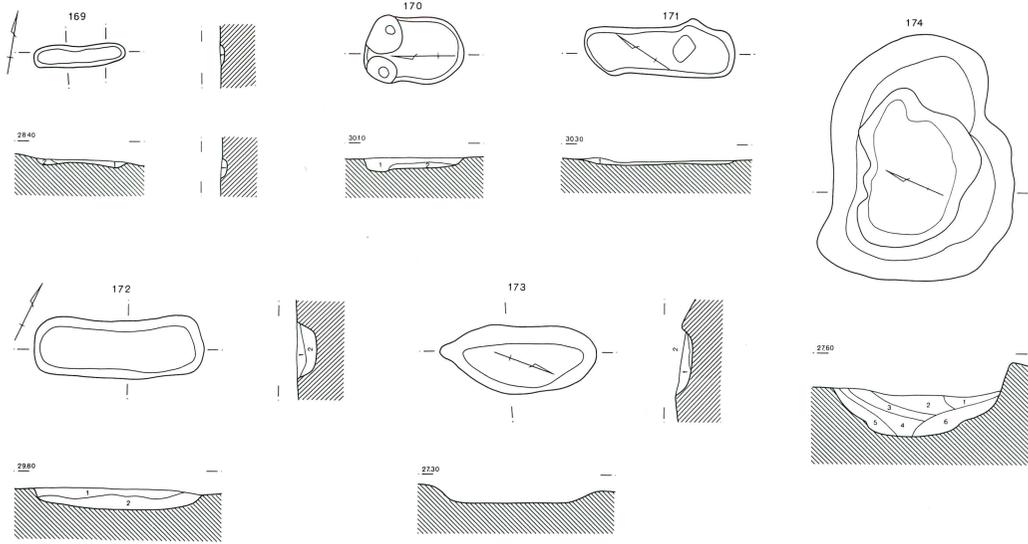
第3区土壙跡出土遺物観察表（第355図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	須恵器蓋	6.0	1.8		BCFI	A	灰褐色	40%	SK175	南比企

第51表 第3区土壙一覧表

(単位 cm)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-169	SK-201	P-14	長方形	98	24	5	N-75°-E	
170	144	R-13	楕円形	106	68	11		中世
171	107	S-14	長方形	158	52	4	N-35°-W	
172	149	Q-13	長方形	168	60	20	N-62°-E	古代
173	266	P-15	楕円形	168	72	16	N-18°-W	中世
174	75	Q-15	楕円形	260	196	57	N-77°-E	中世
175	103	S-14	楕円形	340	90	17	N-70°-E	古代
176	97	S-14	楕円形	280	170	3	N-52°-E	古代
177	261	P-15	不整形	366	260	59	N-38°-W	中世



SK-169

- 1 黒褐色土 炭化物多量。焼土粒子少。
- 2 黒褐色土 粒の細かい砂利少量含む。

SK-170

- 1 暗黒褐色土 砂・焼土・ローム・炭化粒子含む。
- 2 暗黒褐色土 1に比べ明るい。焼土・ローム・炭化粒子を含む。

SK-171

- 1 暗褐色土 砂利、ローム・炭化・焼土粒子含む。

SK-172

- 1 暗褐色土 砂質ローム粒子多量含む。しまり硬い。
- 2 暗褐色土 砂質ローム粒子少量含む。しまり硬い。

SK-173

- 1 橙色砂質土 焼砂を多量、炭化物微量。
- 2 黒褐色土 鉄粉少量。粘性もつ。

SK-174

- 1 赤褐色土 酸化鉄分主体。しまり強。
- 2 褐色土 砂質土。酸化鉄分多い。
- 3 褐色土 酸化鉄分を主体。礫混在。しまり硬い。
- 4 褐色土 ローム土主体。酸化鉄分が多く、粘性あり。

- 5 青灰色土 粘土層。
- 6 青灰色土 粘土層。

SK-175

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子混在。
- 2 褐色土 砂粒子、小砂利多い。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒子を含む。

SK-176

- 1 暗褐色土 焼土・炭化・砂粒子含む。
- 2 暗褐色土 きめ細かく、ローム・砂粒子含む。
- 3 褐色土 小砂利、若干の焼土粒子。
- 4 褐色土 3に比べ、砂利が多い。

SK-177

- 1 黒褐色土 鉄粉のブロック、炭化物を少量含む。
- 2 橙色砂質土 鉄粉、炭化物多量含む。
- 3 黒褐色砂質土 鉄粉多量。炭化物少量。
- 4 黒褐色土 炭化物、鉄粉微量。
- 5 橙色砂質土 鉄粉多量。粘性もつ。
- 6 暗青灰色砂 鉄粉を微量含む。
- 7 暗褐色砂質土 炭化物を微量含む。
- 8 暗褐色砂質土 7に近似。色調暗い。

0 2 m

第356図 第3区土壌

4 第4区の遺構と遺物

本区は第3区の北側にあたり、3区に見られた東側の緩斜面が連続して伸びる。この緩斜面に第14鑄造遺構群を検出し、東側の平坦な低台地上に廃滓場としての第15鑄造遺構群を確認した。これらの両群は他の鑄造遺構群から離れ独立した状況が見られ一つの鑄造鑄込み作業の単位として捉えることができる。

緩斜面の地山は砂礫層にローム粒子を混在させたもので遺構の掘削には労力の伴う場所と考えられるが、鑄造作業に置ける地形的な条件として緩斜面の必要性は第一条件であったことがわかる。

本区の北側は地形が大きく落ち込み毛呂台地の終焉部分にあたる。第5鑄造遺構群を始め東緩斜面に展開してきた鑄造遺構群も本区をもって終わる。西側はさらに一段地形を高くした未調査区が存在し、今後の調査成果と合わせて検討する必要がある。

(1) 鑄造跡

a 第14鑄造遺構群

調査区北側に位置し、調査区の東側を南北方向に伸びる緩斜面の北端に検出された。同一の緩斜面に造られた第5～13鑄造遺構群から北に離れること約70mである。このことは、鑄造作業場としての単位が分離していることを示唆する。また、東側にはテラス状の低い台地が広がりこの部分に廃滓場を主体とした第15鑄造遺構群を検出した。本群は第1・2号炉跡、および第1号鑄込み跡の遺構で構成されている。

検出された遺構は、東向きの比高差1.00mの緩斜面にあたり、褐色土に小砂利や礫を多く含む地山を「L」字状に掘り込んで造られている。また、周辺には多くのピットを検出した。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口等の鑄造遺物を検出した。

遺構

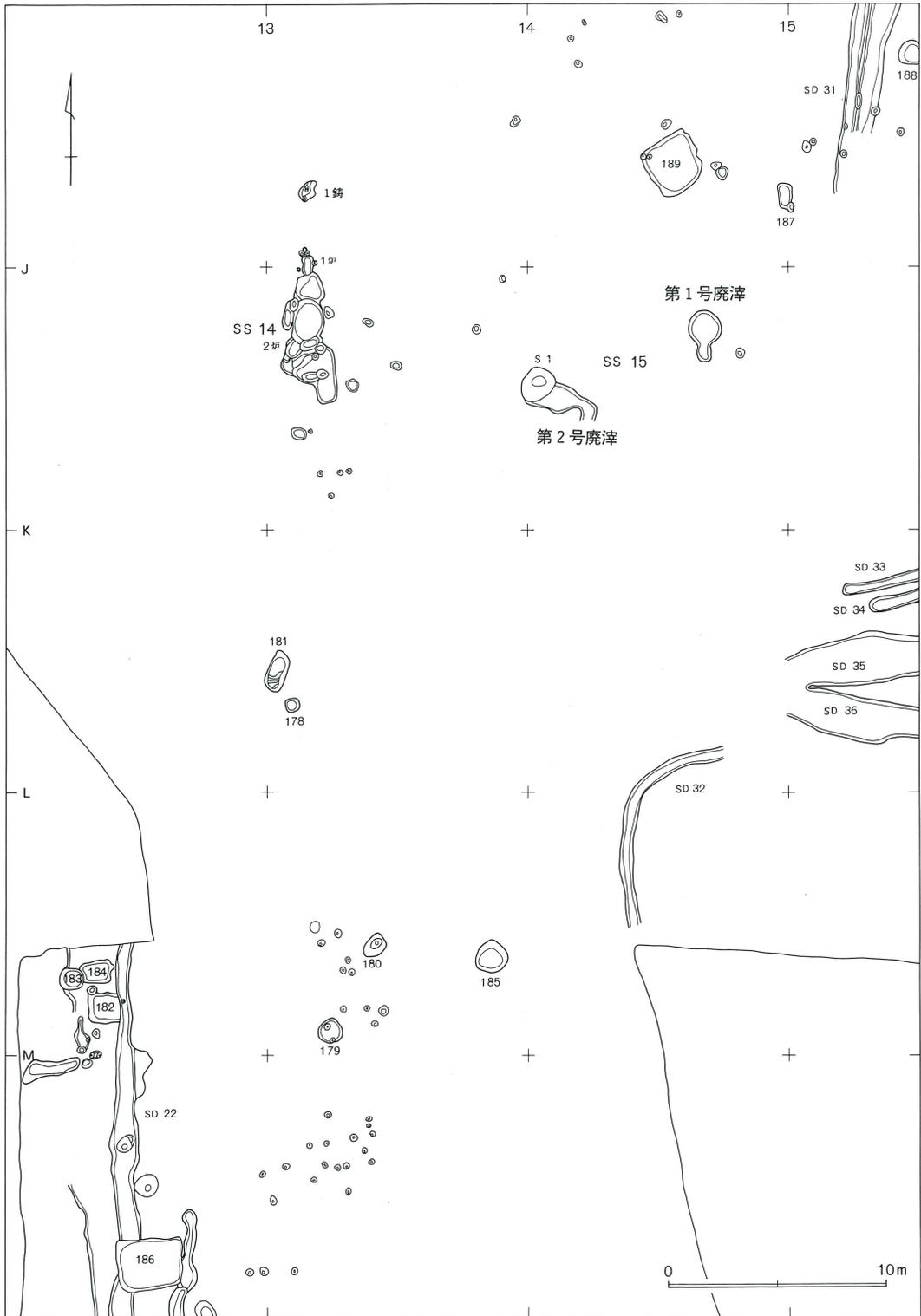
第1号鑄込み跡（第359図）

本遺構は第14鑄造遺構群の北端にあたり本遺跡における最北端に位置する鑄造遺構である。南側3mの位置に第1・2号炉が存在する。形態は南北にやや長い楕円形をしており斜面部を「L」字状に掘り込んで平坦な面を造り出している。規模は長径1.05m、短径0.75m、深さ18cmである。断面観察による第1層が鑄込み跡の覆土と考えられる。この第1層中から掘えられた状態の容器鑄型をまとめて検出した。

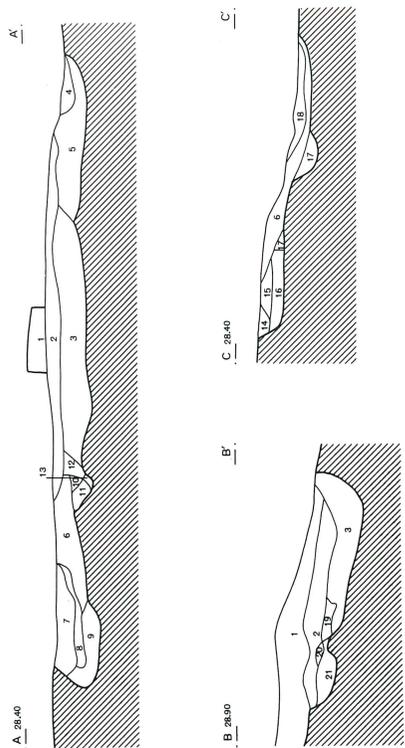
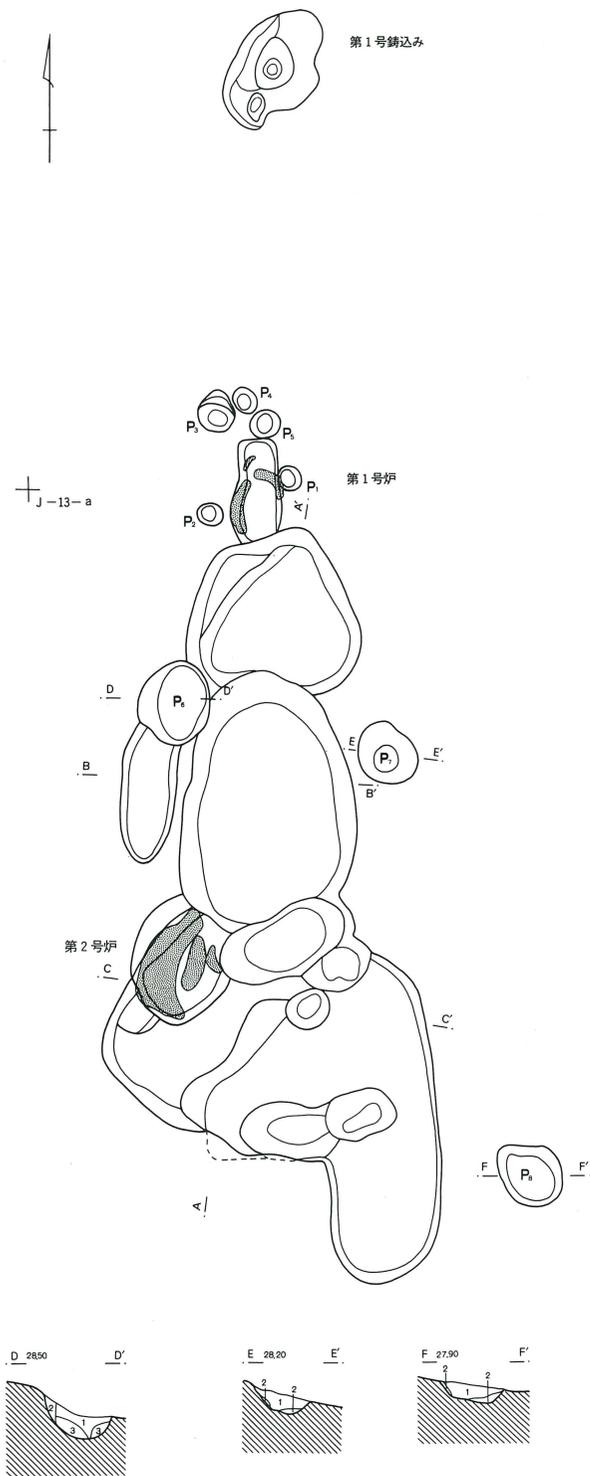
第1号炉跡（第360図）

第14鑄造遺構群の北側に設置されている。形態は南北に細長い長方形の掘り方内に環状に地山が焼けて検出された。規模は掘り方の長軸が0.82m、短軸が0.52m、深さ12cmである。覆土は第1層が炭化物を多く含む黒褐色土、その下層の第2層は赤褐色の焼土層であった。炉跡の南側には連続する2基の円形土壇を検出した。底面は平坦に掘り込まれており作業面と考えられる。

出土遺物はほとんどない。



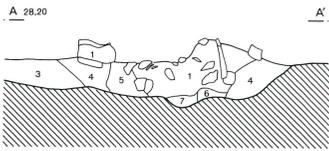
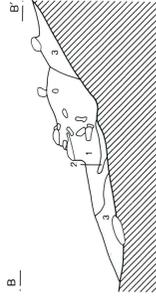
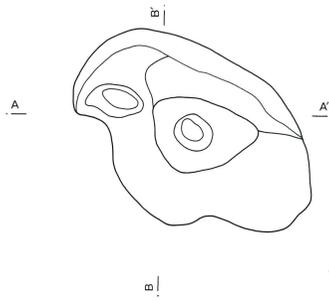
第357图 第4区遺構配置図



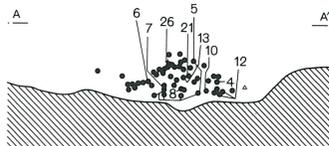
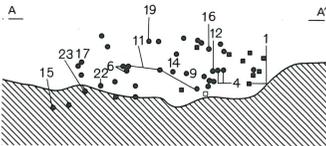
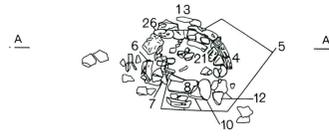
- 第2号炉
- 1 暗褐色土 石、小砂利を含む。
 - 2 暗褐色土 焼砂、焼土粒子、炭化物を多量含む。
 - 3 黒褐色土 炭化物、ローム粒子を微量含む。
 - 4 黒褐色土 炭化物、ローム・焼土粒子を含む。
 - 5 黒褐色土 炭化物、ローム粒子を少量含む。
 - 6 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
 - 7 黒褐色土 ローム・焼土粒子を少量含む。
 - 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
 - 9 黒褐色土 炭化物、ローム粒子を少量含む。
 - 10 明褐色土 焼土粒子、炭化物を多量含む。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子を含む。
 - 12 黄褐色土 ローム土を主体。
 - 13 明褐色土 ローム粒子を多量含む。
 - 14 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
 - 15 暗褐色土 焼土粒子、ロームブロックを少量含む。
 - 16 暗褐色土 炭化物を多量、焼土粒子を少量含む。
 - 17 明褐色土 ローム粒子を多量含む。
 - 18 黒褐色土 焼土粒子を少量含む、ソフト。
 - 19 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
 - 20 暗褐色土 焼土粒子を多量、炭化物を微量含む。
 - 21 黄褐色土 ローム土を主体。
- Pit-6
- 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を多量含む。
 - 2 黄褐色土 ローム土を主体。
 - 3 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。
- Pit-7
- 1 黒褐色土 焼土塊・炭化物を少量含む。
 - 2 黒褐色土 焼土粒子を微量含む。
- Pit-8
- 1 黒褐色土 炭化物を多量、焼土粒子少量含む。
 - 2 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。

0 2 m

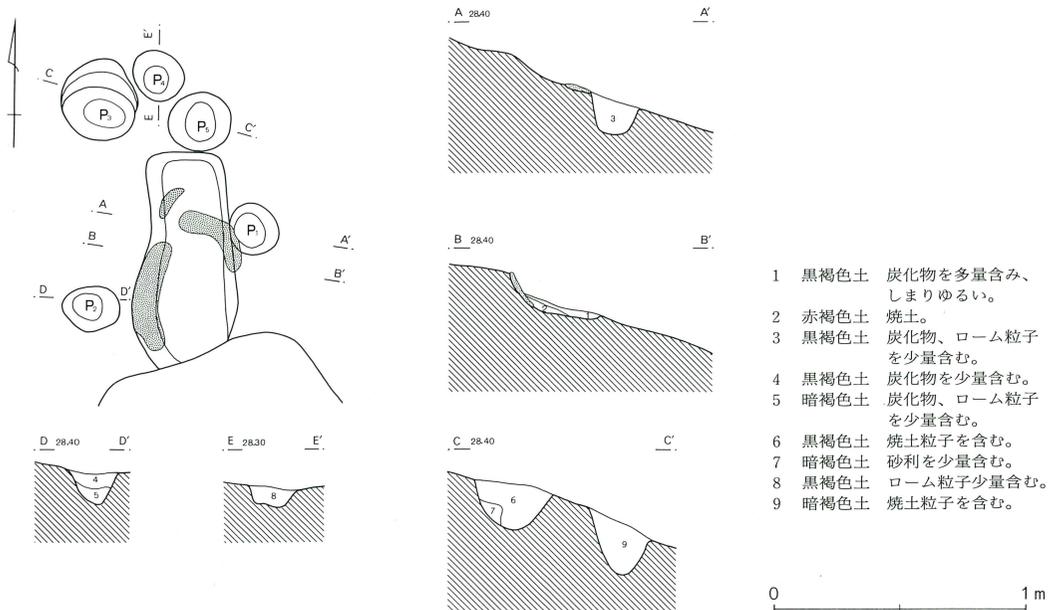
第358図 第14号遺構群全体図



- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、小砂利を少量含む。
- 3 暗褐色土 小礫を多量含む。
- 4 暗褐色土 しまりゆるく、ソフト。
- 5 暗褐色土 焼土粒子を微量含み、しまりよい。
- 6 暗褐色土 焼土粒子を含む。
- 7 暗褐色土 小礫を少量含む。



第359図 第14群第1号鑄込み跡



第360図 第14群第1号炉跡

第2号炉跡 (第358図)

第14群遺構群の中央部分にあたり西側の斜面部分に掘り込まれて構築されていた。形態は南北にやや長い掘り込みの楕円形である。規模は長径1.05m、短径0.85m、深さ18cmである。底面はほぼ平坦であり、西壁および底面の地山面は焼けている。東側には作業面と考えられる不整形の掘り込みをもつ。

遺物

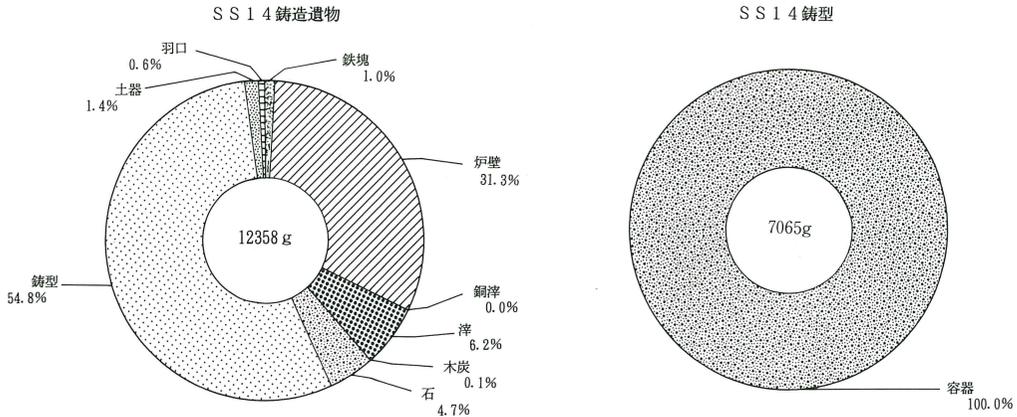
第14群遺構群から検出した鑄造遺物は、全て分類計量した。その結果、鉄塊128g、炉壁3865g、銅滓4g、鉄滓762g、木炭7g、石575g、鑄型6767g、土器178g、羽口72gを計量した。この内、鑄型は容器と獣脚である。炉壁は他の鑄造遺構群に比べ出土割合が少ない。

炉壁は、1の溶解炉の胴部の破片を検出した。内面の溶解物は錆が目立ち赤茶色をしている。素材は粘土で胎土中に焼土塊・鉄滓粒・砂粒子・スサを混在させる。湯滓面の厚さは5～10mm、粘土部分は4cmの厚さをもち、湯滓に接する粘土は還元状態になるため青灰色をしている。また、外側粘土は酸化状態の赤褐色である。

鑄型は、獣脚の付く容器鑄型を検出した。2・3は長脚の獣脚鑄型片である。中央には二条の横線があり、2は指先まで残存させる。残存する長さは9.8cm、形態は湾曲しながら大きく外に開き、素材の粘土はややきめが粗く白色粒子・砂粒子・白色針状物質を含む。獣脚面は赤褐色のまま未使用の鑄型片と考えられる。3も同様の作りであるが、獣脚面は青灰色で鑄込みを行った使用済みの鑄型片である。4～23は容器の鑄型片である。4・5から考えられる推定口径は31.4cmで、11・12は容器の腰の部分とみられる。また、20・22・23は三条と二条の沈線が巡り、幅3mm程である。

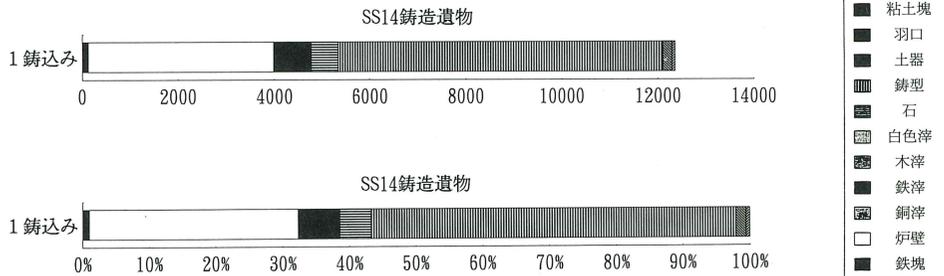
鉄塊は25～31で、25・29は鉄塊系遺物であり、26・27・30・31は鑄造製品の破片と考えられる。

第52表 第14铸造遺構群遺物計量表

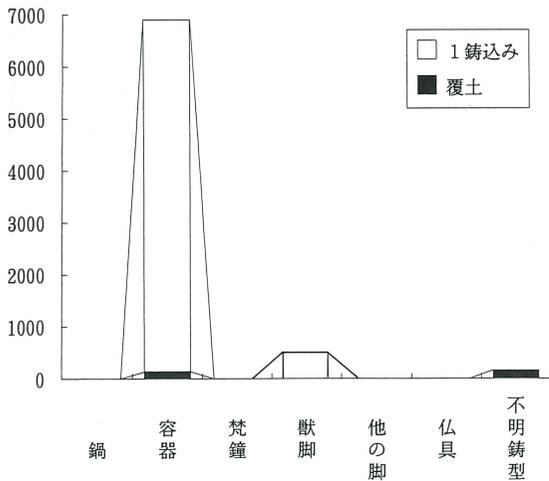


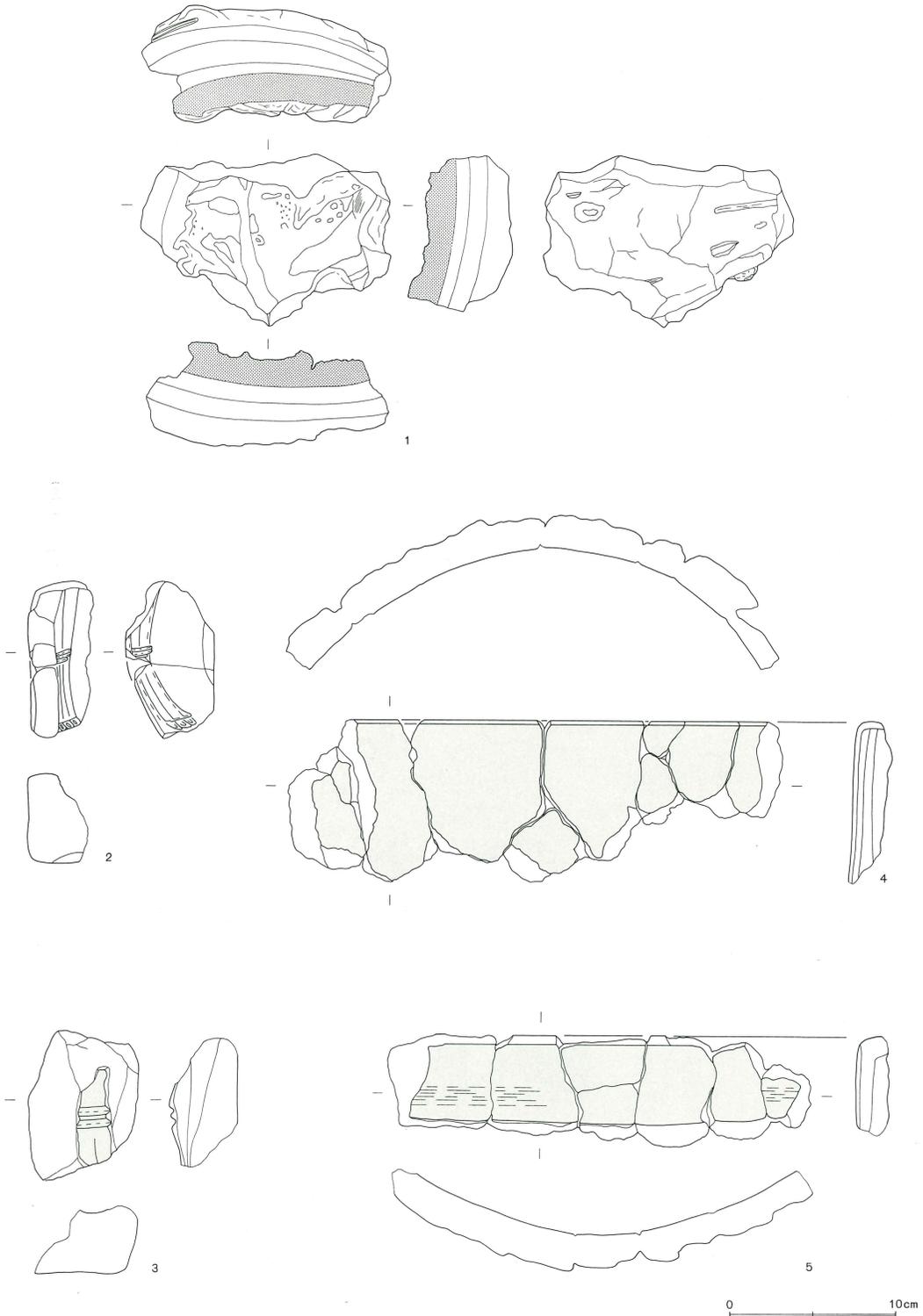
小番号	鉄塊	炉壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
1 鑄込み	128	3865	4	762	7	0	575	6767	178	72	0

小番号	鍋	容器	梵鐘	獸脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
覆土	0	136	0	0	0	0	162	0	136	298
1 鑄込み	0	6451	0	316	0	0	0	0	6767	6767
合計	0	6587	0	316	0	0	162	0	6903	7065

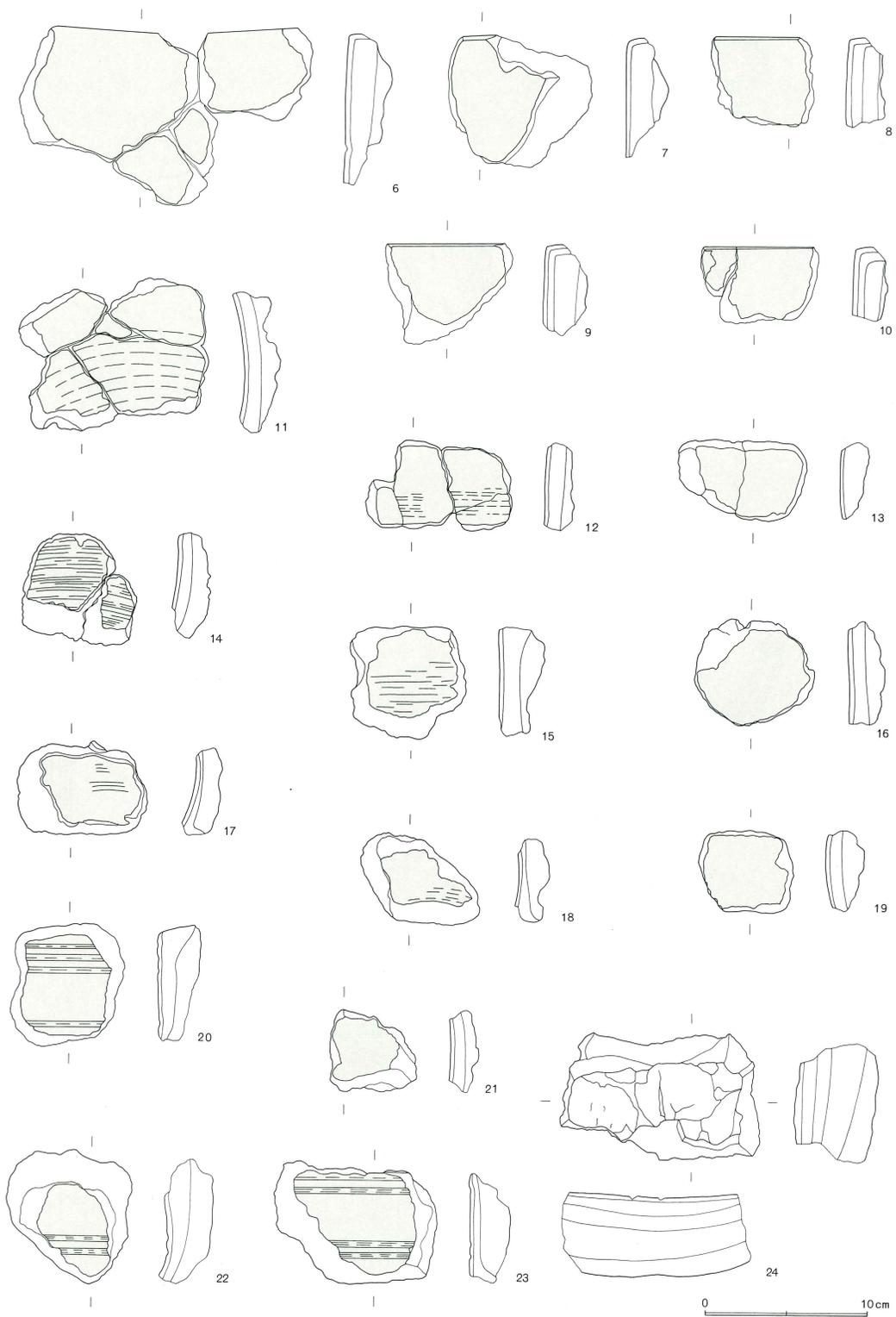


SS14鑄型

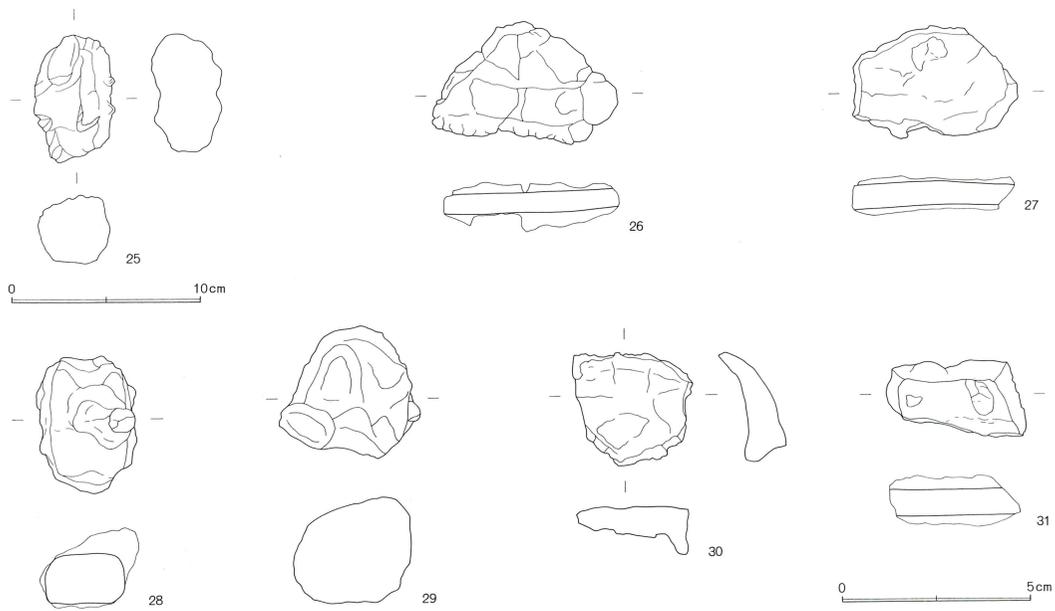




第361図 第14鑄造遺構群出土遺物(1)



第362図 第14鑄造遺構群出土遺物(2)



第363図 第14群出土遺物(3)

第14群出土遺物観察表 (第361~363図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	炉壁	9.9	14.9	6.1	630		第1号鑄込みNo22	炉1
2	獣脚	9.5	5.4	3.6	135			鑄型
3	獣脚	8.8	6.4	4.0	181		第2号廃滓 J-14-i-3	鑄型
4	容器	9.7	29.8	2.3	660		第1号鑄込みNo41, 42, 101	鑄型
5	容器	5.3	23.8	2.0	370		第1号鑄No69, 70, 77, 78, 79, 90	鑄型
6	容器	9.2	16.4	2.9	410		第1号鑄込みNo33, 34, 66	鑄型
7	容器	7.1	5.6	2.6	143		第1号鑄込みNo78	鑄型
8	容器	5.3	5.4	2.4	90		第1号鑄込みNo68 胎土分析22	鑄型
9	容器	4.8	6.8	2.8	100		第1号鑄込みNo31	鑄型
10	容器	4.1	6.4	2.2	70		第1号鑄込みNo52	鑄型
11	容器	10.5	7.6	2.3	205		第1号鑄込みNo24, 29, 32	鑄型
12	容器	4.8	8.2	1.8	85		第1号鑄込みNo42, 46, 47	鑄型
13	容器	4.1	6.3	1.6	60		第1号鑄込みNo103	鑄型
14	容器	4.4	6.5	2.2	85		第1号鑄込みNo30	鑄型
15	容器	5.4	5.6	2.8	135		第1号鑄込みNo.1	鑄型
16	容器	5.7	6.9	2.2	95		第1号鑄込みNo.38	鑄型
17	容器	4.0	5.8	1.8	90		第1号鑄込みNo.8	鑄型
18	容器	3.3	4.9	1.9	70		第1号鑄込み	鑄型
19	容器	4.4	5.1	2.4	60		第1号鑄込みNo.13	鑄型
20	容器	6.2	5.3	2.5	140		第1号鑄込み	鑄型
21	容器	3.9	3.7	1.7	40		第1号鑄込みNo.89	鑄型
22	容器	5.0	4.3	2.9	145		第1号鑄込みNo.6	鑄型
23	容器	6.3	7.2	2.5	190		第1号鑄込みNo.3	鑄型
24	炉壁	7.1	12.3	5.0	425			炉1
25	鉄塊系遺物	6.5	4.3	3.7	140		分析資料No.6	塊1

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
26	鉄塊系遺物	3.0	4.3	1.2	19		第1号鑄込みNo.100	塊2
27	鉄塊系遺物	2.8	4.3	1.0	20		第1号鑄込み	塊2
28	鉄塊系遺物	3.6	2.6	1.9	33			塊1
29	鉄塊系遺物	3.4	3.7	2.7	47			塊1
30	鉄塊系遺物	2.9	3.0	1.2	25			塊1
31	鉄塊系遺物	2.0	3.4	1.3	21			塊1

b 第15鑄造遺構群

調査区北側に位置し、東側の緩斜面を下ったテラス状の台地に検出された。西側に第14鑄造遺構群が存在する。本群は第1・2号廃滓および第1号鑄造土壌で構成されている。

本群の廃滓場からは、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口等の鑄造遺物を検出した。

遺構

第1号鑄造土壌 (第364図)

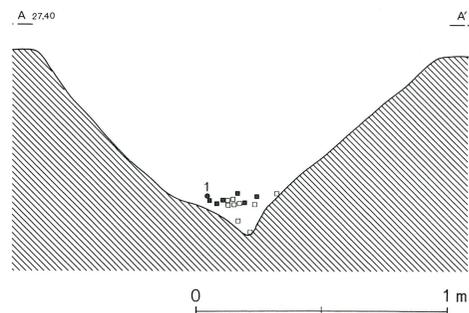
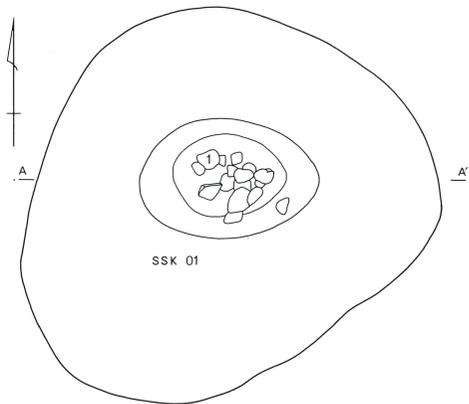
本土壌は第2号廃滓を東側に伴って検出した。形態は円形で、底面は狭く楕円状をしている。規模は直径1.60m、深さ73cmである。覆土は焼土・炭化粒子を含む黒褐色土であった。土壌の底面は狭く直径0.40m程である。

出土遺物は、土壌底面からまとまった状態で炉壁と石を検出した。

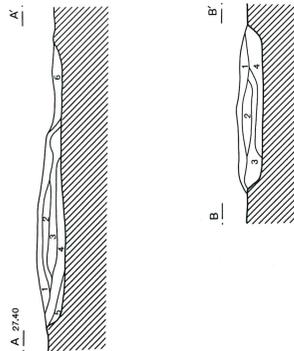
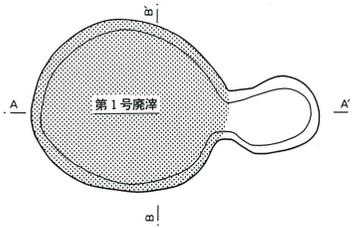
遺物

第15鑄造遺構群から検出した鑄造遺物は、全て分類計量した。その結果、鉄塊414g、炉壁19480g、銅滓15g、鉄滓28475g、木炭1982g、白色滓30g、石957g、鑄型509g、土器492g、羽口713g、粘土塊54gを計量した。この内、鑄型は容器210g、獣脚178gを計量した。

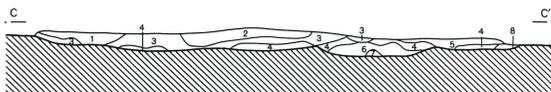
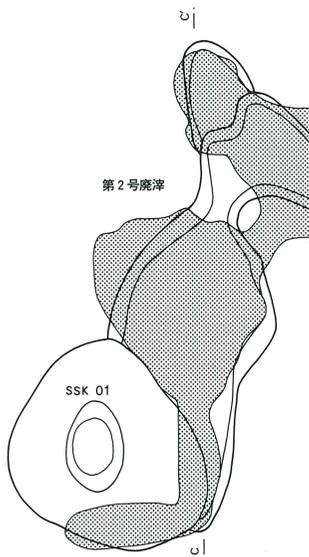
鉄滓は全て錆が多く出ている。特色としては、分類で滓2とした錆化滓とした中でも錆が著しく見られる。また、滓の中には精錬滓に近いものと再結合滓を含んでいる。第1号廃滓からは再結合滓が多く認められる。第2号廃滓からは鉄塊系遺物に近い滓2が多く認められた。1は小片ではあるが鉄滓のなかでも精錬滓と考えられる。ガラス質の黒色の滓であり、表面が鈍い光沢をもった流状滓と考えられる。



第364図 第15群第1号鑄造土壌



↑ J-14-f



第1号廃滓

- 1 赤褐色土 滓集中層。
- 2 黒褐色土 焼土粒子含み、滓を混在。
- 3 赤褐色土 1に類似。
- 4 赤褐色土 滓を多く、黒色土を混在。
- 5 黒色土 地山。
- 6 赤褐色土 滓を含む。

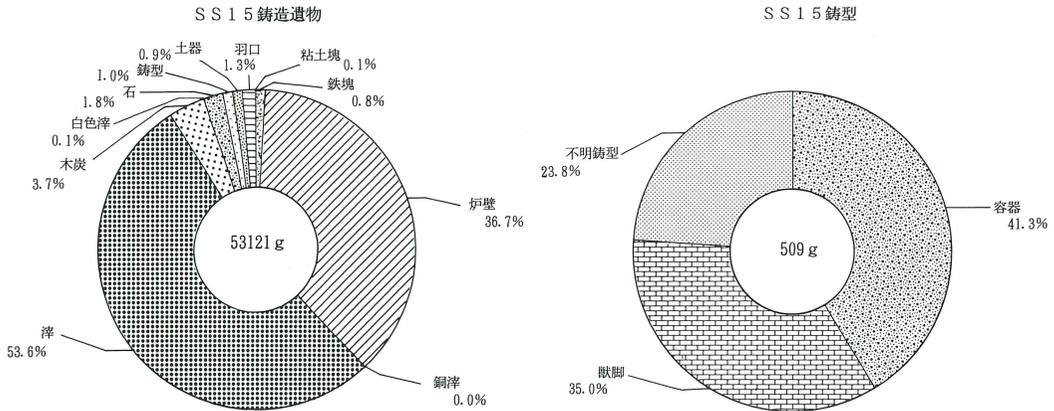
第2号廃滓

- 1 橙褐色土 鉄滓を多量含む。ハード。
- 2 橙褐色土 鉄滓、炭化物を含む。ハード。
- 3 暗褐色土 鉄滓、炭化物を少量含む。
- 4 黒褐色土 鉄粉を微量含む。
- 5 暗褐色土 鉄滓をブロック状に少量含む。
- 6 橙褐色土 鉄滓、炭化物を多量含む。
- 7 黒褐色土 4に近似するが、やや粘性がある。
- 8 黒褐色土 鉄滓を微量含む。

0 ————— 2m

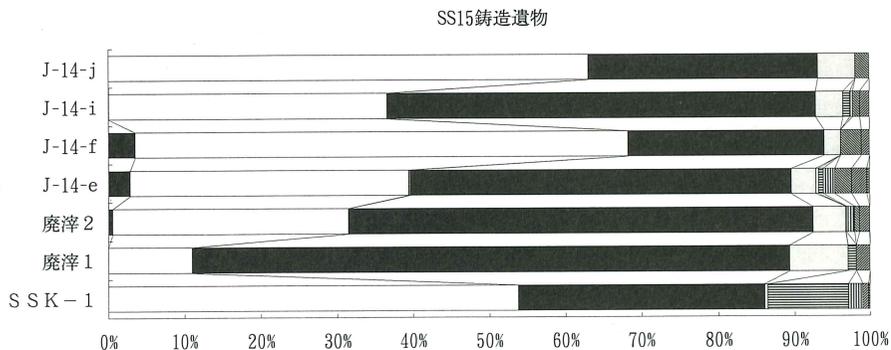
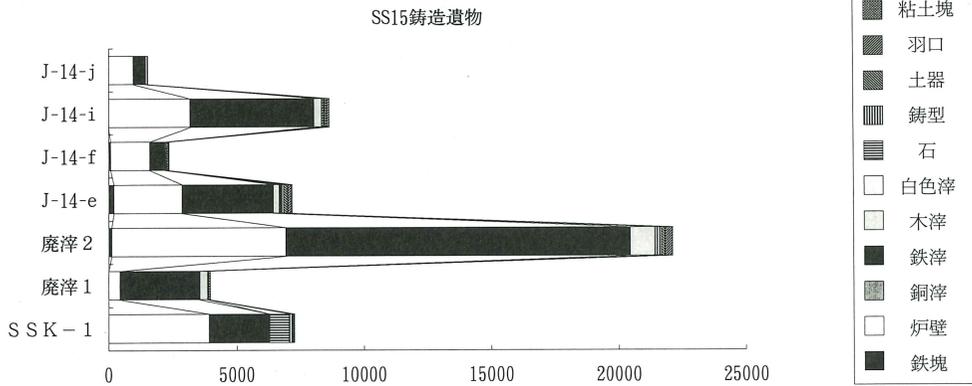
第365図 第15群第1・2号廃滓

第53表 第15铸造遺構群遺物計量表(1)

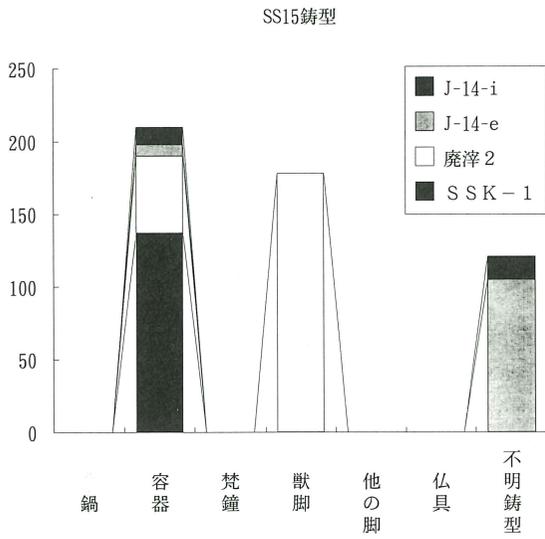


小番号	鉄塊	炉壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
SSK-1	0	3920	0	2352	30	0	773	137	0	57	17
廃滓1	0	437	0	3103	308	0	43	0	0	73	0
廃滓2	120	6830	0	13483	965	6	15	231	156	295	9
J-14-e	206	2636	15	3595	233	24	46	113	158	148	28
J-14-f	83	1520	0	602	52	0	0	0	65	26	0
J-14-i	5	3166	0	4876	317	0	80	28	84	114	0
J-14-j	0	971	0	464	77	0	0	0	29	0	0
合計	414	19480	15	28475	1982	30	957	509	492	713	54

小番号	鍋	容器	梵鐘	獸脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
SSK-1	0	137	0	0	0	0	0	0	137	137
廃滓2	0	53	0	178	0	0	0	0	231	231
J-14-e	0	8	0	0	0	0	105	0	8	113
J-14-i	0	12	0	0	0	0	16	0	12	28
合計	0	210	0	178	0	0	121	0	388	509

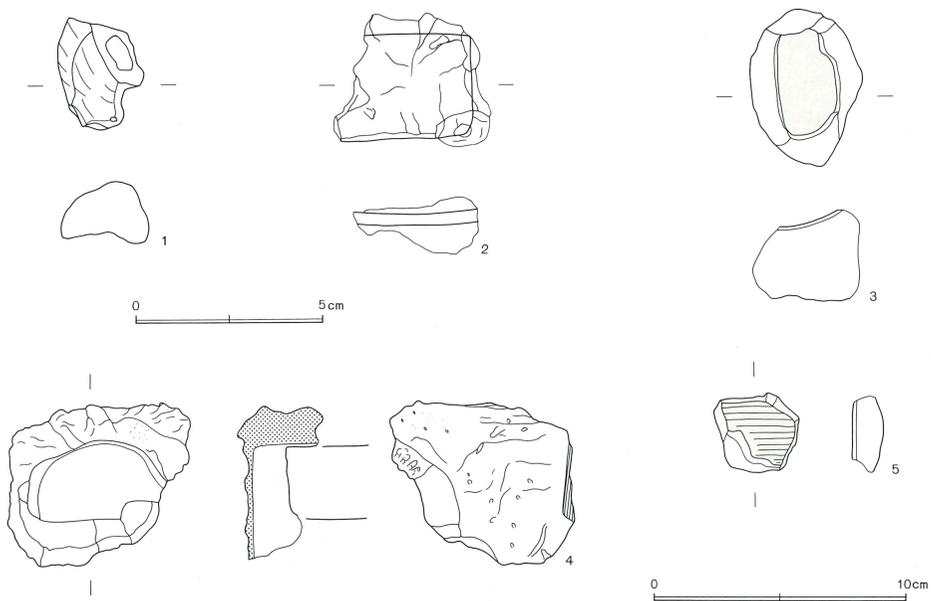


第54表 第15铸造遺構群遺物計量表(2)



炉壁は14980gを計量した。4は炉壁としたが内側を観察すると粘土が円形をして突出し周囲に湯滓を付着する。羽口孔の未孔状態か或いは羽口孔を粘土でふさいだ状態の可能性が考えられる。

铸型は3・5の容器と獸脚を検出した。



第366図 第15铸造遺構群出土遺物

第15群出土鑄造遺物観察表 (第366図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	鉄滓	2.8	2.2	1.5	15		J-14-e-7	他の滓
2	鉄塊系遺物	3.3	4.1	1.5	18		J-14-e-7	塊2
3	容器	6.1	4.5	3.6	73		SSK1 No.1	鑄型
4	炉壁	6.2	7.1	3.2	70		J-14-j-1	炉1
5	容器	3.1	3.3	1.2	13		J-14-i-2	鑄型

第55表 第14・15鑄造遺構群一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-14 第1号鑄込み	SS-14 第1鑄込み	I-13-i	楕円形	1.05	0.75	0.18	N-1°-E
第1号炉	第1号炉	J-13-a	長方形	0.82	0.52	0.12	
第2号炉	第2号炉	J-13-e	楕円形	1.05	0.85	0.18	
SS-15 SSK01	SS-15 SK01	J-14-e	円形	1.60		0.73	
第1号廃滓	第1廃滓	J-14-g					
第2号廃滓	第2廃滓	J-14-i					

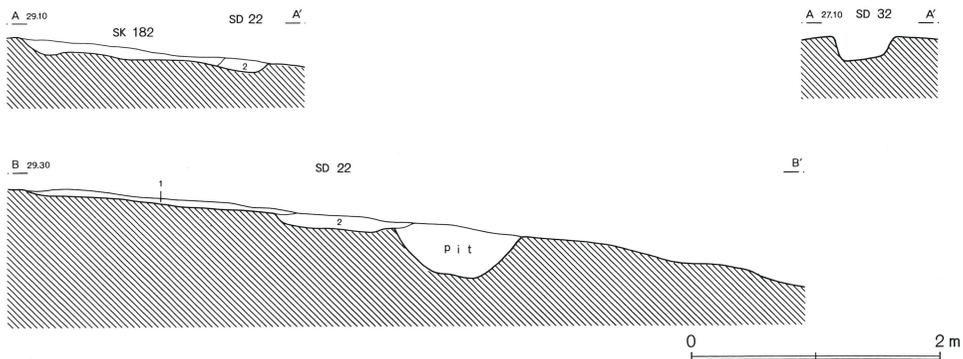
(2) 溝跡

本区には第2区から続く第22号溝と斜面裾に「L」字状に曲がる第32号溝が存在する。第22号溝内から検出した遺物は第2区に掲載した。主要な鑄造遺物は大型の獣脚鑄型と溶解炉片、中世陶器を多数検出した。おそらく、第22号溝の西側にあたる未調査区部分に仏具生産を主体とした鑄造遺構の存在が考えられる。一方、第32号溝を検出したあたりは、台地を下った位置で、比高差2m以上もある。おそらく本溝は、台地縁辺に掘られた、排水的機能をもつ溝と考えられる。このほか、第5区に伸びる第33~36号溝の存在も同様とみられる。

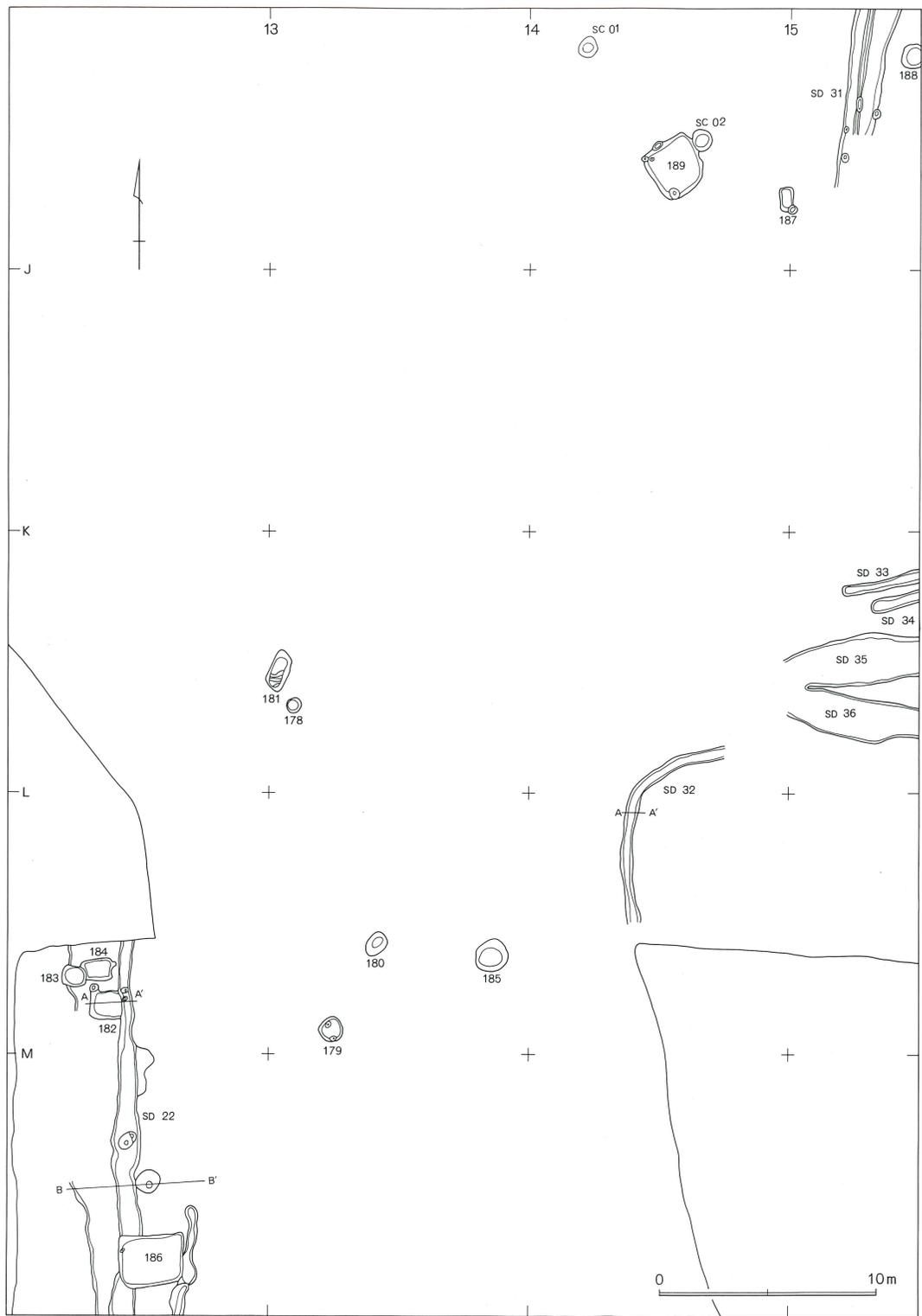
第56表 第4区溝跡一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	長さ	幅	深さ	主軸方向	時期
SD-32	SD-49	K-14 L-14	10.50	0.60	0.13	N-1°-W	近世



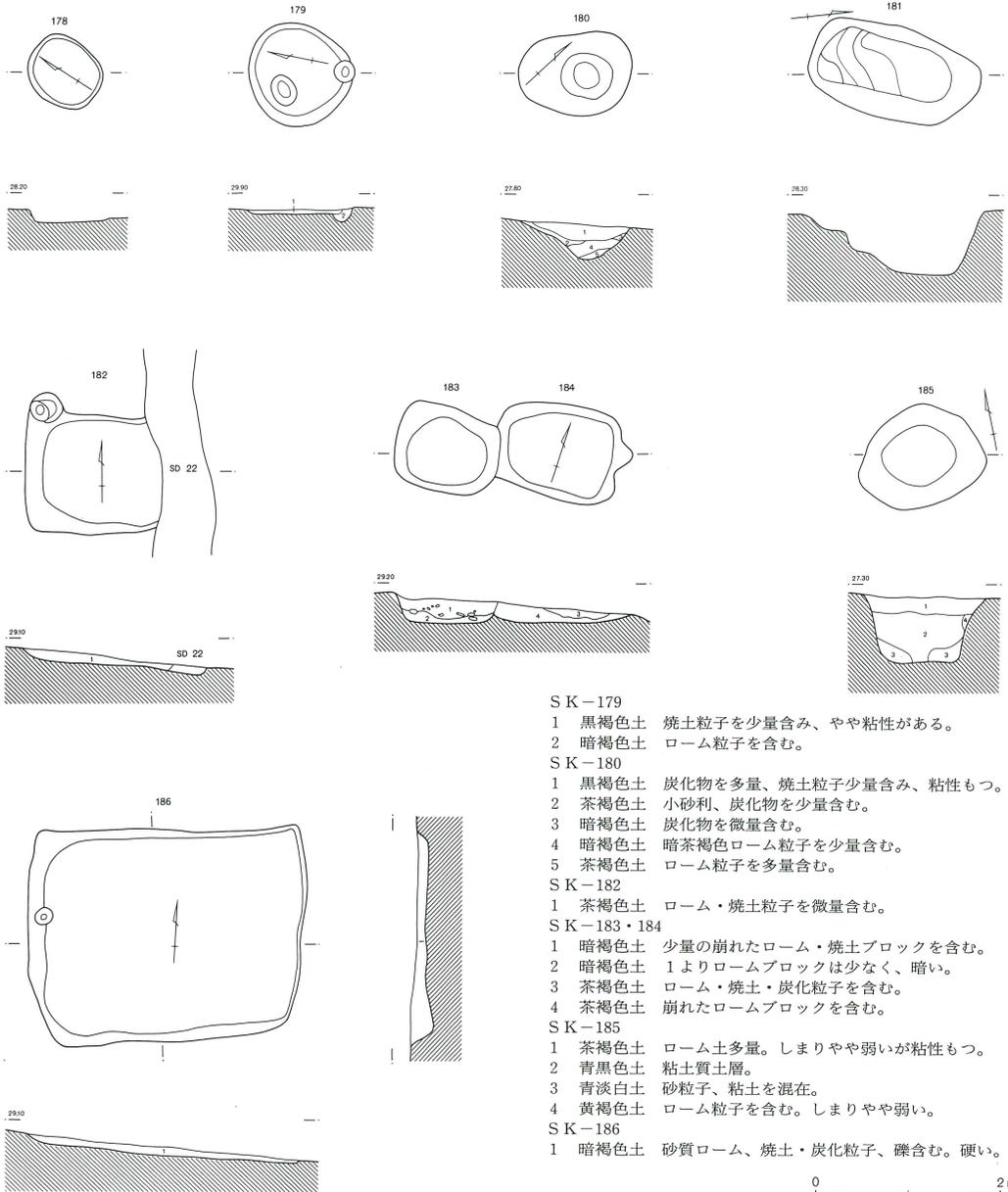
第367図 第4区溝跡土層図



第368图 第4区沟迹·土壤配置图

(3) 土 壙

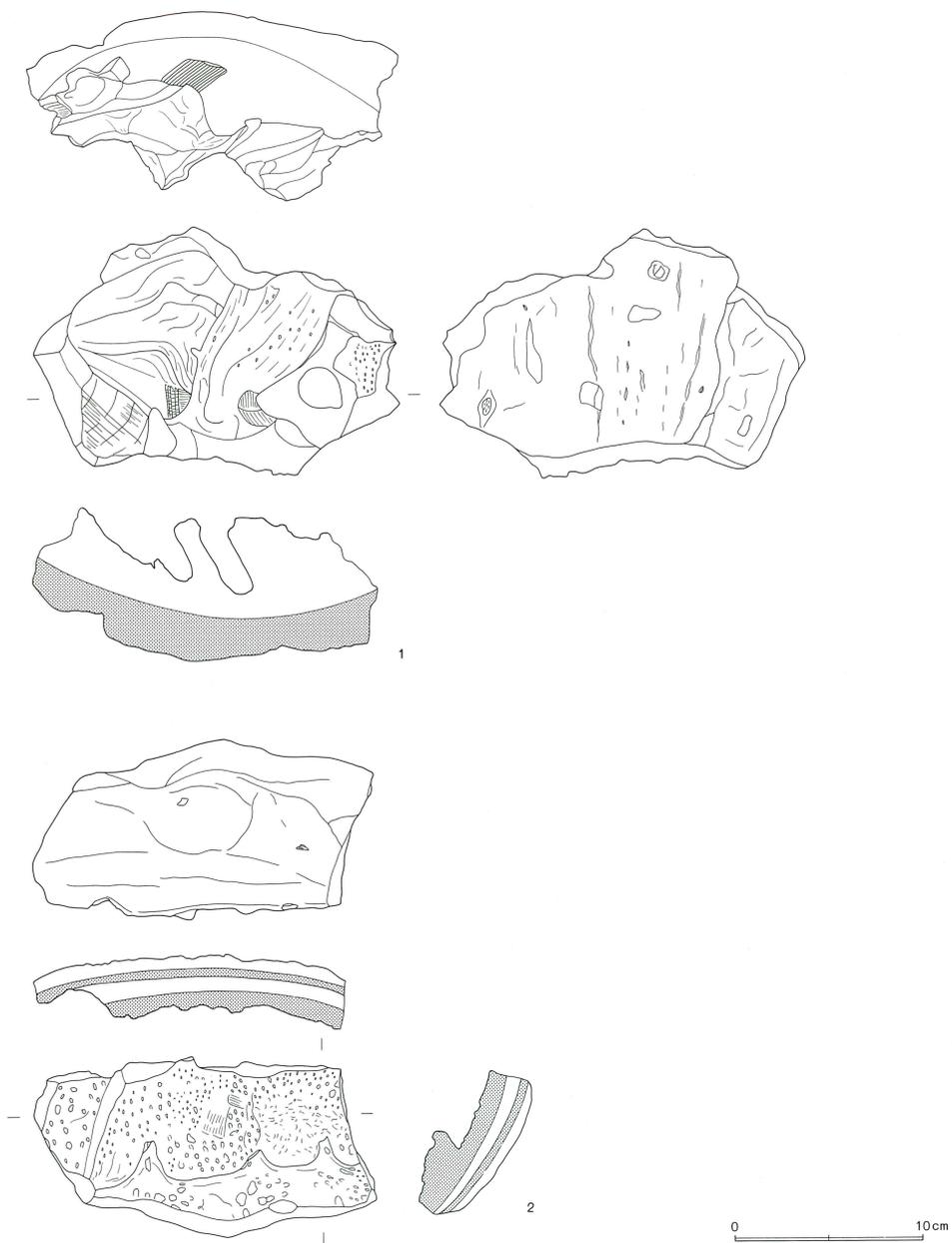
本区からは第178～186号土壙を検出した。第183号土壙内からは第370図1・2の溶解炉破片を検出した。第185号土壙からは第371図3・4の木製品を検出した。3は坏で、大きさは口径9.0cm、器高1.6cm、底径6.4cmである。4は中央に柄の装着される四角いほぞ穴をもつ鋤先である。残存長20.1cm、残存幅8.0cm、厚さ1.8cmでの半身部分である。



- S K-179
 1 黒褐色土 焼土粒子を少量含み、やや粘性がある。
 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- S K-180
 1 黒褐色土 炭化物を多量、焼土粒子少量含み、粘性もつ。
 2 茶褐色土 小砂利、炭化物を少量含む。
 3 暗褐色土 炭化物を微量含む。
 4 暗褐色土 暗茶褐色ローム粒子を少量含む。
 5 茶褐色土 ローム粒子を多量含む。
- S K-182
 1 茶褐色土 ローム・焼土粒子を微量含む。
- S K-183・184
 1 暗褐色土 少量の崩れたローム・焼土ブロックを含む。
 2 暗褐色土 1よりロームブロックは少なく、暗い。
 3 茶褐色土 ローム・焼土・炭化粒子を含む。
 4 茶褐色土 崩れたロームブロックを含む。
- S K-185
 1 茶褐色土 ローム土多量。しまりやや弱いが粘性もつ。
 2 青黒色土 粘土質土層。
 3 青淡白土 砂粒子、粘土を混在。
 4 黄褐色土 ローム粒子を含む。しまりやや弱い。
- S K-186
 1 暗褐色土 砂質ローム、焼土・炭化粒子、礫含む。硬い。

0 2m

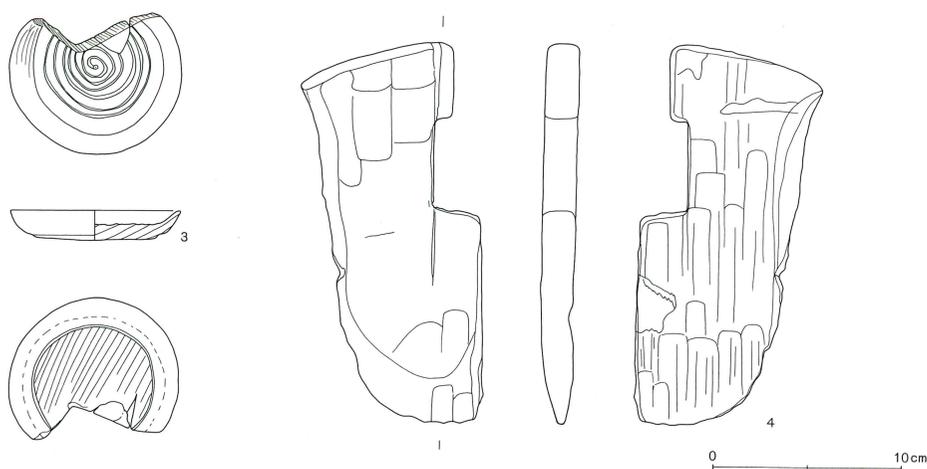
第369図 第4区土壙



第370図 第4区土壙出土遺物(1)

第4区土壙跡出土鑄造遺物観察表 (第370図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	炉壁	19.2	12.2	7.3	1130		S K183	炉2
2	炉壁	16.6	9.0	3.1	450		S K183	炉2

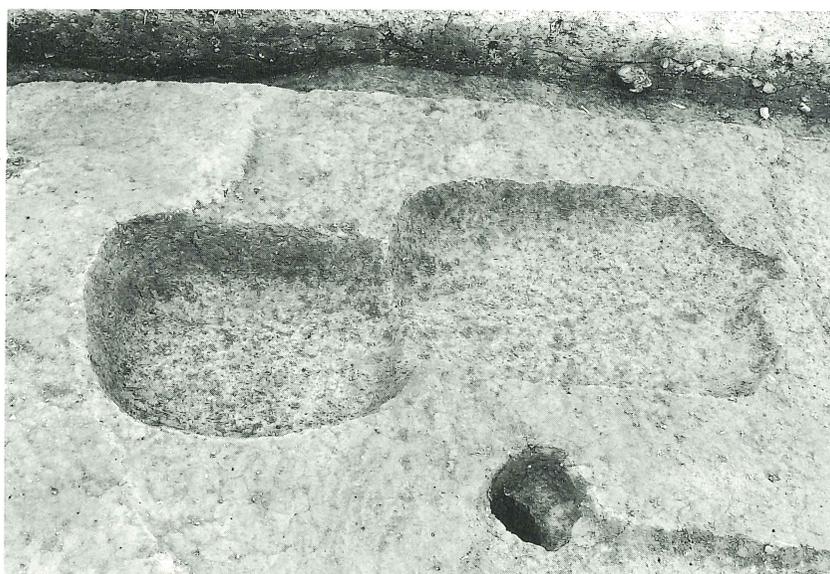


第371図 第4区土壙出土遺物(2)

第57表 第4区土壙一覽表

(単位 cm)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-178	SK-21	K-13	円形	82	78	14	N-32°-W	中世
179	63	L-13	円形	116	108	4	N-8°-W	中世
180	64	L-13	楕円形	122	90	30	N-43°-E	中世
181	20	K-13	長方形	182	100	68	N-24°-E	中世
182	218	L-12	(長方形)	(150)	128	9	N-90°-E	中世
183	219	L-12	楕円形	114	94	31	N-73°-E	中世
184	220	L-12	長方形	146	104	17	N-73°-E	中世
185	108	L-13	楕円形	130	114	70	N-76°-w	中世
186	217	M-12	長方形	296	230	15	N-85°-E	中世



第183・184号土壙

5 第5区の遺構と遺物

本区は金井遺跡B区の北に位置し鑄造遺構を検出した台地より一段下がった低台地にあたる。このため鑄造遺構の検出は第4区で報告した廃滓場としての第15鑄造遺構群だけが存在し、鑄造作業場の検出は見られなかった。本区からは溝跡と短冊型の土壌墓群が検出された。

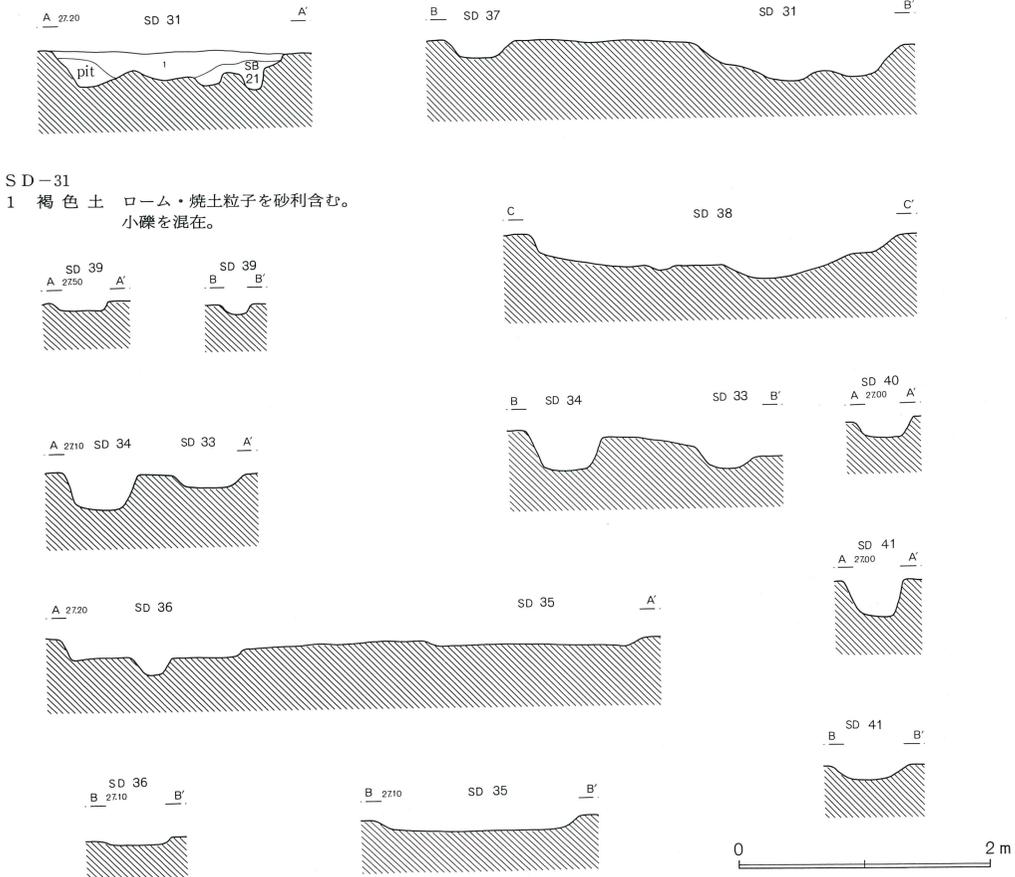
(1) 溝跡

本区からは第31～41号溝を検出した。本区は台地から一段下がった島状の狭い低台地でその周囲に溝が巡る。南側には第32～36号溝、東側には40・41号溝を検出した。又、短冊型の土壌墓群を囲む様に北側に38号溝を、中央東側に31・37・39号溝を検出した。

遺物は第41号溝跡から土師器の坏を検出したが溝の時期を示すには疑問である。

第41号溝跡出土遺物 (第374図)

第41号溝内から1の土師器坏を検出した。口径14.4cm、器高4.0cmであり、胎土はA B C Dを混入する。焼成は良好で色調は褐色である。形態は底部丸底の器高やや深く、口径のやや大きめの北

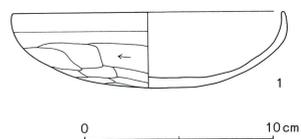


第372図 第5区溝跡土層図



第373图 第5区沟迹・土坑配置图

武蔵型坏である。口唇部はわずかに屈曲をもつ。体部との境に未調整部をもつことから8世紀初頭から前半にかけての資料と考えられる。



第374図 第41号溝跡出土遺物

本区は金井遺跡B区の中でも北東の低台地にあたり、何条かの溝跡を検出した。第38号溝跡は本区中央で「L」字状に曲がり、第37号溝跡や第45号溝跡となる。おそらく一段高い台地の北縁から本区にかけて通じる「道」の存在が推定される。これらに囲まれて、第192～231号土壇は存在する。さらに東側には、第39号溝跡が南北方向に走りその北端には第191号土壇を検出した。土壇内からは土師器・須恵器の破片を検出し古代の遺構の可能性が考えられる。調査区の最東端に

第58表 第5区溝跡一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	長さ	幅	深さ	主軸方向	時期
SD-31	SD-45	G-15 H-15 I-15	27.50	1.20	0.22	N-2°-W	近世
33	50	K-15, 16	17.00	0.60	0.15	N-72°-E	近世
34	51	K-15~17	20.80	0.60	0.22	N-72°-E	近世
35	52	K-15, 16 L-15	20.50	2.30	0.12	N-80°-E	近世
36	53	K-15~17 L-15	29.70	1.50	0.06	N-85°-E	近世
37	46	G-15 H-14, 15	12.50	0.50	0.12	N-2°-W	近世
38	47	G-14, 15	12.00	3.00	0.30	N-90°-W	近世
39	48	H-16 I-16	15.40	0.40	0.06	N-1°-W	古代
40	54	J-17 K-17	14.40	0.70	0.11	N-20°-W	古代
41	55	H-17 I-17 J-17, 18	25.40	0.60	0.29	N-10°-W	古代



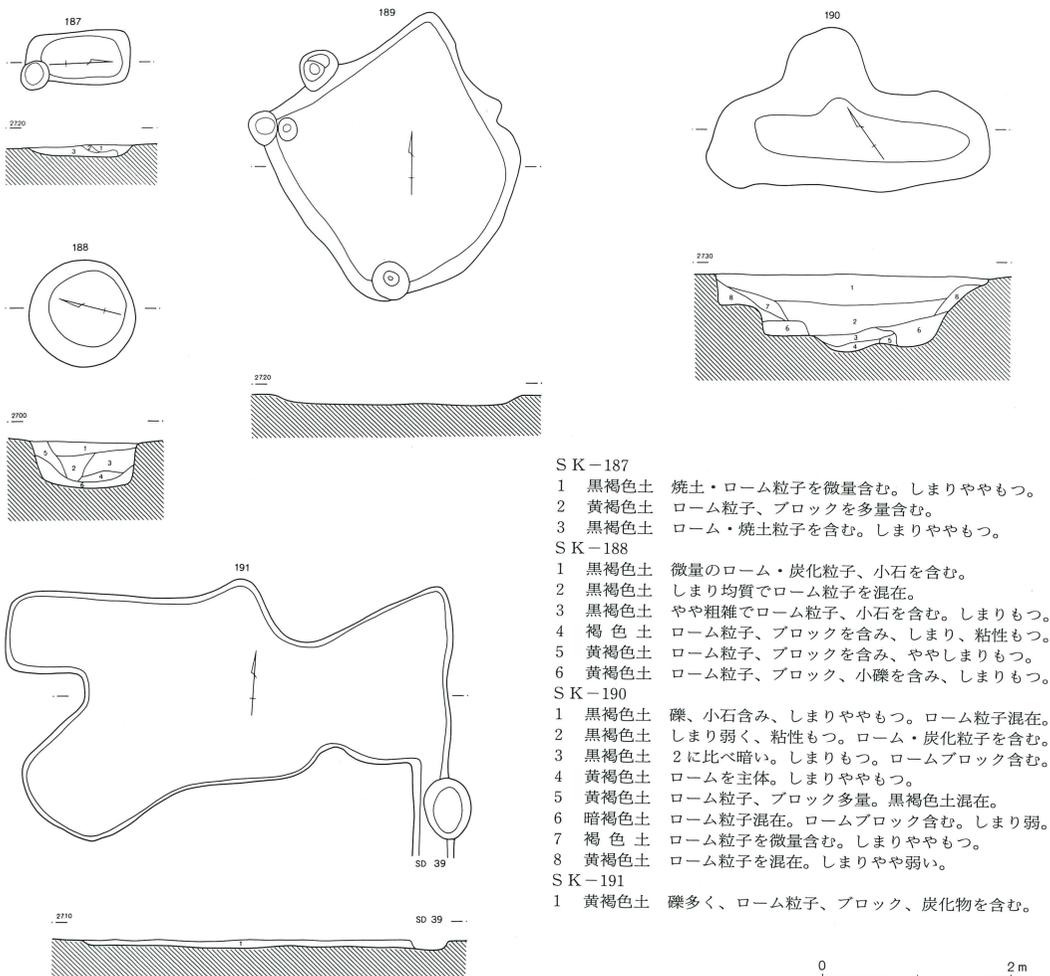
第5区 土壇群全景

は第39号溝跡がやはり南北方向に走る。この溝の東側には浅い低地が形成され、低地を越すと足洗遺跡へとつながる。中世にはおそらくこれらの溝に沿って「道」が存在し、足洗遺跡と通じていたものと考えられる。北側は地山が礫層になりロームは流れ堆積せず存在しない。南側には第32～36号溝跡を検出し浅い低地が形成されていた。

(2) 土 壙

本区からは第187～231・274号土壙を検出した。このうち、192～231は短冊型の土壙墓と見られ同一場所にほぼ主軸をそろえて重複する。中世後半～近世の集合墓地の様相が見られる。

本区は低台地と言うこともあって鑄造遺構や建物跡の検出は認められず、第15鑄造遺構群の廃滓場と墓域の利用であると考えられる。



S K-187

- 1 黒褐色土 焼土・ローム粒子を微量含む。しまりややもつ。
- 2 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを多量含む。
- 3 黒褐色土 ローム・焼土粒子を含む。しまりややもつ。

S K-188

- 1 黒褐色土 微量のローム・炭化粒子、小石を含む。
- 2 黒褐色土 しまり均質でローム粒子を混在。
- 3 黒褐色土 やや粗雑でローム粒子、小石を含む。しまりもつ。
- 4 褐色土 ローム粒子、ブロックを含み、しまり、粘性もつ。
- 5 黄褐色土 ローム粒子、ブロックを含み、ややしまりもつ。
- 6 黄褐色土 ローム粒子、ブロック、小礫を含み、しまりもつ。

S K-190

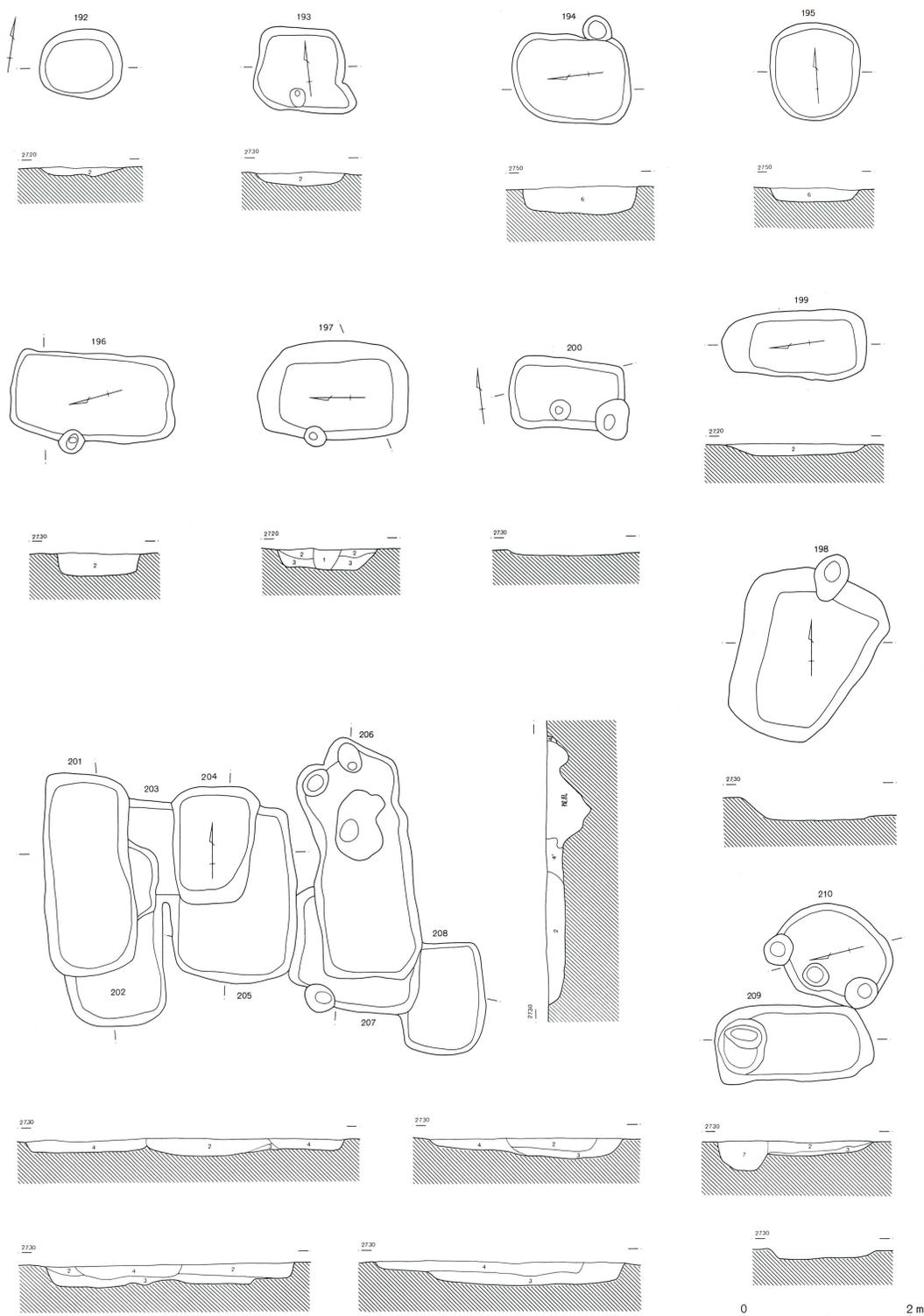
- 1 黒褐色土 礫、小石含み、しまりややもつ。ローム粒子混在。
- 2 黒褐色土 しまり弱く、粘性もつ。ローム・炭化粒子を含む。
- 3 黒褐色土 2に比べ暗い。しまりもつ。ロームブロック含む。
- 4 黄褐色土 ロームを主体。しまりややもつ。
- 5 黄褐色土 ローム粒子、ブロック多量。黒褐色土混在。
- 6 暗褐色土 ローム粒子混在。ロームブロック含む。しまり弱。
- 7 褐色土 ローム粒子を微量含む。しまりややもつ。
- 8 黄褐色土 ローム粒子を混在。しまりやや弱い。

S K-191

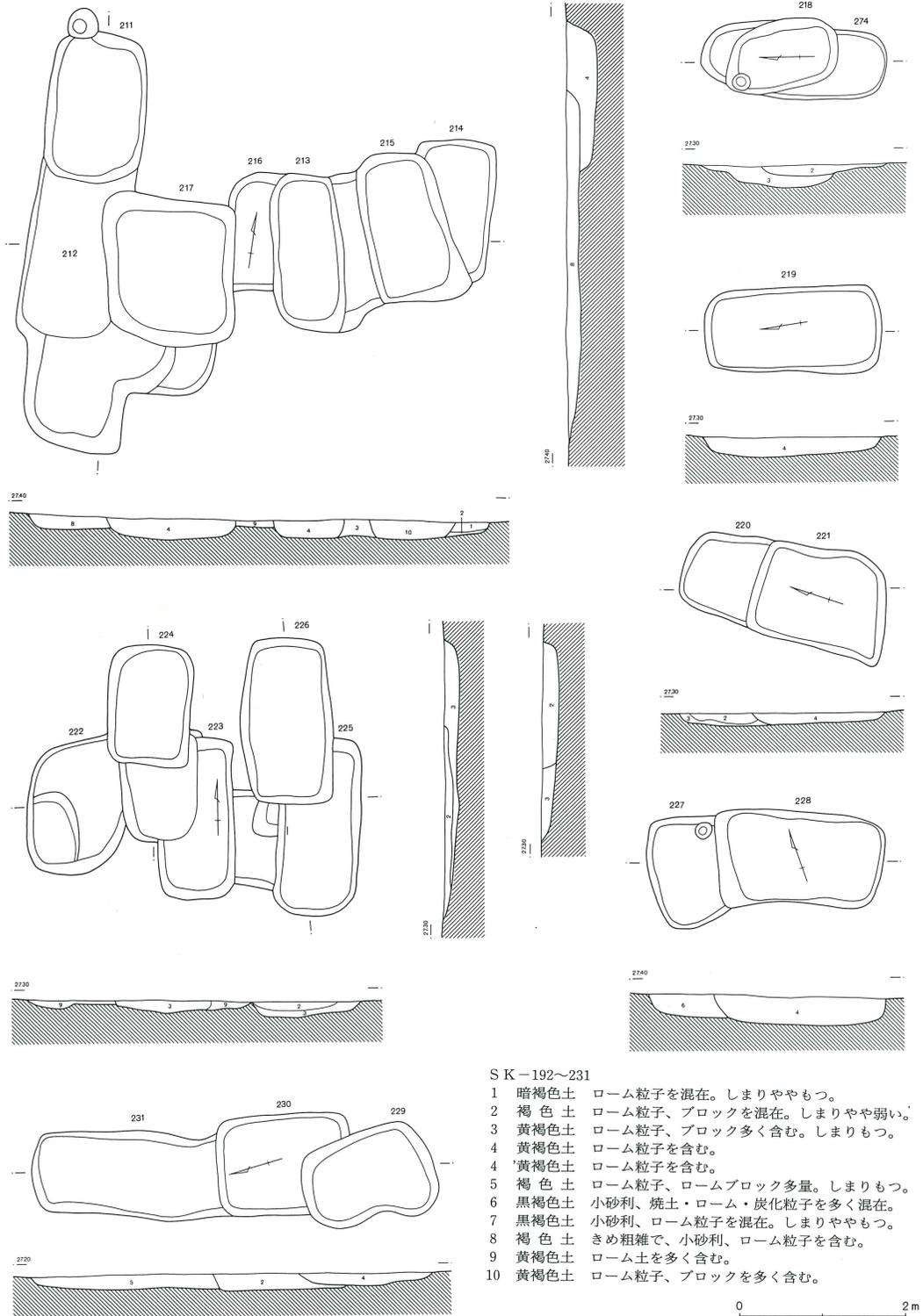
- 1 黄褐色土 礫多く、ローム粒子、ブロック、炭化物を含む。

0 2 m

第375図 第5区土壙(1)



第376图 第5区土坑(2)



第377図 第5区土壇(3)

第59表 第5区土壤一覽表

(單位 cm)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-187	SK-223	I-14, 15	長方形	112	56	10		中世
188	221	I-15	円形	112	112	37	N-78°-E	
189	61	I-14	正方形	256	246	10	N-31°-W	
190	222	H-14	不整形	288	108	81	N-59°-W	
191	77	G, H-16	不整形	386	216	6	N-87°-W	
192	225	H-15	円形	100	84	9	N-5°-W	古代
193	235	G-14	正方形	108	100	14	N-85°-W	中世
194	247	H-14	長方形	142	104	31	N-8°-E	中世
195	248	H-14	円形	118	106	17	N-4°-E	中世
196	234	H-14	長方形	196	106	27	N-17°-E	中世
197	226	G-15	長方形	184	118	19		中世
198	237	G, H-14	長方形	210	154	28	N-13°-E	中世
199	224	G-15	長方形	96	80	13	N-7°-E	中世
200	236	G-14	長方形	140	86	4	N-78°-W	中世
201	253	H-14	長方形	244	106	26		中世
202	254	H-14	長方形	304	120	10		中世
203	255	H-14	長方形	302	122	16	N-87°-W	中世
204	256	H-14	長方形	142	94	17	N-2°-E	中世
205	257	H-14	長方形	210	154	16		中世
206	258	H-14, 15	長方形	290	116	57	N-4°-W	中世
207	259	H-14, 15	正方形	156	122	14	N-83°-W	中世
208	260	H-15	長方形	136	102	12	N-7°-E	中世
209	251	H-14	長方形	188	92	19	N-16°-E	中世
210	252	H-14	楕円形	126	126	10		中世
211	238	H-14	長方形	180	118	39		中世
212	239	H-14	不整形	506	118	19		中世
213	240	H-14	長方形	188	86	13	N-9°-W	中世
214	241	H-14	不整形	168	96	10		中世
215	263	H-14	長方形	184	100	20	N-20°-W	中世
216	264	H-14	長方形	142	(84)	7	N-3°-W	中世
217	265	H-14	正方形	176	154	22		中世
218	262	H-14	長方形	130	84	15	N-9°-W	中世
219	233	H-14	長方形	214	102	27	N-9°-E	中世
220	228	H-14, 15	長方形	(88)	102	14	N-4°-W	中世
221	227	H-14, 15	長方形	164	116	13	N-3°-W	中世
222	242	H-14	楕円形	162	118	5		中世
223	243	H-14	不整形	194	134	11		中世
224	244	H-14	長方形	238	100	23		中世
225	245	H-14	長方形	212	100	11	N-3°-E	中世
226	246	H-14	長方形	200	110	16		中世
227	249	G-13	長方形	(88)	134	29	N-76°-W	中世
228	250	G-13	長方形	202	112	30	N-77°-W	中世
229	229	H-14	長方形	(100)	106	11	N-14°-E	中世
230	230	H-14	長方形	162	120	19	N-15°-E	中世
231	231	H-14	長方形	224	102	14	N-13°-E	中世
274	232	H-14	長方形	218	84	5	N-7°-E	中世

6 第6区の遺構と遺物

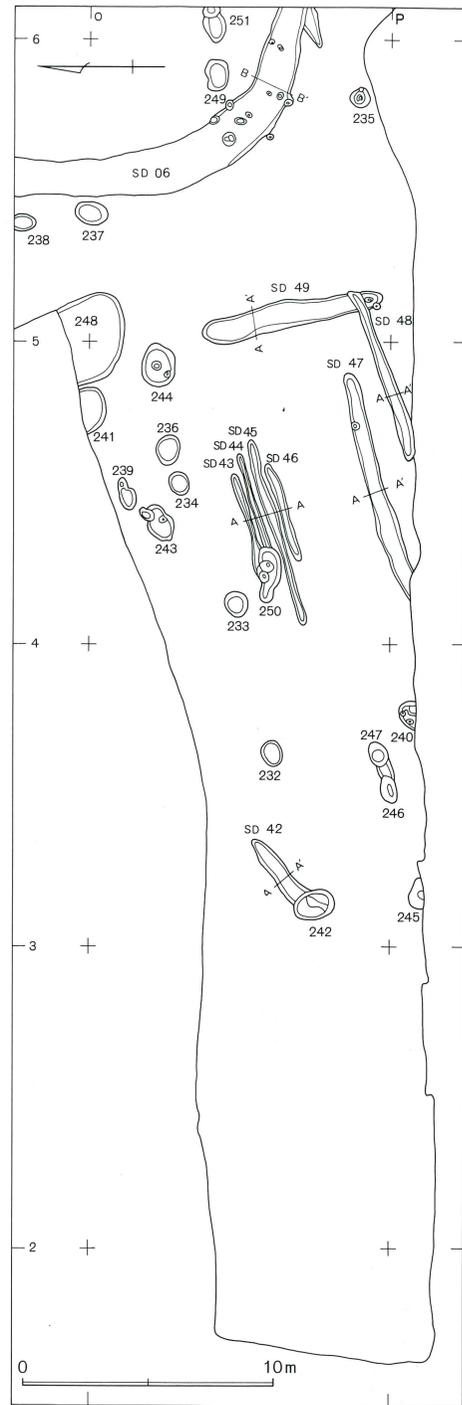
本区は金井遺跡B区の西にあたる。台地が舌状に伸びた先端の北側に面した部分である。本区の一段下がった北側の低台地は金井遺跡A区である。西側には台地が緩やかに傾斜し下がり金山神社を祀る鎮守の森が存在する。金井遺跡の調査を終了した翌々年に金山神社の建替えが行われた。その際に坂戸市教育委員会で発掘調査を実施したが铸造遺構は検出されず铸造遺物さえもほとんど出土しなかった。地形的には台地が西北に落ちる部分にあたり遺跡の西北端と見られる。また、この金山神社については古社ながら記録はほとんど残されておらず、唯一、新編武蔵風土記稿に「金山社」として「村ノ鎮守ナリ金山権現ト号セリ、神体ハ銅鏡ノ如キモノナリ云々」と記されている。この銅鏡とは径22.5cmの铸铁製の懸仏のことであり、現在も残されている。懸仏には「武州高麗郡葛○郷花木宮 天正七年九月吉日妙泉坊 大工柏原神田」の銘がありもともとは中世末の1579年に狭山の柏原の神田と言う鋳物師が造り花木宮に納められていたものが江戸時代に何らかの理由で本神社の御正体となったものと考えられる。いずれにせよ、中世の金山神社・金井遺跡に関する記録は残されていない。

(1) 溝 跡

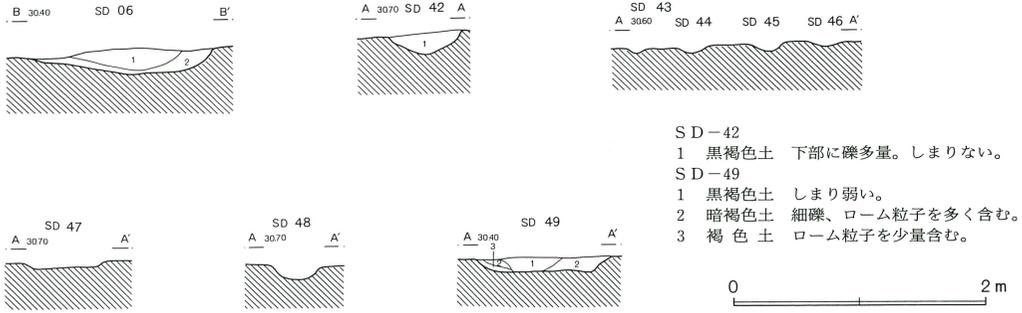
本区からは第42～49号溝を検出した。本区は舌状に伸びた台地の北端にあたりいずれの溝も地形に平行するか直行する方向に造られ、浅く短いのが特徴である。出土遺物はなく時期はいずれも不明である。

(2) 土 壇

本区からは第232～251号土壇を検出した。円形の土壇が多く掘り込みも浅い。西側は遺構の検出も薄くなる。



第378図 第6区溝跡・土壇配置図



第379図 第6区溝跡土層図

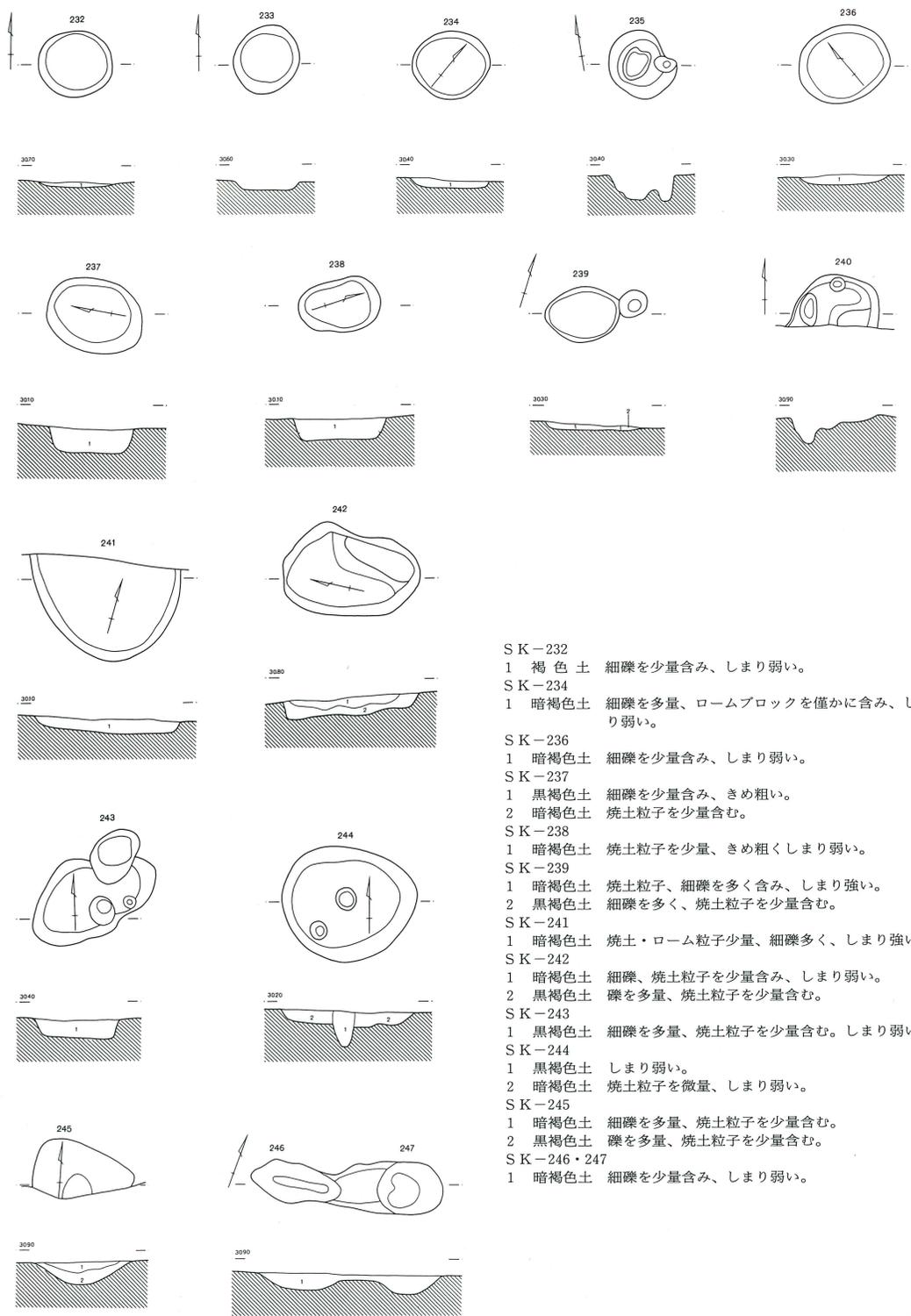
第60表 第6区溝跡一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位 置	長さ	幅	深さ	主軸方向	時期
SD-42	SD-26	O-3	2.90	0.70	0.14	N-50°-E	近世
43	27	O-4	3.90	0.30	0.03	N-75°-E	近世
44	28	O-4	4.00	0.30	0.03	N-75°-E	近世
45	29	O-4	7.70	0.40	0.03	N-75°-E	近世
46	30	O-4	4.10	0.40	0.03	N-75°-E	近世
47	31	O, P-4	9.20	0.60	0.04	N-75°-E	近世
48	32	O-4, 5 P-4	7.30	0.60	0.09	N-70°-E	近世
49	33	O-5	7.30	1.10	0.08	N-10°-W	近世

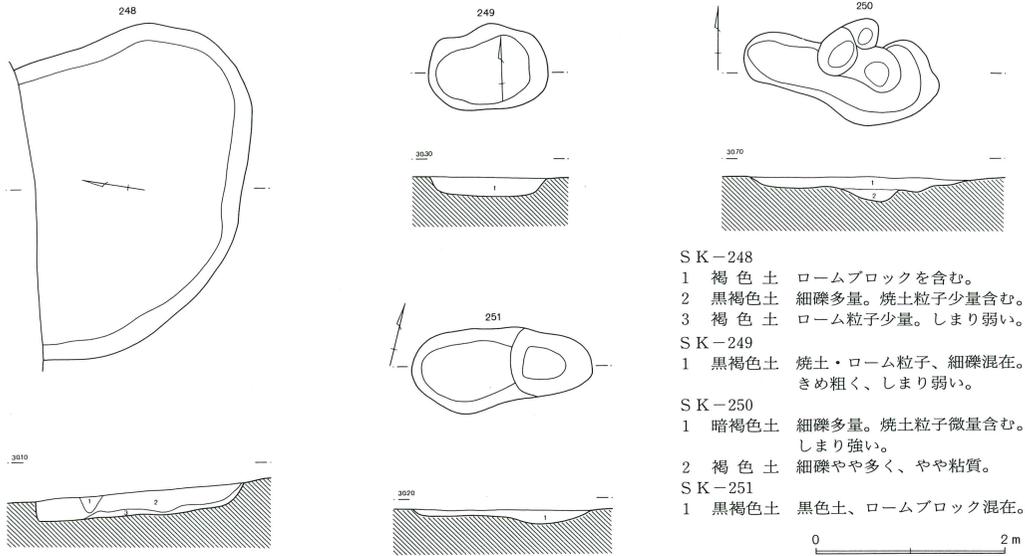


金山神社



- SK-232
1 褐色土 細礫を少量含み、しまり弱い。
- SK-234
1 暗褐色土 細礫を多量、ロームブロックを僅かに含み、しまり弱い。
- SK-236
1 暗褐色土 細礫を少量含み、しまり弱い。
- SK-237
1 黒褐色土 細礫を少量含み、きめ粗い。
2 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
- SK-238
1 暗褐色土 焼土粒子を少量、きめ粗くしまり弱い。
- SK-239
1 暗褐色土 焼土粒子、細礫を多く含み、しまり強い。
2 黒褐色土 細礫を多く、焼土粒子を少量含む。
- SK-241
1 暗褐色土 焼土・ローム粒子少量、細礫多く、しまり強い。
- SK-242
1 暗褐色土 細礫、焼土粒子を少量含み、しまり弱い。
2 黒褐色土 礫を多量、焼土粒子を少量含む。
- SK-243
1 黒褐色土 細礫を多量、焼土粒子を少量含む。しまり弱い。
- SK-244
1 黒褐色土 しまり弱い。
2 暗褐色土 焼土粒子を微量、しまり弱い。
- SK-245
1 暗褐色土 細礫を多量、焼土粒子を少量含む。
2 黒褐色土 礫を多量、焼土粒子を少量含む。
- SK-246・247
1 暗褐色土 細礫を少量含み、しまり弱い。

第380図 第6区土壌(1)



第381図 第6区土壙(2)

第61表 第6区土壙一覧表

(単位 cm)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-232	SK-189	O-3	円形	90	86	6	N-87°-E	
233	184	O-4	円形	82	80	10		
234	178	O-4	円形	96	84	12	N-50°-E	中世
235	172	O-5	円形	82	82	29	N-76°-W	
236	179	O-4	円形	108	96	14	N-50°-W	
237	173	N-5	楕円形	116	90	27	N-10°-W	中世
238	174	N-5	楕円形	100	64	30	N-18°-E	
239	181	O-4	楕円形	90	68	10	N-81°-E	古代
240	188	P-3	(楕円形)	104	(60)	12		
241	183	N, O-4	(楕円形)	170	(124)	16	N-75°-E	中世
242	190	O-3	楕円形	168	106	19	N-25°-W	中世
243	180	O-4	不整形	166	84	24	N-63°-E	古代
244	182	O-4	円形	162	138	14		中世
245	191	L-8	楕円形	94	62	7	N-85°-W	
246	186	O, P-3	楕円形	220	48	18	N-76°-E	
247	187	O, P-3	楕円形	160	64	22	N-74°-E	
248	195	N, O-4,5	(楕円形)	314	(236)	31	N-67°-E	中世
249	154	O-5	楕円形	126	90	21		中世
250	184	O-4	円形	82	80	10		
251	155	O-6	楕円形	96	82	7	N-71°-E	

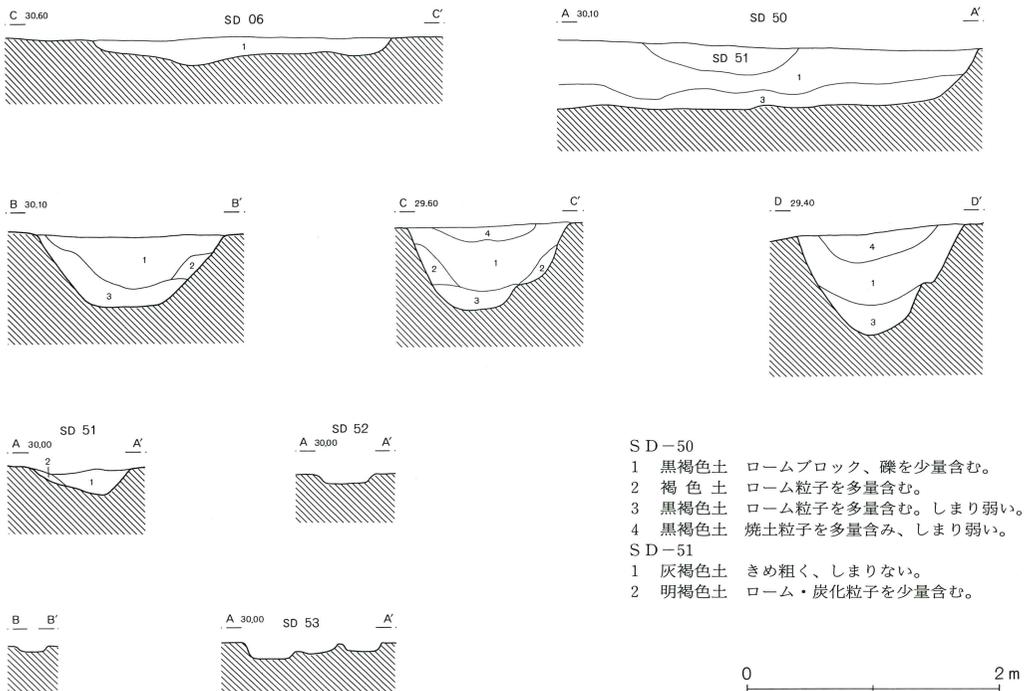
7 第7区の遺構と遺物

本区は調査区の北に位置し、舌状台地の先端にあたる。铸造遺構跡の検出は見られない。本区最大の特徴は、金井遺跡の铸造遺構の北辺を区画する東西溝跡の検出にある。この他の遺構としては第51～53号溝跡や第14号井戸跡を検出したが、いずれも、第50号溝跡より新しい。

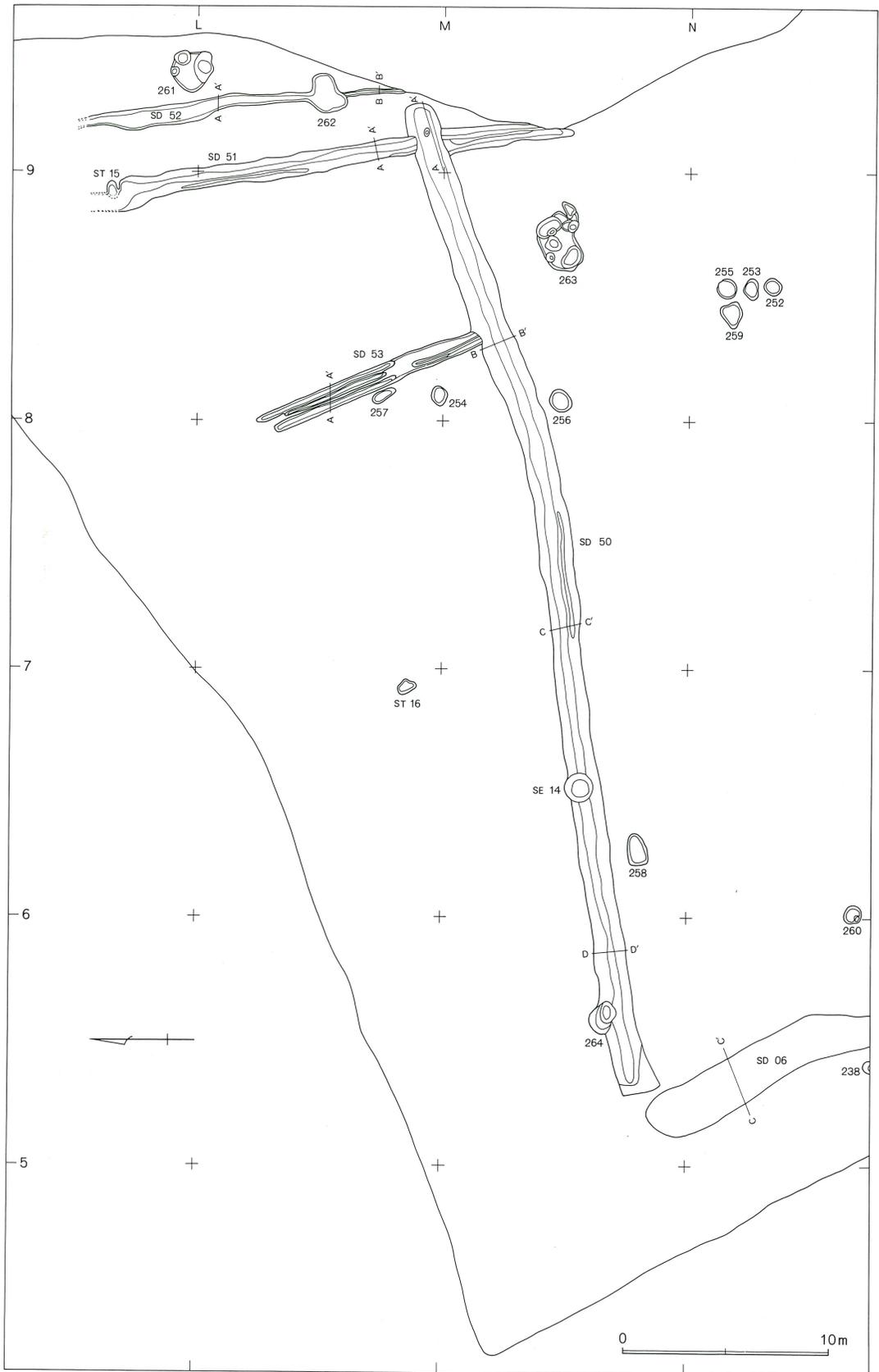
(1) 溝跡

本区からは第50～53号溝跡を検出した。本群は第6区と同様、舌状に伸びる台地の北端にあたる。第51～53号溝は傾斜方向に沿って南北に伸びる溝であるが、第50号溝は北側の区画溝と考えられる。溝の規模は全長49.30m、幅1.80m、深さ57cmで断面「V」字状である。この北溝と対になる区画溝として調査区第1区の南端に検出した第4号溝が存在する。第4号溝から第50号溝までの距離は85.0mである。

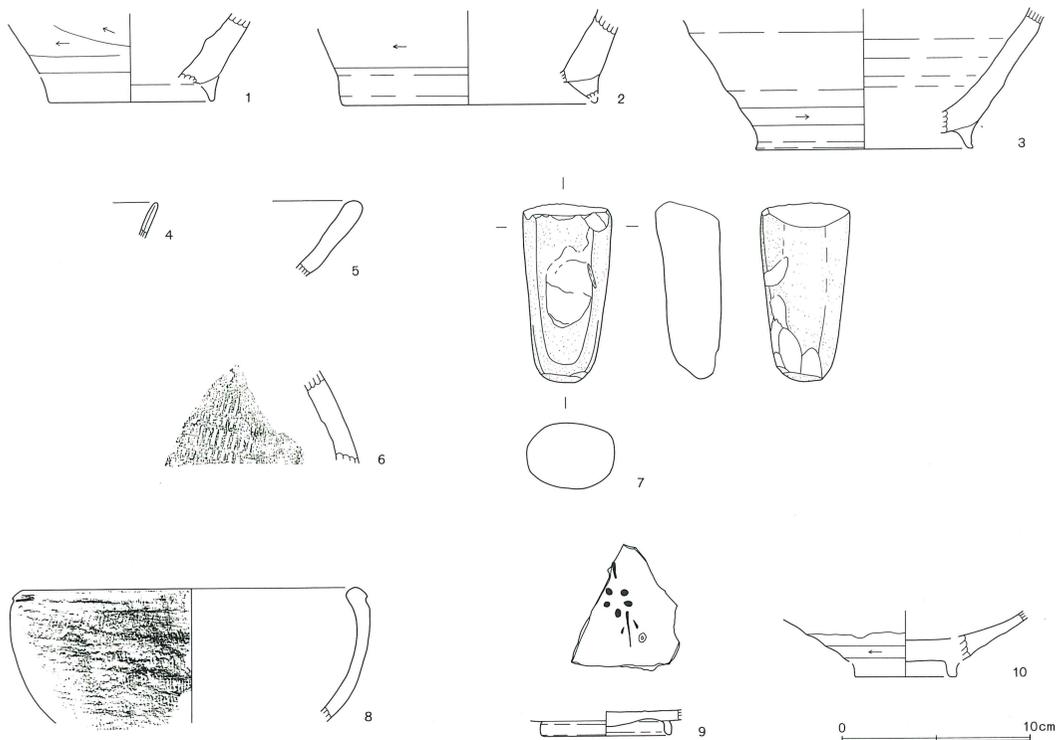
出土遺物は第384図1～7は第50号溝の覆土中から検出した。1～3・5は常滑系の貼り付け高台の付く片口鉢である。4は龍泉窯系の青磁碗、6は常滑の甕である。8～10は第51号溝の覆土中から検出した。8は火鉢、9は刷り絵の瀬戸系の灰釉碗であるいずれも17～18世紀と考えられる。



第382図 第7区溝跡土層図



第383图 第7区沟迹・土坑配置图



第384図 第50・51号溝跡出土遺物

第7区溝跡出土遺物観察表(第384図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	片口鉢				C	B	灰色	5%	SD50	常滑
2	片口鉢		4.7	(13.0)	H I	B	灰色	10%	SD50	常滑
3	片口鉢		7.4	(11.4)	C	B	灰色	20%	SD50	常滑
4	青磁碗				I	A	緑色	5%	SD50碗 I 1~4	中国・龍泉
5	片口鉢				D I	A	灰色	5%	SD50	常滑
6	甕				C I	A	灰色	1%	SD50	常滑
7	石器								SD50	
8	香炉	17.8	7.1		B	A	赤褐色	20%	SD51	在地
9	灰釉碗		1.3	6.8	I	A	黄褐色	30%	SD51	瀬戸
10	灰釉平碗				I	A	黄灰色	5%	SD51	志野

第62表 第7区溝跡一覽表

(単位 m)

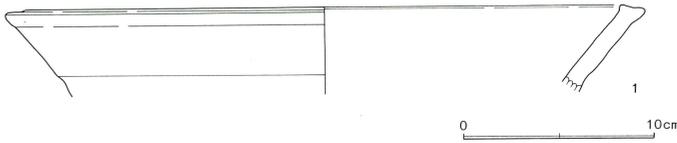
新番号	旧番号	位置	長さ	幅	深さ	主軸方向	時期
SD-50	SD-23	L-9 M-5~9	49.30	1.80	0.57	N-83°-E	中世
51	24	K-8,9 L-8,9 M-9	22.20	1.00	0.20	N-7°-W	近世
52	25	K-9 L-9	15.50	1.00	0.11	N-5°-W	近世
53	34	L-8 M-8	11.60	1.00	0.08	N-25°-W	近世

(2) 井戸跡

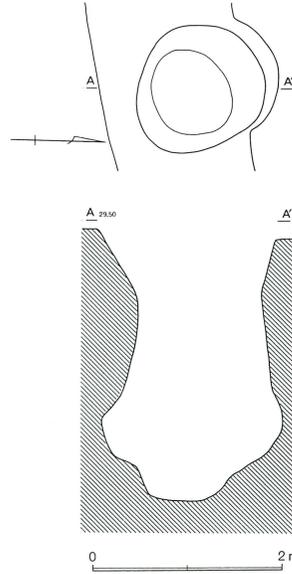
第14号井戸跡 (第386図)

M-6区に位置し、第50号溝跡内にあたる。平面形態が円形をしており、断面は上部でやや「ハ」の字状に開くものの円筒状に掘られ、井戸底はオーバーハングして、膨らみ水溜まりになっている。規模は長軸1.60m、短軸1.30m、深さ2.92mである。

出土遺物は、常滑系の片口鉢の小片を検出した。口径34.0cm、器高4.6cmで、胎土はC Iを含み焼成は良好。色調は赤茶色である。



第385図 第14号井戸跡出土遺物



第386図 第14号井戸跡

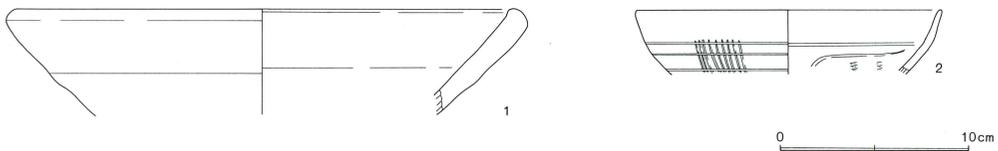
第63表 第7区井戸跡一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SE-14	SE-10	M-6	楕円形	1.60	1.30	2.92	N-25°-W	中世

(3) 土 壙

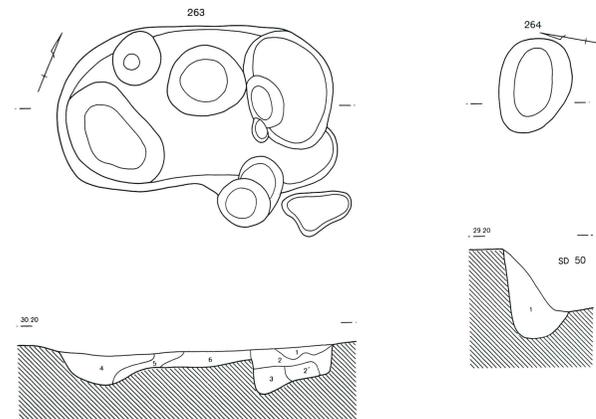
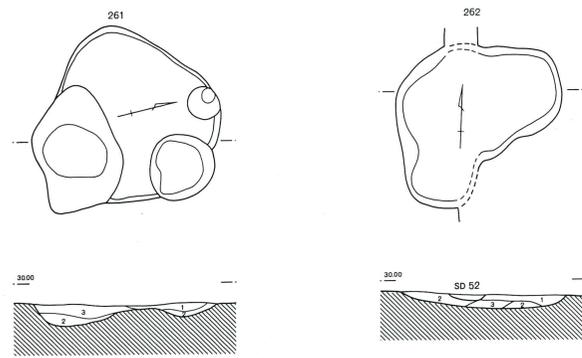
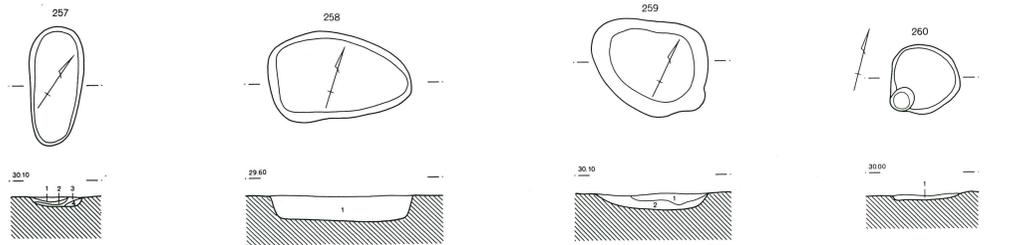
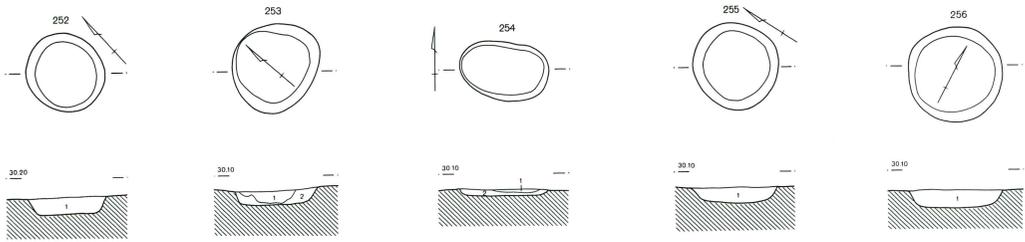
本区からは第252~264号土壙を検出した。第261号土壙からは在地産の片口鉢を検出した。また、第264号土壙は第50号溝のと重複して確認され、覆土中からは同安窯系の青磁碗を検出した。



第387図 第7区土壙出土遺物

第7区土壙跡出土遺物観察表 (第387図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	片口鉢	27.0	5.6		C	B	褐色	10%	S K261 覆土	在地
2	青磁碗	16.2	3.4		I	A	茶褐色	20%	S K264 一括 椀 I 1 b	中国・同安



- S K-252
1 黒褐色土 ローム粒子少量。きめ粗くしまり弱。
- S K-253
1 暗褐色土 きめ粗く、しまり弱い。
2 黒褐色土 ロームブロック多く、しまり強い。
- S K-254
1 黒灰色土 炭化粒子多量含み、しまりない。
2 褐色土 ローム粒子を少量混在。しまり強い。
- S K-255
1 暗褐色土 ローム粒子を均一に含む。
- S K-256
1 黒褐色土 ローム粒子を疎らに含む。
- S K-257
1 黒灰色土 炭化粒子多く、しまりない。
2 褐色土 やや粘質。しまり強い。
3 黄褐色土 ローム土主体。
4 褐色土 2に類似。
- S K-258
1 暗褐色土 焼土粒子、細礫少量。しまり強い。
- S K-259
1 暗褐色土 ロームブロックを多量含む。
2 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
- S K-260
1 黒褐色土 ロームブロック少量。きめ細かく、しまり強い。
- S K-261
1 黒褐色土 きめ細かいが、しまりない。
2 褐色土 ロームブロック混土層。しまり強い。
3 褐色土 ローム粒子を微量含む。しまり弱い。
- S K-262
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。しまり強い。
2 黄褐色土 褐色土がブロック状に混在。
3 暗褐色土 ロームブロック多く、しまり強い。
- S K-263
1 褐色土 灰色粘土ブロックを多く含む。
2 黒褐色土 ローム粒子、ブロックを混在。
2より暗い。
3 黒褐色土 ロームブロックと黒色土の混土層。
4 暗褐色土 ローム粒子僅かに含み、しまりない。
5 黒褐色土 粘土ブロックが混じる。
6 黒褐色土 黒色土とロームブロックの混土層。
- S K-264
1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を少量含む。サラサラして、しまり弱い。

0 2m

第388図 第7区土壇(1)

第64表 第7区土坑一覧表

(単位 cm)

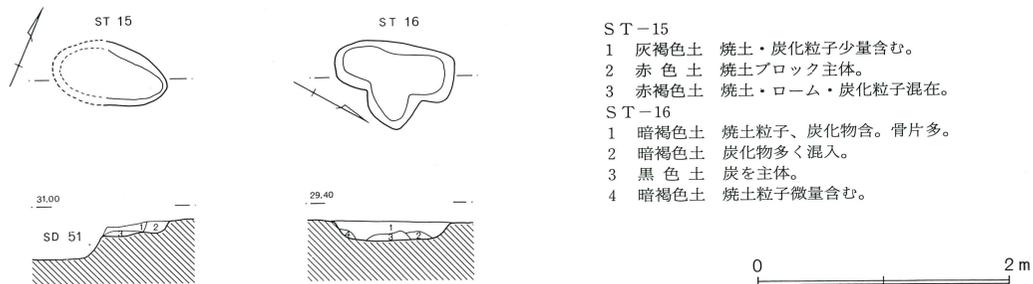
新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-252	SK-164	N-8	円形	84	82	16	N-47°-E	中世 古代
253	165	N-8	円形	94	90	19	N-48°-E	
254	192	L-8	楕円形	94	62	7	N-85°-W	
255	167	N-8	円形	92	90	18	N-55°-E	
256	168	M-7	円形	102	98	19	N-39°-W	
257	193	L-8	長方形	124	54	12	N-35°-W	
258	194	M-6	楕円形	150	90	28	N-73°-E	
259	166	N-8	楕円形	120	100	18	N-64°-E	
260	175	N-5, 6	円形	76	76	8	N-38°-E	
261	177	K-9	不整形	208	152	4	N-35°-W	
262	176	L-9	不整形	180	126	20	N-63°-E	
263	169	M-8	不整形	290	166	20	N-67°-E	
264	196	M-5	楕円形	102	80	28	N-62°-W	

(4) 火葬墓

本区からは第15・16号の2基の火葬墓を検出した。15は楕円形、16は「T」型である。火葬墓の検出された位置は第50号溝跡の北側にあたり、南側の第1区からも近接した位置に第3・7・8号の火葬墓を検出しておりこれらの火葬墓は溝に関係なく連続した繋がりをもって造られたものと判断する。

火葬墓を造る時期には、既に第50号溝跡は埋没したものと考えられ、鑄造時期の区画は存在しないものと見られる。むしろ、第51～53号溝の区画に変化し、第1区からの連続として本区が利用されたものと判断できる。

時期としては、直接的な出土遺物が検出されていないため明らかにできないが、少なくとも鑄造時期が14世紀前半に終わるとすれば、その後であり、集落の存在を内耳鍋を含む時期、14世紀末以降とすれば、火葬墓の存在時期は14世紀末～15世紀にあたると思われる。



第389図 第7区火葬墓

第65表 第7区火葬墓一覧表

(単位 cm)

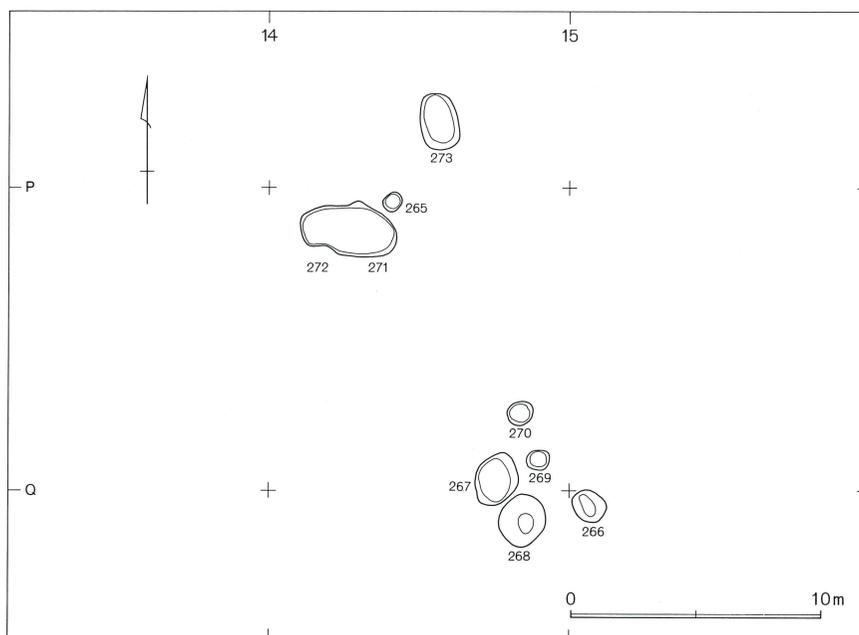
新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	備考
ST-15	ST-16	K-9	楕円形	96	52	15	N-79°-E	中世
16	07	L-6	T型	96	70	15	N-18°-W	

8 第8区の遺構と遺物

本区は第3区の第10铸造遺構群の下層から土壌を検出したため铸造遺構群の確認面をさらに掘り下げた面から確認した区域にあたる。斜面部であったことから堆積層が厚くさらに20~30cm掘り下げた遺構の検出をおこなった。

(1) 土 壙

第11铸造遺構群の下層から第265~273号土壙を検出した。第266号土壙内から曲物の破片を検出した。



第66表 第8区土壙一覧表

(単位 cm)

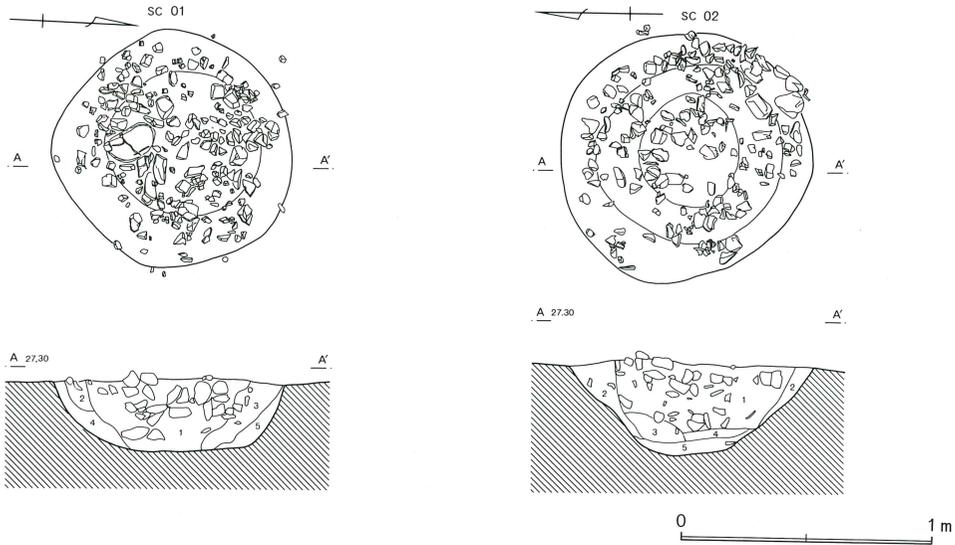
新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	時期
SK-265	SK-407	P-14	円形	80	80	19		
266	404	Q-15	円形	140	124	37		
267	401	P-14	楕円形	222	172	32	N-62°-E	
268	400	Q-14	円形	212	190	35		
269	402	P-14	円形	94	84	28		
270	403	P-14	円形	106	100	24		
271	405	P-14	不整形	382	198	10		
272	406	P-14	不整形	270	154	21		
273	408	Q-14	楕円形	228	152	29	N-10°-W	

VI その他の遺構と遺物

集石土壌 (第393図)

調査区北側の低台地部分 (中世区割りの第5区) から2基の集石土壌を検出した。

第1号集石土壌はI-14区に位置し、規模は直径0.95m、深さ28cmで形態は円形の掘り込みをもつ。覆土中には焼けたこぶし大の礫を多く伴う。第2号集石土壌もI-14区に位置し、規模は直径1.00m、深さ34cmで形態は円形の掘り込みをもつ。時期は近接する足洗遺跡から同様の集石土壌を確認しており、縄文時代後期の称名寺段階の住居跡を検出しているが、本集石の時期は不明である。



- | | | | |
|--------|------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | 炭化物、ローム・焼土粒子を少量含み、ソフト。 | 1 黒褐色土 | ローム粒子を微量含み、ソフト。 |
| 2 暗褐色土 | 炭化物、焼土粒子を少量含み、しまりよい。 | 2 暗褐色土 | 焼土・ローム粒子を少量含み、ソフト。 |
| 3 黒褐色土 | 焼土粒子を少量含み、ソフト。 | 3 黒褐色土 | 炭化物を少量含み、粘性強い。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子を微量含む。 | 4 黒褐色土 | 炭化物を多量含み、やや粘性もつ。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒子を少量含む。 | 5 茶褐色土 | ローム粒子を多量含み、ソフト。 |

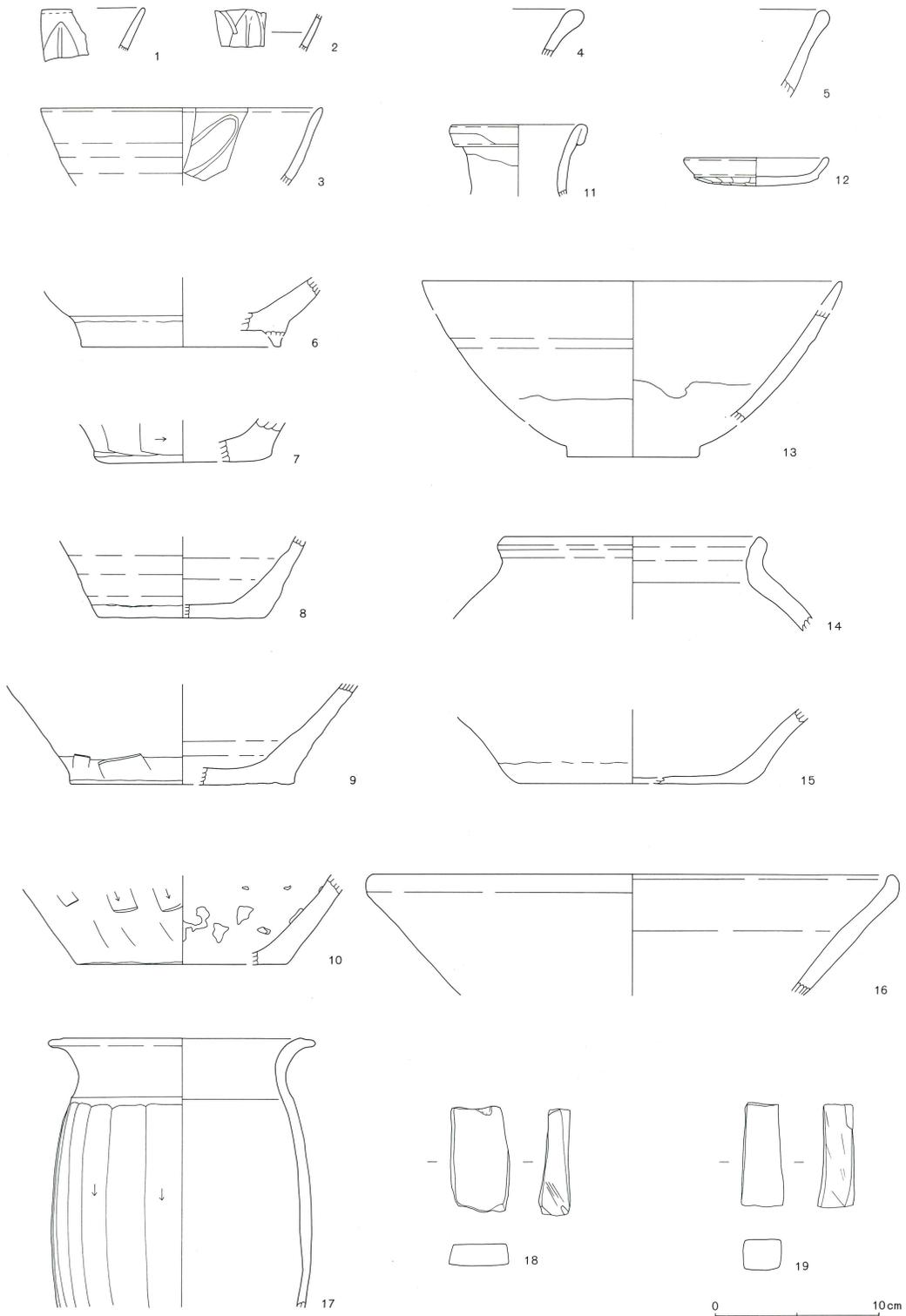
第393図 第1・2号集石土壌

グリッド・表採遺物 (第394図～398図)

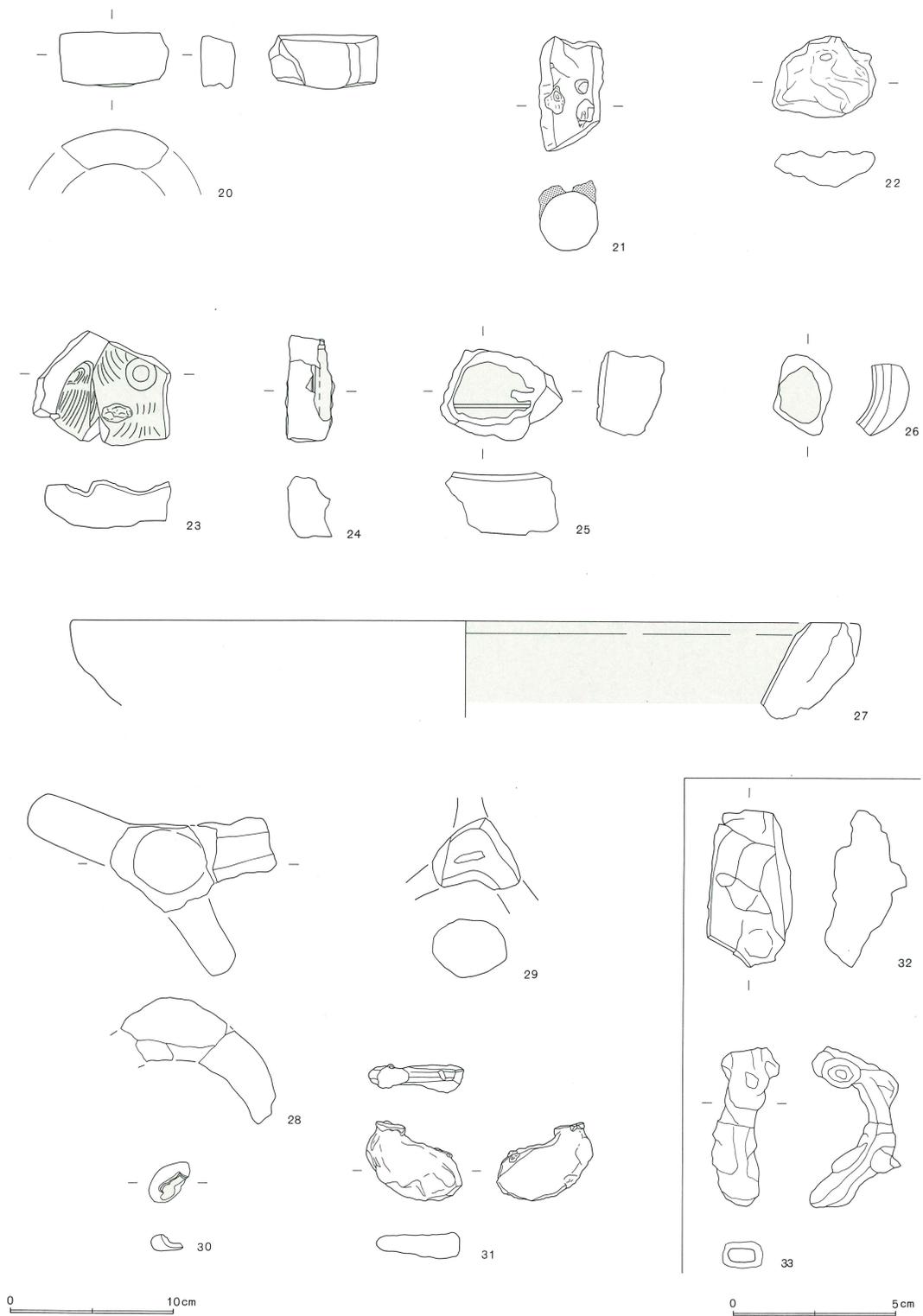
グリッド出土遺物には、第394図～396図の1～35である。1～17は陶磁器等の土器で、1～3は龍泉窯系の青磁碗である。4～6は常滑系の片口鉢で高台が残ること、11は瀬戸系の四耳壺の口縁

グリッド出土遺物観察表 (第394)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	青磁碗		2.6		I	A	淡緑色	5%	R-15P i t 12 椀I 5 b	中国・龍泉
2	青磁碗				I	A	茶褐色		O-11-e-5 椀I 5 b	中国・龍泉
3	青磁碗	(17.2)	4.7		I	A	緑褐色	10%	M-5 椀I 2	中国・龍泉
4	片口鉢				I	A	黄灰色		N-12	常滑
5	片口鉢				I	A	灰色		R-15-c-2	常滑
6	片口鉢				D I	B	灰色	10%	T-8 覆土	常滑
7	甕		2.5	10.8	D I	B	黒褐色	5%	L-12一括	常滑

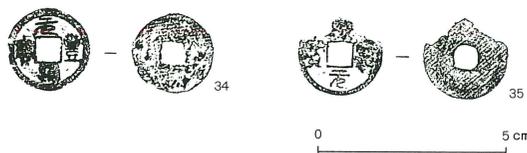


第394図 グリッド出土遺物(1)



第395図 グリッド出土遺物(2)

部でありいずれも13世紀代の遺物と見られる。
23は梵鐘の宝珠部分に鑄型である。34は元豊
通寶、35は熙寧元寶である。いずれもO-14



-k-2 出土。

第396図 グリッド出土遺物(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
8	片口鉢		4.9	10.0	I	A	灰色	20%	R-15-1	常滑
9	片口鉢		6.1	13.7	C I	A	茶褐色	25%	P-7 Pit42No.1	常滑
10	甕		5.4	13.0	I	A	明褐色	10%	P-7 Pit 5	常滑
11	四耳壺	8.0	4.3		I	A	灰褐色	20%	L-12-一括	瀬戸・美濃
12	土師質皿	8.6	1.7		ABCDF	B	淡褐色	30%	R-15-f-9	在地
13	灰釉平碗				G I	A	灰褐色	10%	O-11-e-9	瀬戸
14	甕	(15.6)	5.0		C D	C	黒灰色	5%	M-12-b-5	在地
15	内耳鍋		4.0	(13.6)	C D E G	C	灰褐色	20%	P-10-g Pit77	在地
16	片口鉢	31.4	7.3		E G	C	褐灰色	10%	Q-15	在地
17	土師器甕	(14.4)	16.3		ABCDF	A	茶褐色	30%	I-14-m	在地

グリッド出土鑄造遺物観察表(第394~396図)

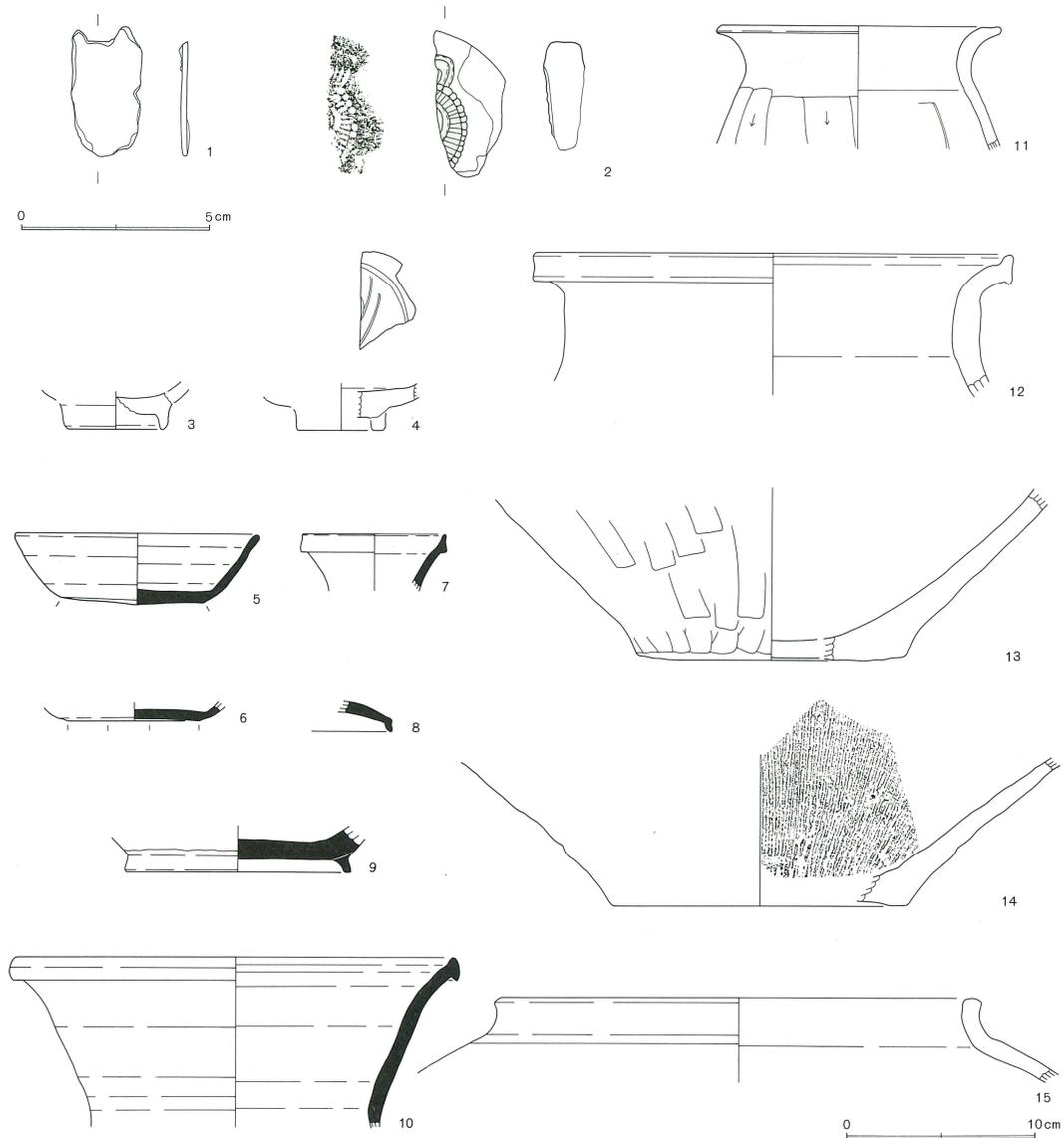
番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
18	砥石	6.4	3.6	1.3	55		R-14-a-5	石
19	砥石	6.3	2.6	1.9	52		P-7-p-7	石
20	羽口	3.3	6.7	2.1	58	内径7.4 外径5.8	R-15-a-5	羽口
21	炉壁 粘土帯	3.8	7.0	3.5	95		P-14-a-7	炉2
22	碗型滓	4.9	6.1	2.1	89		H-14	鍛冶滓
23	梵鐘 龍頭	6.8	8.3	2.9	136		P-14 P-15トレンチ	鑄型
24	獣脚	6.3	2.8	2.5	60		P-14-a-4	鑄型
25	容器	5.3	7.3	3.8	148		P-7ピット5	鑄型
26	容器	4.7	3.2	2.2	30		R-15-a-4	鑄型
27	容器				745	口径42.4 器高5.9	P-14-a No.1~44	鑄型
28	三叉状土製品	10.4		2.8	140		P-14-a No.6	土器
29	三叉状土製品	4.1		3.5	52		L-12-h-4	土器
30	獣脚	2.2	2.1	1.0	40		P-14-a-8	鑄型
31	鉄塊系遺物	4.2	5.3	1.5	82.3		L-12-g-5 分析資料No.4	塊1
32	鉄塊系遺物	4.8	2.6	2.2	45		P-14 P-15トレンチ	塊1
33	鑄造品	4.8	1.8	0.8	17		P-13-h-4	塊2

表採土器観察表 (第397・398図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
3	青磁碗		1.9	(5.0)	I	A	青緑色	5%		中国
4	青磁碗				I	A	淡緑色		碗 I 2~4	中国・龍泉
5	須恵器環	12.9	3.7	7.7	B C D F	A	灰色	75%		南比企
6	須恵器環	1.0	7.0		B C D F	A	灰色	80%		南比企
7	須恵器長頸甕	(7.5)	3.0		B C D F	A	灰褐色	30%		南比企
8	須恵器蓋		1.6		B C D F	A	青灰色	5%		南比企
9	須恵器鉢	2.5	12.0		B C D F	A	乳灰色	50%		南比企
10	須恵器甕	23.2	9.0		B C D F	A	灰色	20%		南比企
11	土師器甕	(14.8)	6.5		A B C F	A	茶褐色	10%		在地
12	甕	(25.3)			B D I	A	灰褐色	15%		常滑
13	甕		9.1	14.5	B D	A	灰褐色	20%	第2斜面第1トレンチ	常滑
14	播鉢		7.5	15.8	I	A	茶褐色	1%		常滑
15	甕	25.3	4.5		A C	B	橙褐色	10%	胎土分析No.3	在地

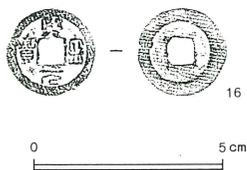
表採鑄造遺物観察表 (第397図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	鉄塊系遺物	3.0	1.8	0.2	4			銅1
2	梵鐘 撞座	7.9	3.7	1.9	58	径(12.7)		鑄型



第397図 表採遺物(1)

表採遺物は古代・中世の土器とともに炉壁や滓をはじめとする鑄造遺物を多く検出した。この内第397図～398図の1～16を図化する。2は梵鐘鑄型の撞座部分で金井遺跡調査の最初に表採した鑄型である。撞座とわかるまで時間を要した資料であり、5～10の須恵器遺物に惑わされたものの12の常滑焼甕の口縁部が遺跡の年代を最初に示した資料であった。16は熙寧元寶。



第398図 表採遺物(2)

VII 参考資料

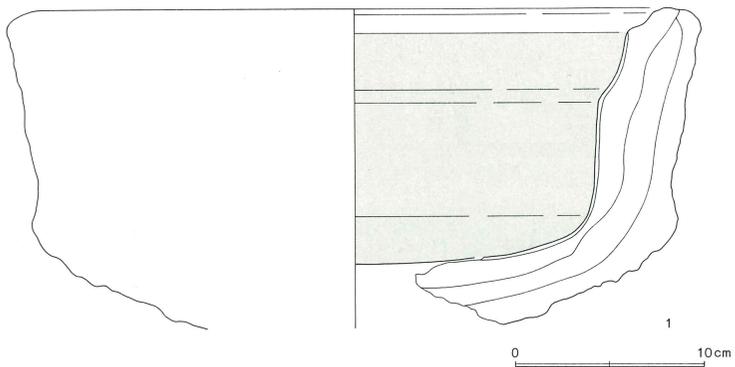
1 金井遺跡A区出土資料

金井遺跡A区から検出された第160号土壌内からは鍋鑄型（第399図1）と鉄製籬（第400図1～26）を検出した。

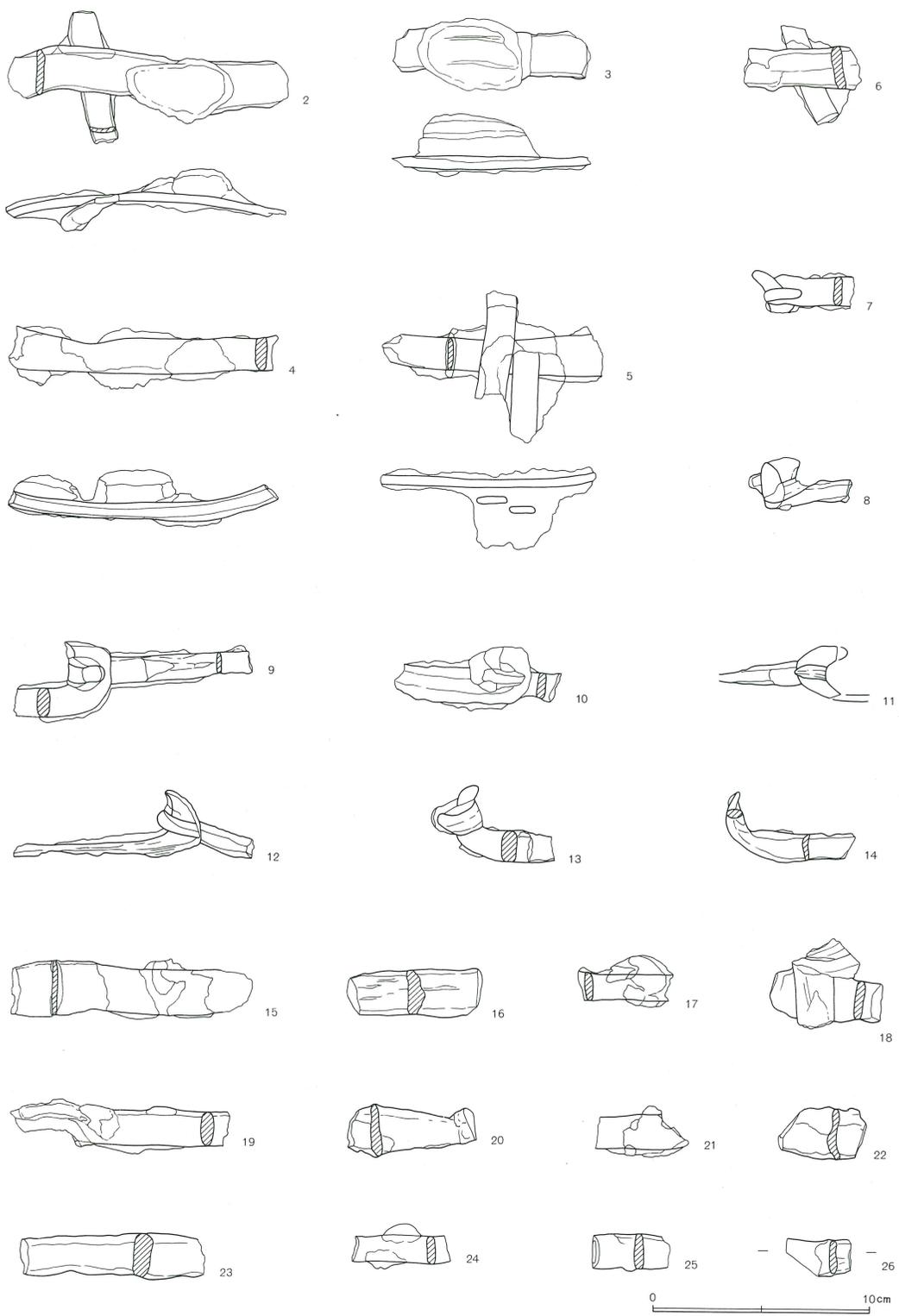
A区の位置はB区の北側に位置し、地形的には一段低い台地先端にあたる。東側に広がる第7区の立地条件に近似し同じローム台地上（武蔵野ローム面）と考えられる。A区にはこの他に鑄造遺構と考えられる痕跡はないが、中世の井戸跡や建物跡を検出しており、B区が鑄造遺構の中心的存在とすると、A区はこれを担う居住的存在とも考えられる。このような遺跡の存在は東側に隣接する足洗遺跡でも考えられる。鑄造遺物を検出した第160号土壌は円形の形態をしており、直径1.00m、深さ1.00mである。覆土は暗褐色で焼土粒子を混在しており、しまりをややもつ。遺物は覆土やや下層から鍋鑄型と鉄籬を検出した。

鍋鑄型の量量は口径29.0cm、器高12.2cm、底径21.0cm、口縁部の長さは3.6cmを測る。形態はやや丸味をもつ底部から体部が直線的に立ち上がり一段外に開いて口縁部となる。全体に深身のやや浅い丸型の鉄鍋と見られ、口縁部が外にあまり開かずやや長めである。鑄型は種型・荒真土・中真土・仕上げ真土の順で基型により型回しされ塗られ仕上げられている。真土は順次きめが細かく成るが径2～3cm程の小石が含まれるなど仕上げ真土以外はかなり雑な感じさえ受ける。仕上げ真土には黒味が塗られ木肌の仕上がりは非常に丁寧である。しかし、遺存状態はやや悪く、器面に細かなひびが割れが見られる。色調は、表面は湯が流されているため還元色の青灰色、器肉は酸化色の赤褐色、外面は褐色である。

鉄製籬は、鍋鑄型と共に出土した。このことは、既にこの時期に鍋鑄型の型締めには鉄製籬を使用したことが考えられ注目すべき資料である。これまで、型締めの方法として考えられていた方法は荒縄による方法がある。これは群馬県本宿・本郷遺跡出土の鍋鑄型の外面に縄の痕跡が確認されており、近世の倉吉の鑄物師例でも荒縄が使用されている。こうした事実からすれば特徴的技術法として捉えられる。籬の大きさはいずれも破片であるため正確な所は掴めないが、幅2cm前後、厚さ3mm前後の平たい板状である。しかも、端部は鉤の手状に屈曲しその先端は尖り、交差してフックし、繋がっている。また、第400図2・5・6に見られるように鑄と共に破片が重なりあっているものや緩やかな湾曲をもつものも存在する。



第399図 金井遺跡A区第160号土壌出土遺物(1)



第400图 金井遺跡A区第160号土壙出土遺物(2)

2 二反田遺跡出土資料

埼玉県日高市二反田遺跡からは鑄造土壌および鑄造遺物を検出した。中でも、注目すべき点は溶解炉の炉底部を検出したこと。そして、出土鑄造遺物の組成が金井遺跡B区と似ていることである。このことは、二反田遺跡の鑄造技術が金井遺跡の技術と非常に近いことを示したものと考えられ、鑄物師集団の関連性が強いと考えられる。

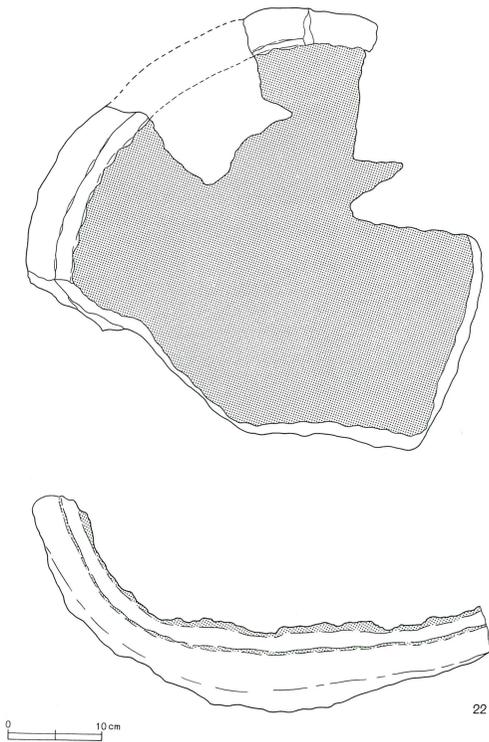
二反田遺跡から検出された鑄造遺物は鉄塊0.7%、炉壁72.6%、鉄滓13.5%、木炭0.2%、白色滓1.5%、石1.7%、鑄型0.9%、土器0.1%、羽口7.6%で175636gである。検出された遺物は金井遺跡と同種のものであるが、鑄造遺物は炉壁に対して羽口の割合が多い傾向が見られる。また、緑青を吹く滓や炉壁片は確認できなかったものの、白色滓の存在や炉壁の湯滓面には黄褐色や白色滓、或いは、赤褐色の滓が見られた。また、鉄滓1～3として分類した滓の内、鉄滓3は緑色の色調をもつガラス質の滓である。この滓は銅の溶解時にできる滓の可能性が高いと考えられているが、分析の結果、『二反田遺跡』(1993 岡本)の大沢氏の分析によれば、銅滓の可能性を示唆している。このことから、本遺跡では鉄以外にも銅の鑄造生産活動も存在していたことが滓の分析から指摘された。

検出した遺物の一部は第401図の溶解炉と第402図1～15を図示した。溶解炉は推定内径50.0cmの円形をした炉底部分にあたる。さらに、第402図の1・2の炉壁片にも認められるが内面の溶解面(湯滓面)は2面確認でき金井遺跡でも再三検出されているように「ル」の部分は粘土を張り込んで修復し、再び溶解炉として使用するということが本遺跡でも見られ、炉の形態や構造上の特徴に近似性が指摘できる。

次いで、第402図の5～9は金井遺跡でもSD7から出土しているが「クライ」と判断した資料と考えられる。10～12の羽口はいずれも破片であり完形品の出土は見られない。13～15は鑄型片であるが鑄型面は平坦であり、製品の特定はできていないが、真土の載せ具合や合わせ部分から犁のような造り方の製品を考えたい。

このように、二反田遺跡の鑄造遺物が金井遺跡と非常に近い関係にあることが理解できた。二反田遺跡からは、鑄造生産の時期を示す遺物は、検出されていない。

本遺跡の南東には、近世の柏原鑄物師の存在が知られ、関連性があるものと考えられる。



第401図 二反田遺跡出土溶解炉



第402図 二反田遺跡出土遺物

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集

金井遺跡B区

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

—IX—

(第2分冊)

平成6年10月20日 印刷

平成6年10月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

T E L (0493) 39-3955

印刷

望月印刷株式会社